

## 第4章 重要文化財長塀の復旧

### 1. 事業対象箇所の設定・名称

重要文化財建造物長塀は、熊本城の南面を画する竹の丸に位置し、坪井川に沿って東西に延びる木造塀である。塀は川端の一直線の石垣（H545・546）上に建てられ、両端が馬具櫓台石垣・平御櫓台石垣に取り付く。昭和8年（1933）に熊本城の遺構として宇土櫓ほか12棟の建造物とともに旧国宝の指定を受けて、昭和25年（1950）の文化財保護法改正により重要文化財となった。

長塀は、全長242.44m（134間）、棟高2.09mの木造瓦葺屋根の塀で、背後に建てられた控石柱と塀本体を控貫・足下貫で繋いで支える構造をとる。上部表面（南側）を大壁、背面（北側）を真壁の白漆喰仕立とし、下部表面を彫子下見板張、背面を豎羽目板張目板打とする。

塀は石垣（H545・546）上に安山岩製の塀基礎石を設置し、その上面の柄穴に柱を建てる構造である。基礎石は長方形を呈し、表面に粗いノミ調整を残す。長さ90～190cm（110cm前後が主体となる）、幅25cm前後、高さ20cm前後を測る。基礎石上部には約90cm間隔で方形の柄穴が彫られている。これらは本柱の柄と組み合う1辺5cm角のものと、その間を埋める一辺3cm角のものが交互に配置されている。控石柱は本柱の背後に約2間間隔（約3.48m）で建てられており、68本を数える。これらは凝灰岩製と安山岩製（島崎石）のものがある。軸部は一間ごとに本柱を建て、各本柱を3箇所の貫材で繋ぐ。軒・小屋組は本柱の上に棟木を柄差しで置き、腕木を出した上に出桁を載せ、野地板を直接載せる構造である。屋根は目板瓦（棧瓦）葺きである。昭和52年（1977）の保存修理では、戦前の修理によって改変されていた部分を本来の形に戻す改修が行われた。また、長塀背面の補強が行われている。昭和34年（1959）の毀損届の添付図面（第59図）にみられるように、腕木下から控石柱の足元を結ぶ斜めの筋違い材が本柱に設置されている。

長塀の控石柱は石材・形状により以下の4種類に分けられる。

A類：頭部がカマボコ型を呈する凝灰岩製のもの

B1類：頭部が四角錐形を呈する凝灰岩製のもの

B2類：頭部が四角錐形を呈する安山岩製（島崎石）のもの

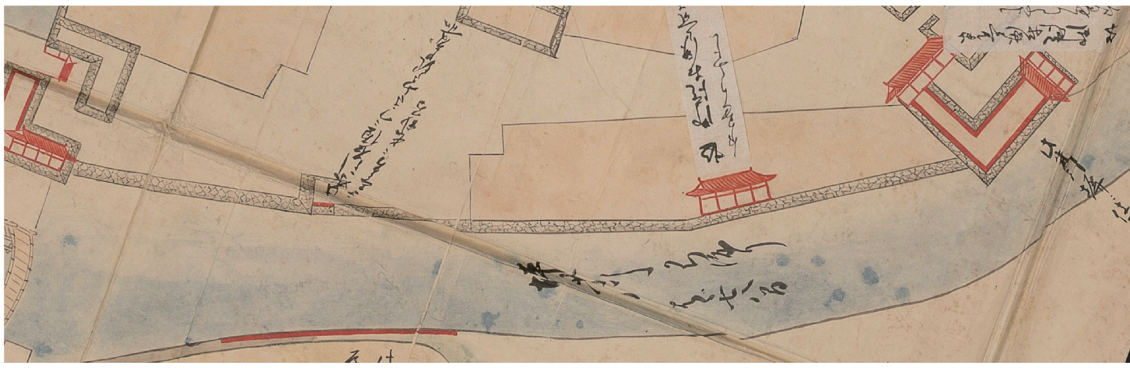
C類：頭部を粗割で方形に整形した凝灰岩製のもの（平成3・4年の新補材）

なお、A類・B1類の控石柱は、平成8年度（1996）修理で新補材とした控石柱No.67を除き、昭和2年（1927）以前のものであるが、B2類の一部については戦後の保存修理の際に取り替えた新補材を含む。

### 2. 被災・修復履歴

長塀の基礎となる坪井川沿いの石垣は、寛永11年（1634）に細川忠利が熊本城の修理・普請のため、幕府へ提出した「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」（熊本県立図書館蔵）に記載されており、細川家の熊本転封以前の加藤家段階には原形となる塀があったと考えられる。絵図には塀の中ほどに坪井川岸に開く虎口を石垣で塞ぐ旨が描かれており、この普請の結果、現在と同規模の長大な塀となったとみられる。長塀には挟間や石落としが見られないが、江戸時代前期の城内を描いた「御城図」（公益財団法人永青文庫蔵）には10箇所の石落としが塀に記されており、その後の改変で失われたとみられる。また、文献資料として寛延2年（1749）に江戸幕府に提出された石垣の修理願いに、本丸南南東の方角で「高サ三間半、幅百拾間塀下石垣」とあり、長塀下の石垣が修理されたと推測されている。7月に修復願絵図が提出され、8月11日付で許可されている。

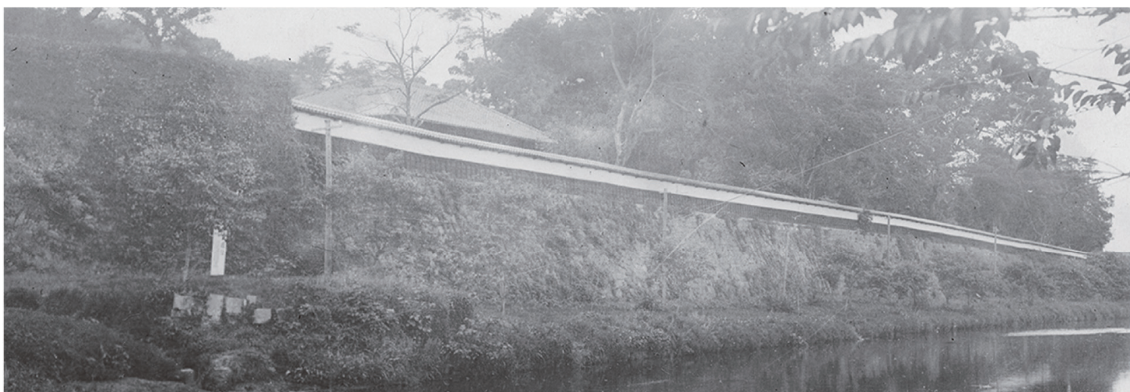
明治10年（1877）の西南戦争では政府軍が籠城し、長塀付近に陣地が造られた。西南戦争後の馬具櫓台



『肥後国熊本城廻普請仕度所絵図』（寛永11年（1634））の長塀周辺（熊本県立図書館所蔵）



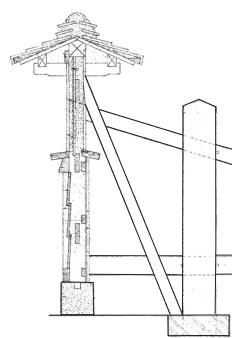
『御城図』（江戸時代前期）に描かれた長塀（公益財団法人永青文庫所蔵）



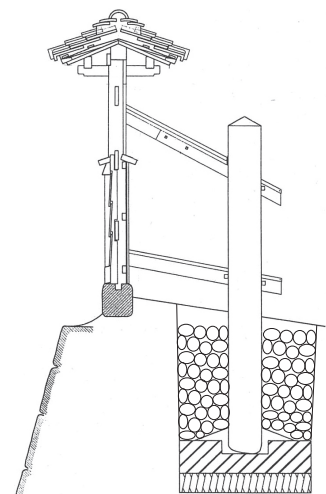
昭和4年の長塀（左端に馬具櫓台が写る）南西側より（昭和4年熊本城史蹟請願書写真）



長塀基礎石と控石柱



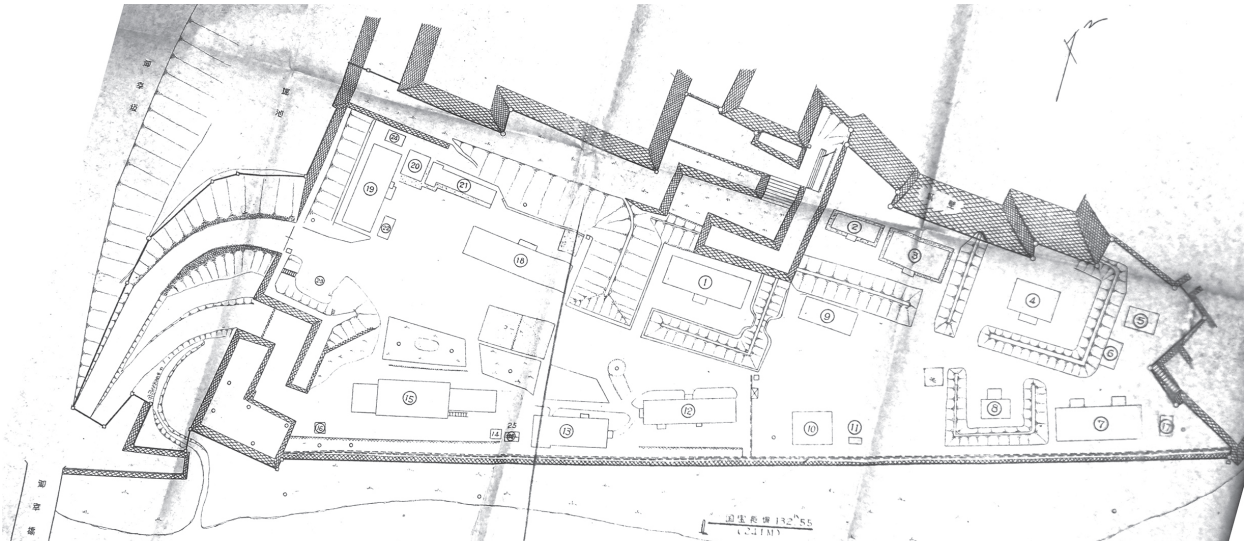
昭和34年段階の長塀  
（昭和34年度毀損届）



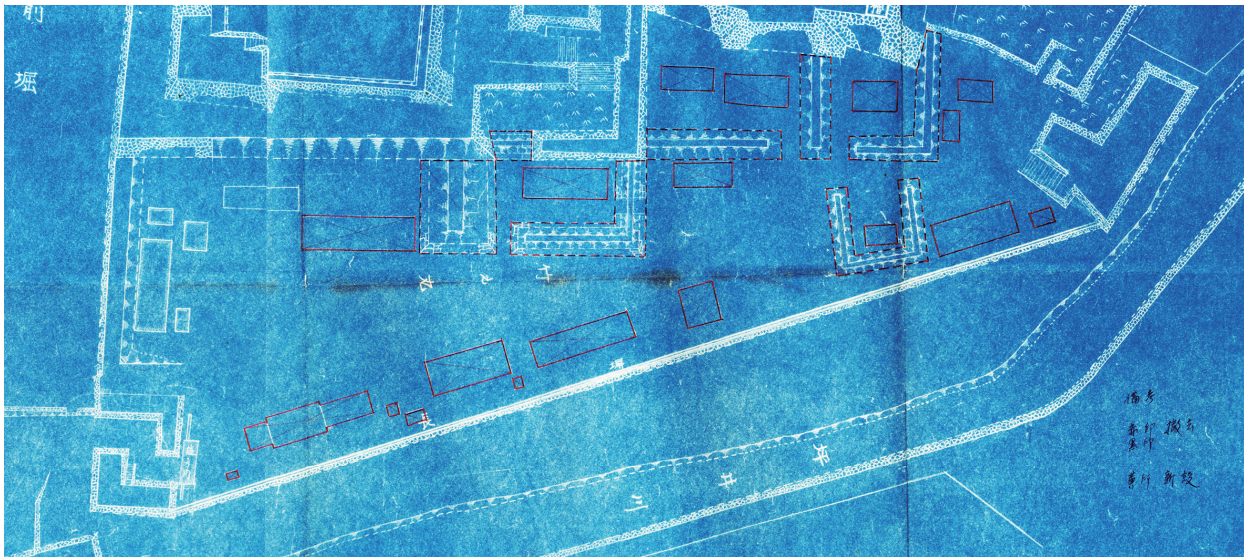
断面図

昭和52年以降の長塀  
（昭和52年度修理工事計画図）

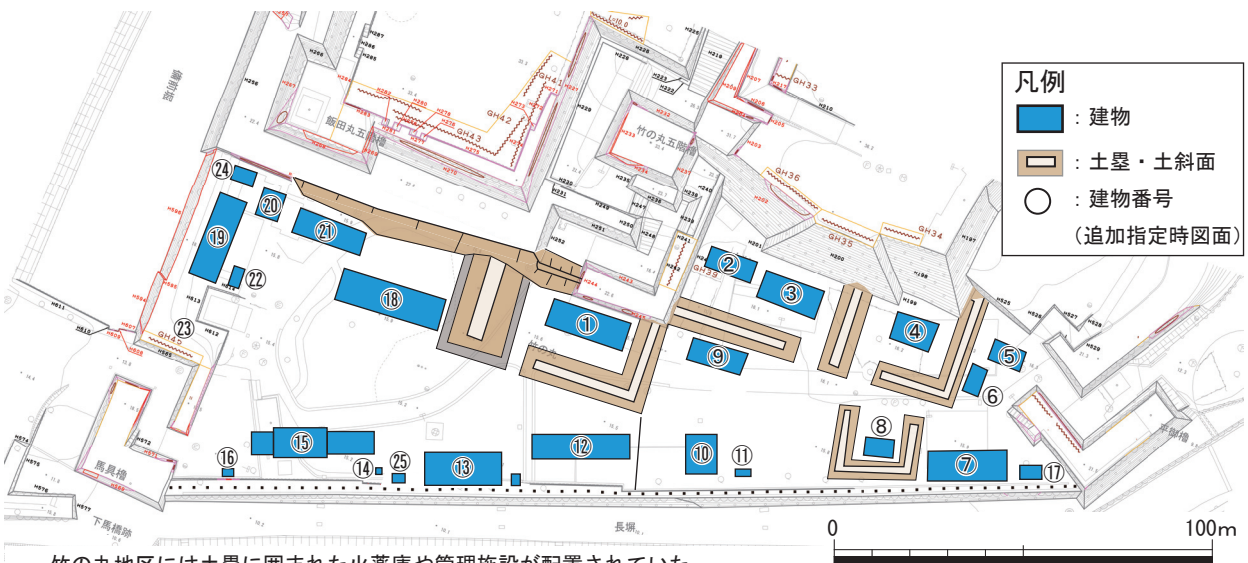
第59図 重要文化財長塀概要図



昭和 29 年 岳ノ丸史跡追加指定申請書添付図面（米軍からの返還時の状況図）



昭和 34 年 岳之丸現状変更申請書添付図面（朱書きが撤去建物）



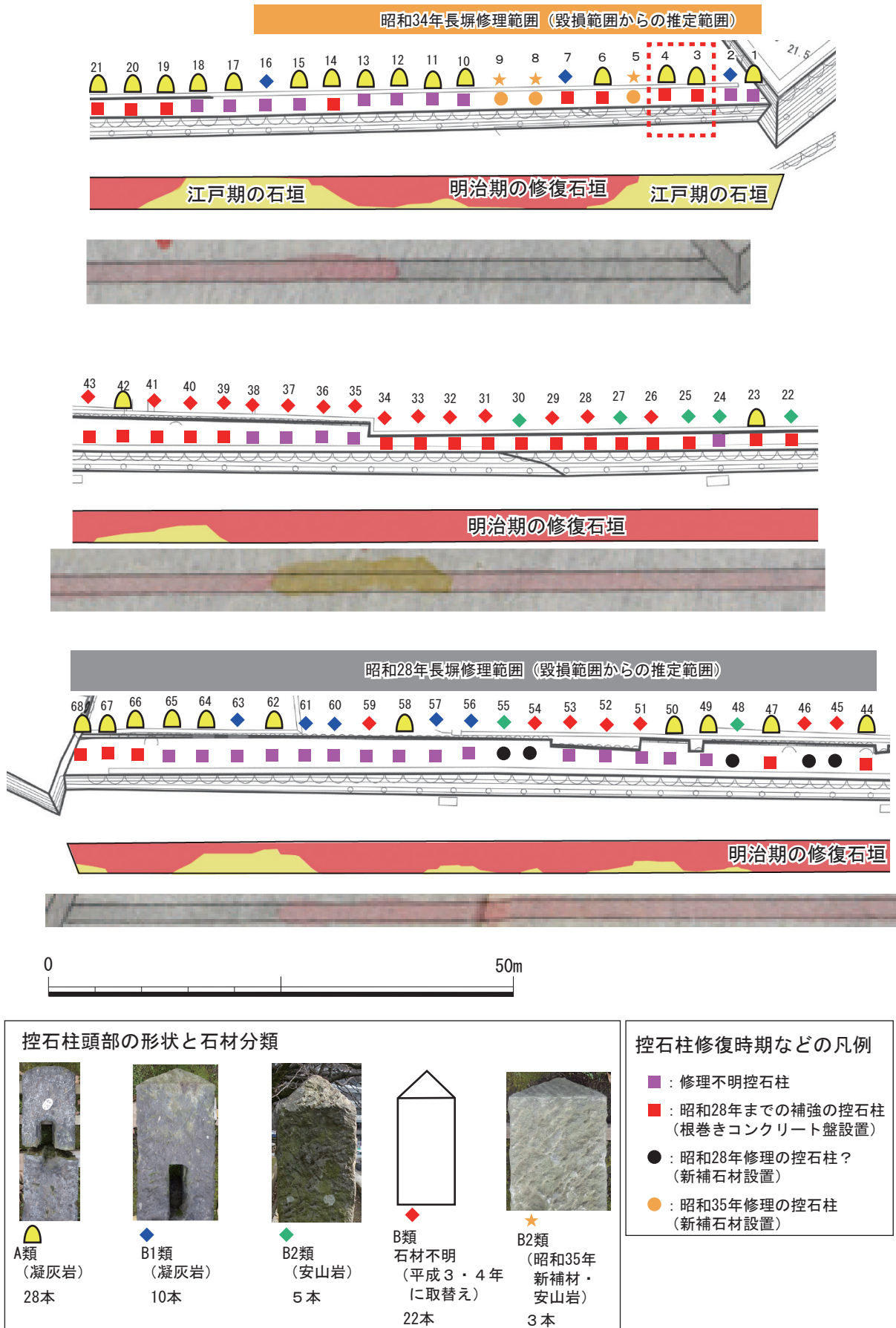
竹の丸地区には土塁に囲まれた火薬庫や管理施設が配置されていた。  
（上記 2 図面を基に作成）

※曲輪の表記は申請書の表現を踏襲している

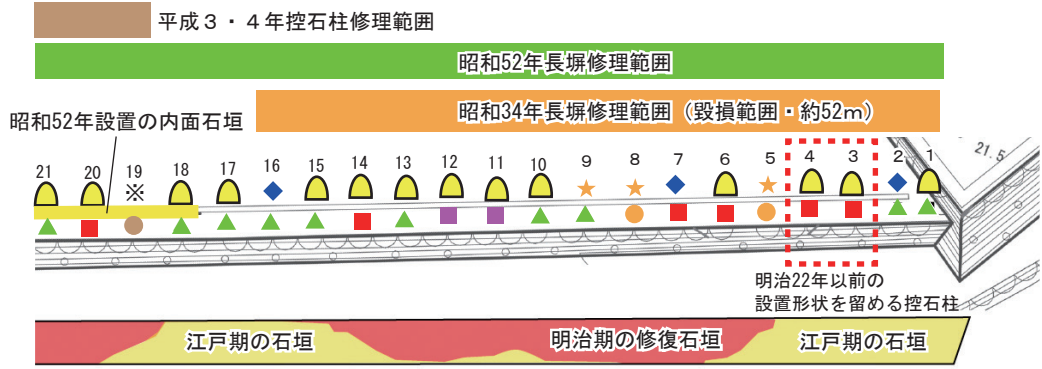
第60図 竹の丸地区の旧日本陸軍・米軍施設図(昭和35年整備前の状況)



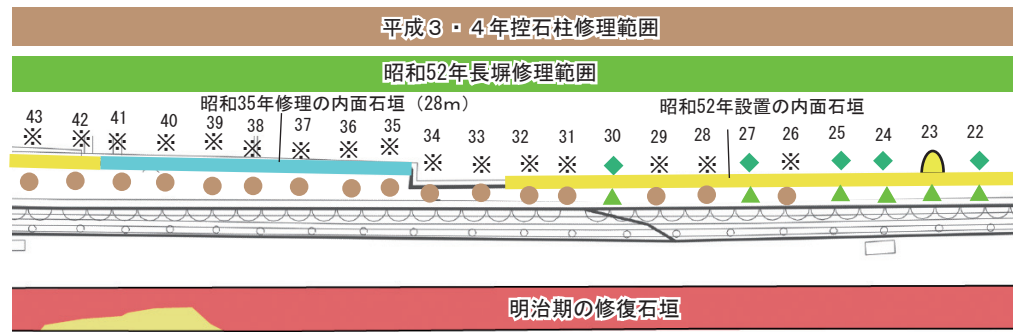
第61図 長塀周辺の石垣番号図



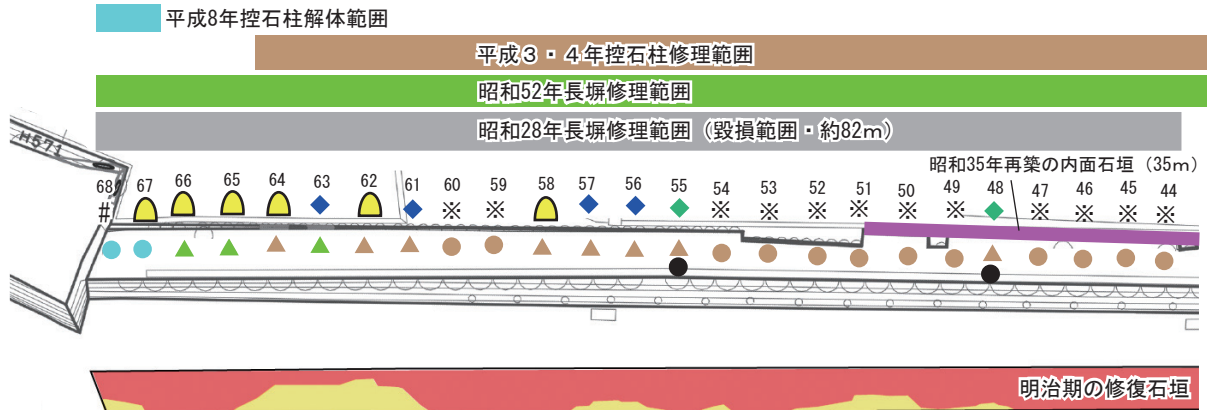
第62図 長堀控石柱の種類と修復時期(昭和52年以前)



昭和52年長塀修理範囲



明治期の修復石垣



明治期の修復石垣

控石柱頭部の形状と石材分類



- A類 (凝灰岩) 21本
- # A類 (平成8年新補材・凝灰岩) 1本
- B1類 (凝灰岩) 9本
- B2類 (安山岩) 5本
- B2類 (昭和35年新補材・安山岩) 3本
- C類 (平成3・4年新補材・凝灰岩) 29本

控石柱修復時期などの凡例

- : 修理不明控石柱
- : 昭和28年までの根巻きコンクリート補強
- : 昭和28年修理の控石柱? (新補石材設置)
- : 昭和35年修理の控石柱 (新補石材設置)
- ▲: 昭和52年修理の控石柱 (抜き取り・据え直し)
- : 平成3・4年修理の控石柱 (新補石材設置)
- ▲: 平成3・4年修理の控石柱 (抜き取り・据え直し)
- : 平成8年解体の控石柱

第63図 長塀控石柱の種類と修復時期(平成29年現在)

第18表 長堀控石柱・控石柱設置坑など修復時期一覧

控石柱 No.	平成29年時点での控石柱分類	平成29年度時点での控石柱の基礎構造(▲は推定)	平成3・4年度の修理対象(工事計画段階)	平成3・4年度新補石材	昭和52年度新補石材	昭和52年時点での控石柱基礎構造	昭和52年度修理対象	昭和52年11月修理前の控石柱	昭和52年11月以前の基礎構造	昭和35年度新補石材	昭和34年度毀損範囲	昭和29年新補石材	昭和28年度毀損範囲
1	A類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	A類	昭和2年?修理		○		
2	B1類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	B1類	不明		○		
3	A類	昭和2年?修理				昭和2年?修理		A類	昭和2年?修理		○		
4	A類	昭和2年?修理				昭和2年?修理		A類	昭和2年?修理		○		
5	B2類	昭和35年修理				不明		B2類	不明	控石柱取り替え	○		
6	A類	昭和2年?修理				昭和2年?修理		A類	昭和2年?修理		○		
7	B1類	昭和2年?修理				昭和2年?修理		B1類	昭和2年?修理		○		
8	B2類	昭和35年修理				不明		B2類	不明	控石柱取り替え	○		
9	B2類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	B2類	不明	控石柱取り替え	○		
10	A類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	A類	不明		○		
11	A類	?				不明		A類	不明		○		
12	A類	?				不明		A類	不明		○		
13	A類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	A類	不明		○		
14	A類	昭和2年?修理				昭和2年?修理		A類	昭和2年?修理		○		
15	A類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	A類	不明		○		
16	B1類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	B1類	不明		○		
17	A類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	A類	昭和2年?修理				
18	A類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	A類	添石				
19	C類	平成3・4年修理		C類		昭和52年修理	○	A類	昭和2年?修理				
20	A類	昭和2年?修理				昭和2年?修理		A類	昭和2年?修理				
21	A類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	A類	昭和2年?修理添石				
22	B2類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	B2類	昭和2年?修理添石				
23	A類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	A類	昭和2年?修理添石				
24	B2類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	B2類	添石				
25	B2類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	B2類	昭和2年?修理添石				
26	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理添石				
27	B2類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	B2類	昭和2年?修理添石				
28	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理添石				
29	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理				
30	B2類	昭和52年修理				昭和52年修理	○	B2類	昭和2年?修理添石				
31	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理添石				
32	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和2年?修理添石		B類	昭和2年?修理添石				
33	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理添石				
34	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理				
35	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	不明				
36	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	不明				
37	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	不明				
38	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	不明				
39	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理添石				
40	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理				
41	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理				
42	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	A類	昭和2年?修理				
43	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理添石				
44	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	A類	昭和2年?修理				○
45	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理				○
46	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	昭和2年?修理				○
47	C類	平成3・4年修理	○	C類				A類	昭和2年?修理				○
48	B2類	平成3・4年修理	○					B2類	添石(方形)あり			控石柱取り替え?	○
49	C類	平成3・4年修理	○	C類				A類	添石(方形)あり				○
50	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	A類	添石(方形)あり				○
51	C類	平成3・4年修理	○	C類				B類	添石(方形)あり・横に方柱が倒置				○
52	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	不明				○
53	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	添石(方形)あり				○
54	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	添石あり(方形?)				○
55	B2類	平成3・4年修理	○			昭和52年修理	○	B2類	不明			控石柱取り替え?	○
56	B1類	平成3・4年修理	○			昭和52年修理	○	B1類	添石				○
57	B1類	平成3・4年修理	○			昭和52年修理	○	B1類	添石				○
58	A類	平成3・4年修理	○			昭和52年修理	○	A類	添石(円縁)あり				○
59	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B類	添石(円縁)あり				○
60	C類	平成3・4年修理	○	C類		昭和52年修理	○	B1類	不明				○
61	B1類	▲平成3・4年修理	○			昭和52年修理	○	B1類	不明				○
62	A類	▲平成3・4年修理	○			昭和52年修理	○	A類	不明				○
63	B1類	昭和52年修理	○			昭和52年修理	○	B1類	添石				○
64	A類	▲平成3・4年修理	○			昭和52年修理	○	A類	不明				○
65	A類	▲昭和52年修理	○			昭和52年修理	○	A類	不明				○
66	A類	▲昭和52年修理	○			昭和52年修理	○	A類	昭和2年?修理				○
67	A類	平成8年修理				昭和52年修理	○	A類	昭和2年?修理				○
68	A類	平成8年修理				昭和52年修理	○	A類	昭和2年?修理				○
合計			37本	28本	0本			53本		3本		5本?	
備考			基礎のコンクリート盤をすべて除去	計画書では控石柱30本を取り替え				コンクリート基礎設置		仕様書には3本と記載	倉庫解体中の事故被害範囲52m	仕様書には5本と記載	西側82m部分が倒壊

基礎構造の凡例  
 昭和2年?修理 : 控石柱の地表付近に方形のコンクリート盤を設置  
 昭和35年修理 : 基礎にコンクリートを敷設  
 昭和52年修理 : 亀腹状の上面を持つコンクリート盤  
 平成3・4・8年修理 : 控石柱のコンクリート盤を撤去して素掘りに設置

付近や平櫓台付近を撮った写真には長塀が写っておらず、範囲は不明であるが、陣地造営のため少なくとも塀の一部が撤去されたと考えられる。その後、長塀は再建されたとみられるが、明治22年（1899）の熊本地震（金峰山地震）では、長塀下の石垣（H545・546）のかなりの部分が崩落・変状した。塀の修理については明確な資料はないものの、熊本城を管理していた旧日本陸軍によって石垣とともに修理されたと考えられる。

昭和2年（1927）には宇土櫓などの修理に伴い長塀も修復され、昭和8年（1933）には旧国宝に指定された。昭和25年（1950）には改正文化財保護法により重要文化財となった。

戦後の長塀の毀損および修復履歴は以下の通りである。

昭和28年（1953）5月10日、老朽化により西側約82mが倒壊し、昭和28・29年（1953・54）に崩落箇所について控石柱5本の取り替えを含む解体修理が行われた。昭和34・35年（1959・60）には旧第6師団の施設（弾薬庫やそれを取り巻く土塁、倉庫など）を撤去し、公園化する史跡整備工事が竹の丸地区で行われた。昭和34年（1959）4月24日に起こった長塀の毀損（東端約52mが倒壊）は、煉瓦倉庫の解体時の事故が原因であった。昭和35年（1960）には、木材29kgや控石柱3本、瓦2,520枚などの取り替えを含む解体修理が行われた。また、昭和47年（1972）に屋根瓦葺き替え工事が実施された。昭和52年（1977）には台風被害を受けて、全体の解体修理が実施され、控石柱No.29の据え直しの際に、瓦片や煉瓦などが混じる土層において、滴水瓦と日足文軒丸瓦が出土している<sup>1</sup>。平成3年（1991）の台風被害を受けて、平成3・4年度（1991・92）に部分解体修理が実施された。平成24年度（2012）には馬具櫓復元に伴う石垣修理に伴って部分解体修理が行われた<sup>2</sup>。

平成27年（2015）8月25日に熊本市を襲った台風15号により西側部分に傾きが生じたため、修理までの仮復旧が行われていたところ、平成28年熊本地震により東側約80mが内側へ倒壊し、控石柱・瓦などの部材に毀損が生じた。このため、台風の被害箇所を含めた塀全体の解体・崩落部材回収を平成28年（2016）12月15日～平成29年（2017）3月18日に実施した。

### 3. 復旧方針

平成29・30年（2017・2018）に基礎構造等の確認のため発掘調査が実施され、平成31年（2019）4月から以下の仕様により復旧工事が行われた。

【基礎】石垣上面に縦長の安山岩製基礎石を設置。

【軸部】基礎石上にある一間毎の枿穴に本柱を差し、貫3箇所を通して軸部とする。北側に二間毎に控石柱を置き、控貫、足元貫で本柱につなぐ。

【棟・小屋組】本柱上に棟木を枿差で置き、南北に腕木を出し、出桁を載せ、野地板を直接載せる。

【屋根】棧瓦（目板棧瓦）三枚葺で、棟は熨斗瓦を2枚、雁振に丸瓦を使用。棟部分の目地に漆喰を塗布。

【壁】南側上部を大壁、下部を簾子下見板張。北側上部を真壁の白漆喰仕上、下部を豎羽目板張目板打。

なお、文化財としての価値を損ねないように、破損など強度的に弱まった材を新材に取り換える以外は解体した建築部材や瓦をそのまま使用している。

このほか、今回の復旧では塀本体及び控石柱の基礎部分にコンクリートで補強して耐震化を図るとともに、本柱と控石柱の基礎をつなぐステンレス製の筋交いを入れるなど、耐風対策も講じることとした。



## 4. 発掘調査

### (1) 調査の目的と方法

平成 28 年熊本地震により長堀の東側約 80 m が倒壊したことを受けて、前年の台風 11 号により被災して仮復旧していた西側部分も含めて、長堀の復旧修理を行うにあたり、その基礎資料を得るための遺構確認等を目的とする確認調査を実施した。

調査期間は平成 29 年（2017）11 月 6 日～平成 30 年（2018）1 月 31 日〔平成 29 年度〕と平成 30 年（2018）8 月 9 日～8 月 31 日〔平成 30 年度〕の 2 次にわたって実施した。

平成 29 年度では、控石柱の基礎構造の把握や被災状況の確認および、長堀下の石垣（H545・546）背面の栗石層範囲の確認、周辺遺構の有無や遺存状況の確認、長堀西半部が載る石塁の形成時期などを目的に、計 5 箇所の特レンチ（特レンチ 01～05）を設定して調査を実施した。また、長堀は、これまでも台風等により度々被害を受けており、復旧にあたっては、伝統工法以外の構造補強も視野に入れた復旧も考慮する必要があったため、調査では、遺構に影響を及ぼさない範囲（近代以降の盛土や掘削等により既に遺構が損壊されている箇所）の確認も行った。なお、本発掘調査に係る現状変更は、平成 29 年 8 月 16 日付け熊本城発第 196 号で申請し、平成 29 年 9 月 15 日付け 29 受庁財第 4 号の 965 で許可を得ている。

また、平成 30 年度にも損傷が激しく交換が必要な控石柱 4 本（No.7・17・18・44）の地下構造の確認を目的に、01-②及び追加の特レンチ計 3 箇所（特レンチ 06～08）を設定し、調査するとともに、前年度実施した確認調査における特レンチ（特レンチ 04）で確認された江戸期の可能性のある土層に、控石柱の補強基礎設置に伴う掘削が影響する可能性があったため、追認の調査を併せて実施した。さらに長堀保存修理工事に付随して行われた側溝修理に伴い石積の暗渠排水路が確認されたため、暗渠の残存状況及び延長方向を把握することを目的に特レンチ（特レンチ 10）を設定して、調査を実施した。なお、本発掘調査に係る現状変更は、平成 30 年 6 月 18 日付け熊本城発第 97 号で申請し、平成 30 年 7 月 20 日付け 30 受庁財第 4 号の 664 で許可を得ている。

いずれの調査も掘削・精査はすべて人力で行い、必要最小限の掘削に止めた。

### (2) 基本層序

長堀周辺の層序は、以下のとおりである。

I 層：表土層

II 層：史跡整備などに伴う現代の盛土層

III 層：江戸期（または明治 22 年以降）～昭和 34 年までの旧表土層・盛土層

IV 層：明治 22 年の熊本地震後の修復石垣に伴う石垣背面の栗石層や整地土層

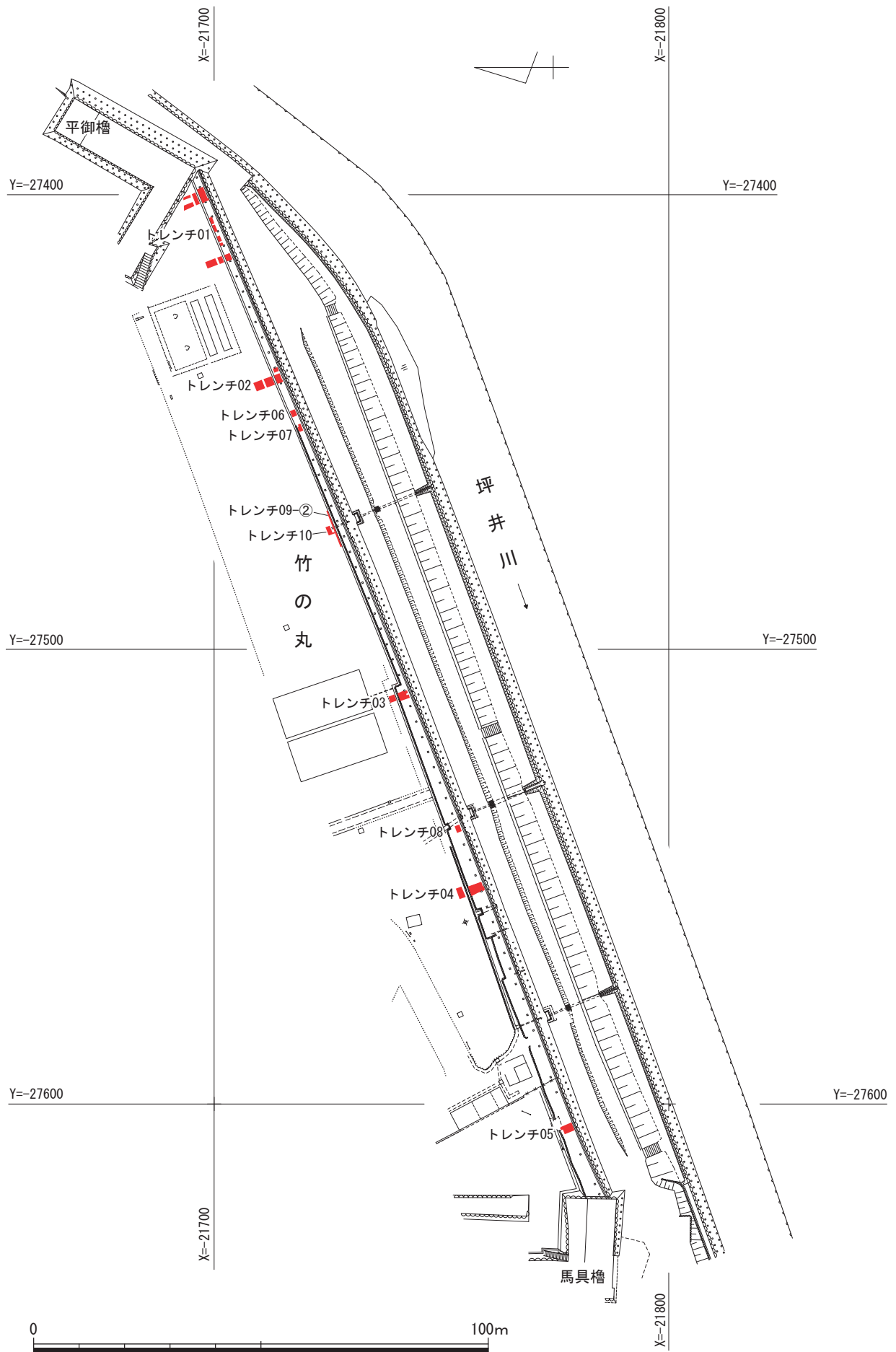
V 層：江戸期の整地土層や江戸期石垣背面の栗石層

### (3) 遺構・遺物

#### ① トレンチ 01（第 65～77 図）

##### 【トレンチの設定】

石垣（H545）の江戸期の栗石層と明治期の栗石層の範囲確認や控石柱 No.2～7 の設置坑を確認するため、江戸期の石垣天端石が残る平御櫓台付近の背面とその周辺（調査範囲 20 m×6 m）に 4 箇所の特レンチ（特レンチ 01-①～④）を設定した。さらに平成 30 年度に、平成 29 年度の調査で控石柱 No.7 の設置坑を確認するため設定した特レンチ 01-② a 区を再掘削し、控石柱 No.7 に掛かる特レンチ東壁から南北 1 m、東西 50 cm の小特レンチを設定して、控石柱の下部構造の確認を実施した。



第64図 長堀トレンチ配置図

## 【層序など】

Ⅱ層は橙色土層（トレンチ 01-①4層、トレンチ 01-②2層）を境として上下に分かれる。橙色土層やこの下の煉瓦片やコンクリート片、瓦片が大量に混じる暗赤褐色土（トレンチ 01-①5層）や褐灰色土（トレンチ 01-②3・4層）などは、昭和 35 年度（1960）の史跡整備に伴う盛土層である。出土した大量の煉瓦には壁の形状を留めるブロックも混在しており、建物を撤去した際に生じた廃材であったとみられる。昭和 34 年（1959）の竹の丸地区の史跡整備に先立つ現状変更申請書の添付図面には、撤去する建物としてこの付近に旧日本陸軍の倉庫が記されており、昭和 34 年の長塀毀損はこの倉庫解体中の事故が原因であったことが確認された。トレンチ 01-①北側にある平御櫓付近の高まりは、橙色土層（昭和 35 年）より新しい時期の盛土（トレンチ 01-①2・3層）であることが確認された。

Ⅲ層は少量の煉瓦片やガラス片を含むしまりが弱い褐灰色土など（トレンチ 01-①6層、トレンチ 01-②5・12層）であり、整地土層などの上面を覆う旧地表層である。トレンチ 01-①a 区やトレンチ 01-③、トレンチ 01-④の塀基礎石～控石柱付近では、昭和 2 年（1927）の長塀修理工事に伴う化粧土とみられる灰褐色粘土のブロック土を含むにぶい赤褐色土など（トレンチ 01-①10層、トレンチ 01-③・④6層）が確認された。この土層は控石柱No.3の控石柱設置坑や塀基礎石を石垣天端石に固定するために設けたコンクリート層を一部覆っており、コンクリートを使用した修理に伴うものと考えられる。Ⅲ層からは西南戦争時に政府軍が使用したとみられるスナイドル銃薬莖（第 77 図 105）がトレンチ 01-①a 区より出土した。

明治期の修復石垣に伴うⅣ層はトレンチ 01-②a 区やトレンチ 01-④の一部（トレンチ 01-②10層、トレンチ 01-④10～12層）で検出され、その他の場所ではⅢ層直下にⅤ層（江戸期の整地土層）が確認された。側溝の南側では、石垣天端へ向かってⅤ層上面が緩やかに上がっており、幅約 1.4 m、高さ約 0.2 mの土塁状の高まりとなっている。

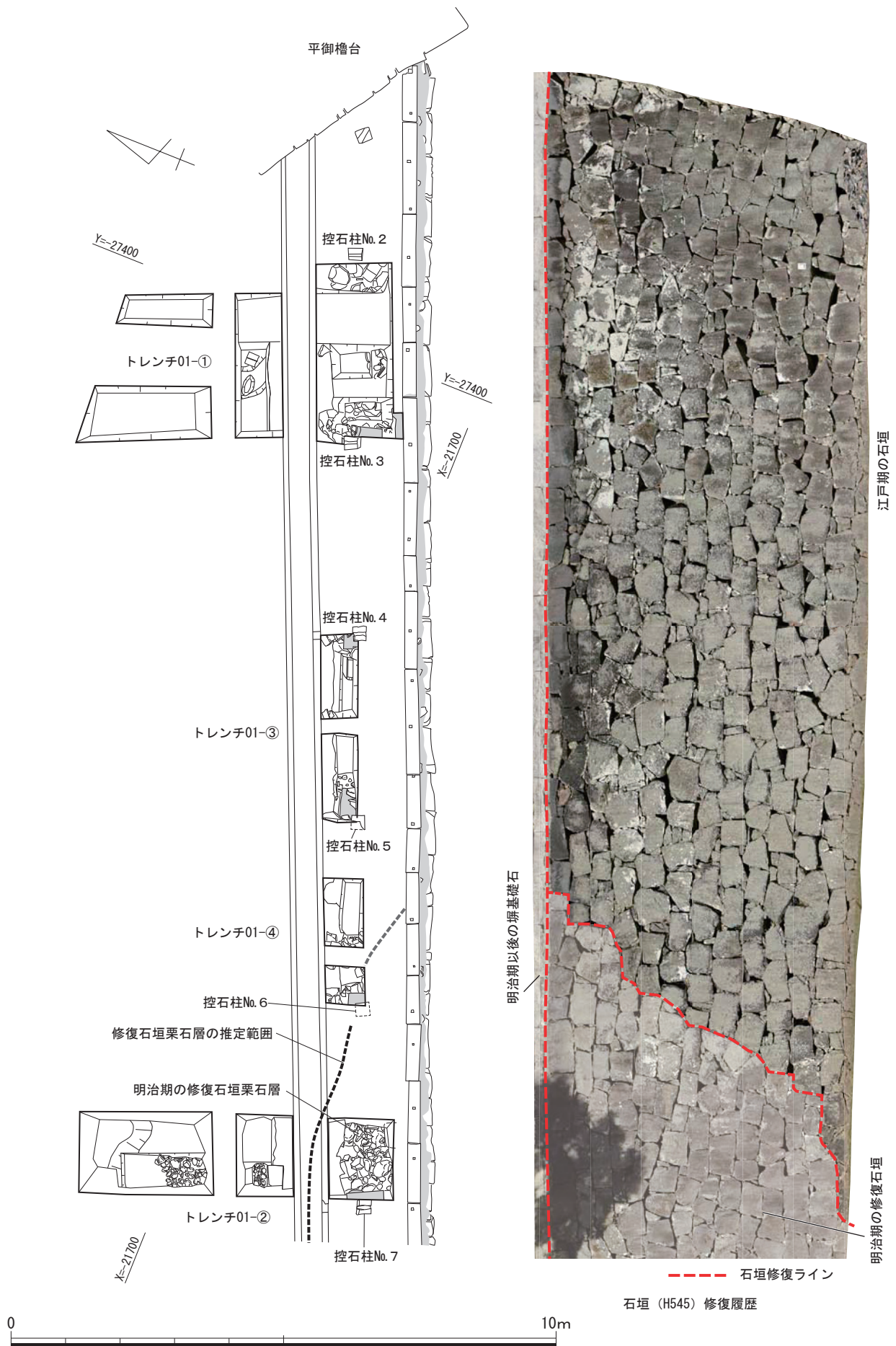
平成 30 年度（2018）の調査でも、トレンチ 01-②a 区の層序は表土の下に、山砂層と昭和 35 年の史跡整備に伴う盛土層のⅡ層（橙色土や煉瓦片や瓦片を多く含む灰褐色土など、厚さ 10～60cm）があり、その下にⅣ層（明治 22 年熊本地震後の修理石垣の背面裏込層）となることがあらためて確認された。

なお、昭和 52 年（1977）の修理では、当該トレンチ周辺の土砂流出が認められたため、赤土を混ぜた山砂を使用して、突き固めたことが報告書に記載されている<sup>3</sup>。

## 【石垣（H545・546）裏込層】

長塀が載る石垣（H545・546）は明治 22 年熊本地震により大きく被災し、その後に修復されたこと（第 65 図）が知られている。この調査の結果、石垣（H545・546）の内、天端まで江戸期の石垣が残る部分は平御櫓台付近の東端約 15.5 mに過ぎないことが判明した。江戸期の天端石が残る石垣背面に設定したトレンチ 01-①a 区やトレンチ 01-③、トレンチ 01-④では、Ⅲ層直下では栗石層ではなく、江戸期の整地土層（少量の瓦片を含むにぶい赤褐色土や暗赤褐色土など）が検出された。栗石層の確認のため小トレンチを設定したトレンチ 01-①a 区では、整地土層上面より 0.2～0.65 m下で栗石層が検出された。栗石層上面は石垣背後へ向かって下がっており、検出高の比高差約 0.65 mを測る。栗石層の検出幅は石垣尻より 1.1 m以上を測る。江戸期の栗石は人頭大の円礫を主体とし、一部に角礫を含む。

明治期に修復された石垣背面の栗石層が想定される範囲に設定したトレンチ 01-②やトレンチ 01-④b 区ではⅢ層直下（トレンチ 01-②a 区）や厚さ 0.1 m程度の覆土を挟んでその下（トレンチ 01-④b 区）から明治期の栗石層が検出された。栗石層上面の北端はトレンチ 01-②ではa 区とb 区間の側溝部分（想定幅 2.3 m）であるのに対して、修復範囲の東端に近い位置のトレンチ 01-④b 区では、トレンチ南壁面付近（幅 1.1 m）と狭くなっている。明治期の栗石はコブシ大～人頭大の大きさであり、円礫と角礫がほぼ半々の割合で認められる。



第65図 長塀トレンチ01平面図・石垣(H545)修復履歴

## 【控石柱およびその設置坑】

トレンチ 01 では控石柱No.2～7 の 6 本の控石柱が設置されていたが、今回の地震によりいずれも根元より破断した。

〔控石柱No.2〕 地上高 145cm、幅 25cm を測る頭部 B1 類のもので、現状で下方の柄穴下端で折れている。昭和 52 年 (1977) の保存修理工事の際に石材の抜き取りを伴う補修が行われた。設置坑は 1 辺約 1.3 m を測る方形を呈する。基礎を押さえる大型の礫を据え、それらを砂で埋め戻している。押さえの礫の中には控石柱の旧材とみられる頭部がカマボコ型を呈する凝灰岩製の石柱片も認められる。

〔控石柱No.3〕 頭部 A 類のもので、1 辺約 25cm、長さ 230cm 以上、地上高 145cm を測る。上下の柄穴部分と方形のコンクリート盤下面の 3 箇所折れている。また、コンクリート盤も中央で破断している。この設置坑は、埋土上部に控石柱のコンクリート盤が認められるものの、石そのものの抜き取り痕跡が認められないことから、コンクリート盤より下は石を据えた際の構造を残しているものと考えられる。その構造は江戸期の整地土層を掘り込んだ素掘りの土坑 (直径 1.3 m、深さ 0.65 m 以上) の中央に控石柱を据え置き、石の周囲をコブシ大～人頭大の礫で固めるものであった。埋土はにぶい赤褐色などを呈するしまりの弱い土であり、まばらにコブシ大の礫を含む。土坑上面は修理の際に表面に貼ったとみられるにぶい褐色土 (化粧土) が覆っている。

〔控石柱No.4〕 頭部 A 類のもので、地上高約 132cm、1 辺約 25cm を測る。下方の柄穴中程で折れている。柄穴は長さ約 20cm、幅約 6 cm を測る。地表付近に方形のコンクリート盤が設置されている。設置坑は江戸期の整地土を掘り込んで造られており、半径約 90cm、深さ 25cm 以上を測る。しまりの弱い灰褐色土の埋土をもつ。

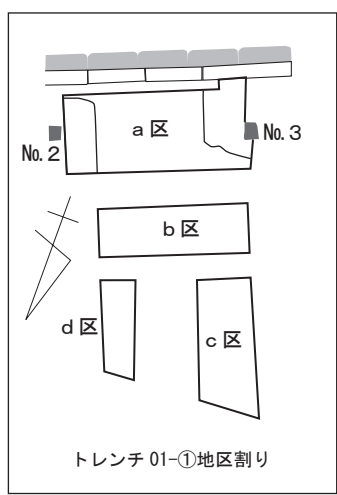
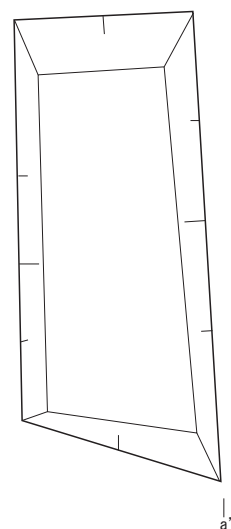
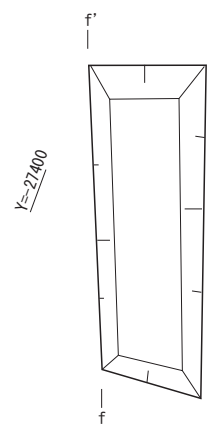
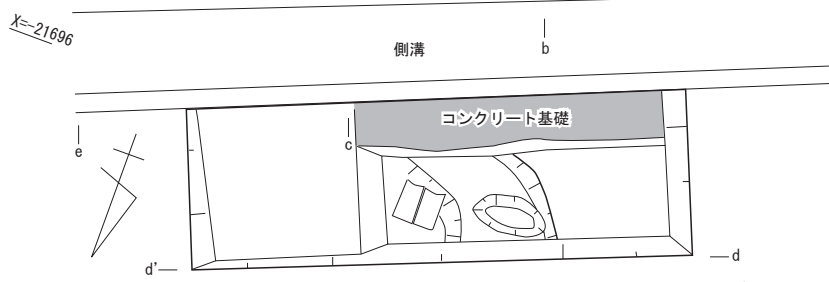
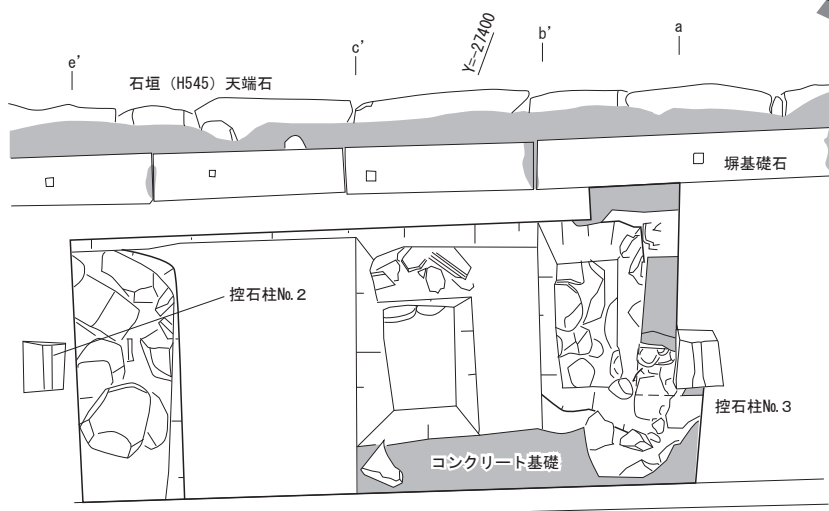
〔控石柱No.5〕 昭和 35 年 (1960) の保存修理工事の際に取り替えられた新補材であり、頭部 B2 類である。確認高 200cm、1 辺約 25cm を測る。この設置坑は 1 辺 1.6 m ほどの方形を呈する土坑であり、中心に控石柱を据え置き、コンクリートで固めて基礎としている。その上に基礎を押さえる人頭大の礫を並べ、砂で埋め戻している。基礎には煉瓦材や控石柱の旧材とみられる凝灰岩の角柱が貼り付いている。この土坑の 20cm ほど外側でコブシ大の円礫を含んだにぶい赤褐色土を埋土とする土坑埋土を検出した。位置的にみて、抜き取り前の控石柱設置坑であると思われる。

〔控石柱No.6〕 頭部 A 類のもので、埋設部分の上部に方形のコンクリート盤が巻かれている。地上高 152cm、1 辺約 26cm を測り、下方の柄穴下で折れている。設置坑は半径 60cm 程度のもので、埋土に礫が多く混じる。明治期とみられる整地土を切って掘り込まれている。

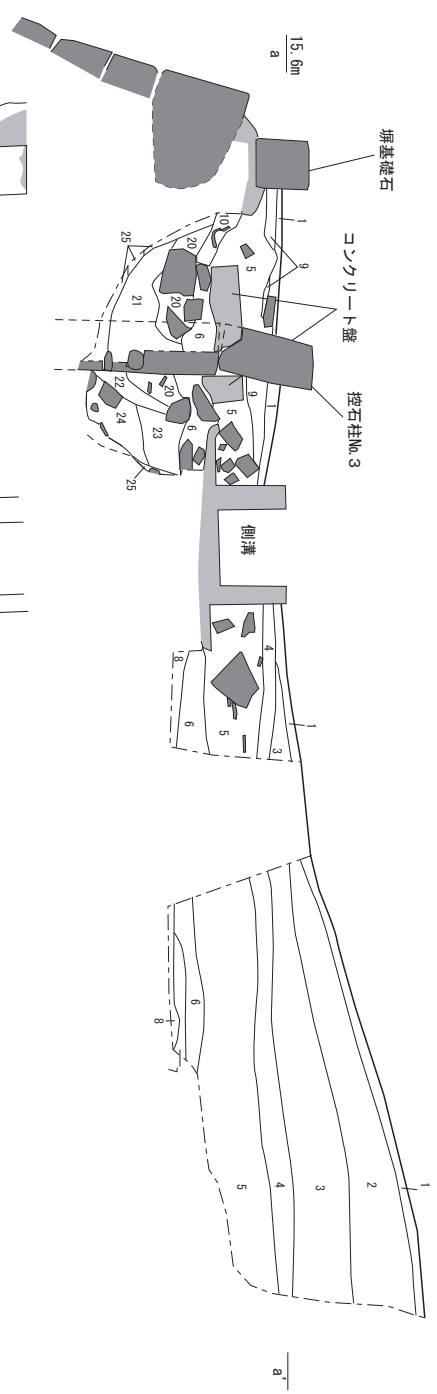
〔控石柱No.7〕 頭部 B1 類のもので、現状で下方の柄穴中程と、上方の柄穴の 2 箇所折れ、4 つの破片となっている。基礎の上部に方形のコンクリート盤が巻かれている。地上高 150cm、1 辺約 24cm、柄穴の長さ 19.5cm、柄穴の幅 7.5cm を測る。控石柱設置坑の検出を明治期修復石垣の栗石層上面で試みたものの、明確にできなかった。平成 30 年度 (2018) の調査では、基盤より下層の IV 層を掘削したところ、下部の控石柱を検出した。下部の控石柱は、中心軸が基盤上部の控石柱より北へズレており、破断が確認できたことから、コンクリート盤は昭和 35 年 (1960) 以前に控石柱No.7 の破砕箇所に巻きつけるように修理したものであることを確認した。なお、コンクリート盤は II 層 (現代の盛土) の中で収まるものであった。

## 【その他の遺構】

〔礫群 1・礫群 2〕 トレンチ 01-② b・c 区では江戸期の整地土 (瓦片を含み、しまりがある暗赤褐色土層) に覆われた 2 箇所の礫群を検出した。礫群 1 は直径 4～10cm 大の円礫を薄く敷き並べた礫群である。幅 23cm、検出長 43cm を測り、長堀とほぼ並行して延びる。礫上面の標高は 14.8 m である。礫群 2 も平らな円礫を主体とし、一部に瓦片が混じる。礫の粒径は 5～20cm 大である。この上面は北から南に向けて緩やかに下がっている。検出範囲が狭小なことから遺構の性格は判然としないものの、寛永 6～8 年頃



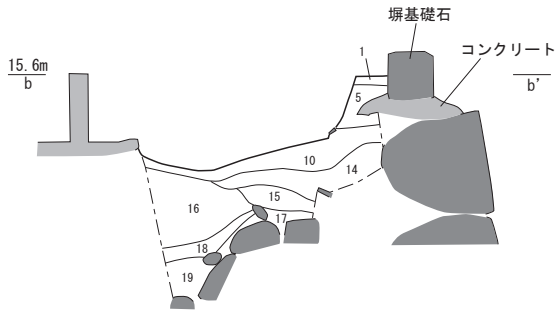
トレンチ 01-①平面図



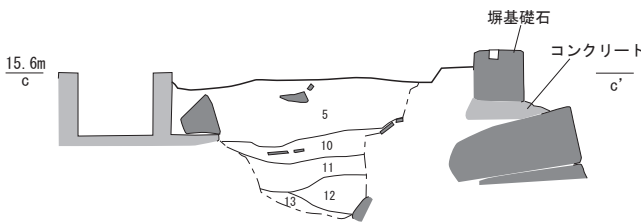
トレンチ 01-①西壁面図



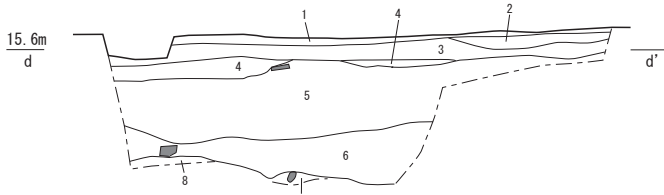
第66図 長塀トレンチ01-①平・断面図



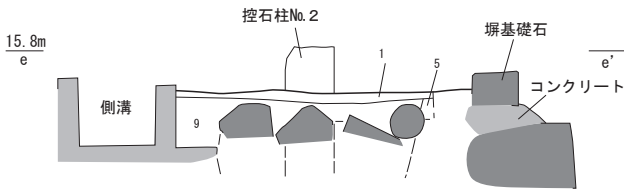
栗石層検出断面図 (1)



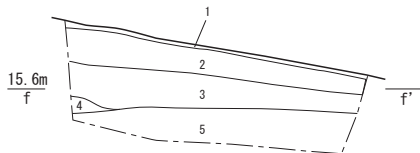
栗石層検出断面図 (2)



土層断面図



控石柱No.2 設置坑断面図



東壁面図 (d区)



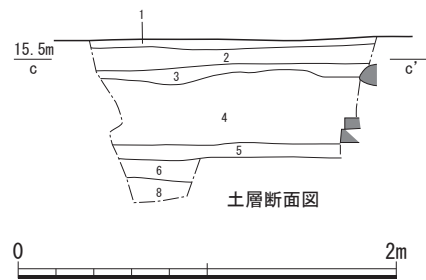
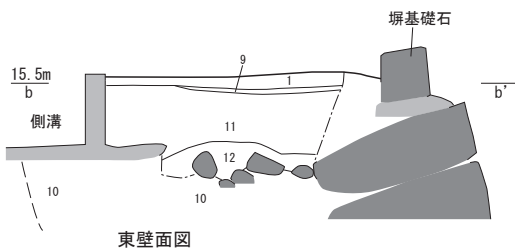
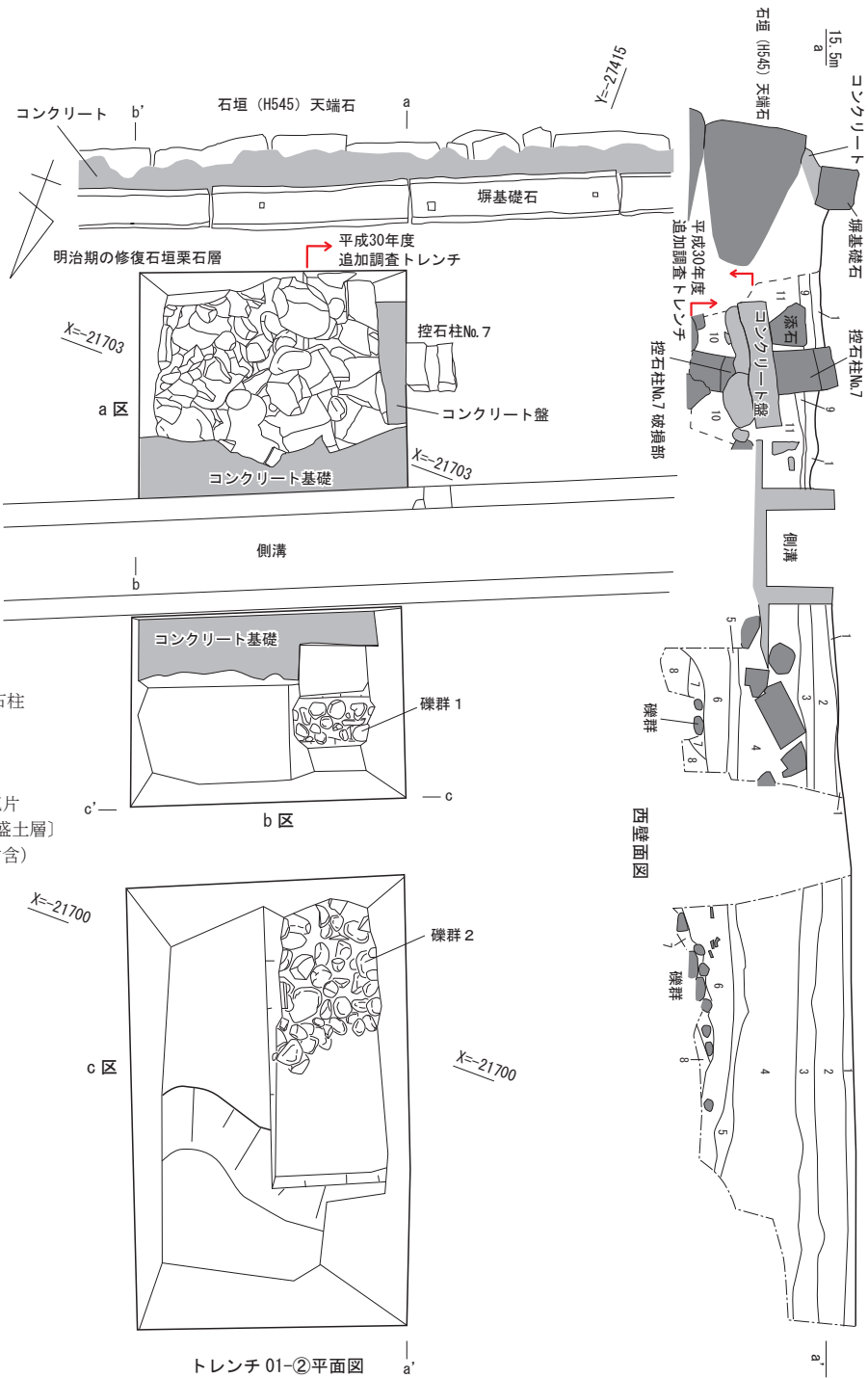
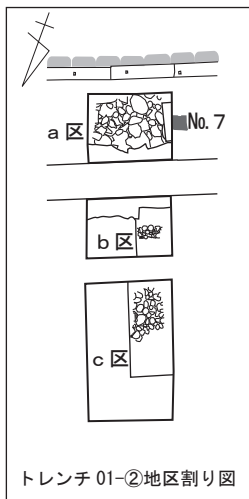
トレンチ 01-①

- 1 5YR3/1 黒褐色土〔表土層〕
- 2 2.5YR5/4 にぶい赤褐色土 (しまり弱)  
〔昭和 35 年以降の盛土層〕
- 3 5YR4/2 灰褐色土 (しまりあり)〔昭和 35 年以降の盛土層〕
- 4 5YR7/6 橙色土 (しまり強、細褐色土粒微量)  
〔昭和 35 年史跡整備の表土層〕
- 5 5YR3/3 暗赤褐色土 (しまり弱、人頭大の礫、煉瓦片、瓦片含)
- 6 5YR4/2 灰褐色土 (φ~1cm 小礫・砂粒混、瓦片含)  
〔江戸期~戦前頃の旧表土層?〕
- 7 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (しまり弱、砂粒混)  
〔江戸期の整地土層〕
- 8 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (しまりあり)  
〔江戸期の整地土層〕
- 9 2.5YR7/3 浅黄色砂 (しまりなし)  
〔昭和 35 年以降の控石柱設置坑の埋土・整備時の盛土層〕
- 10 5YR5/3 にぶい褐色土 (7.5YR6/2 灰褐色粘質土塊含)  
〔昭和 2 年修理時の化粧土層〕
- 11 5YR5/3 にぶい赤褐色土 (しまり強、砂粒混、瓦片含)  
〔江戸期の整地土層〕
- 12 5YR4/2 灰褐色砂質土 (しまり弱、砂粒多量、瓦片含)  
〔江戸期の整地土層〕
- 13 2.5YR3/2 暗赤褐色土 (しまり弱、瓦片含)  
〔江戸期の整地土層〕
- 14 5YR4/2 灰褐色土 (しまりあり、細粒)  
〔江戸期の整地土層〕
- 15 5YR5/2 灰褐色土 (しまりあり)  
〔江戸期の整地土層〕
- 16 5YR3/3 暗赤褐色土 (しまりあり、細粒)  
〔江戸期の整地土層〕
- 17 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (しまりあり)  
〔江戸期の整地土層〕
- 18 2.5YR3/3 暗赤褐色土 (しまりあり、細粒)  
〔江戸期の整地土層〕
- 19 5YR4/4 にぶい赤褐色土 (しまりなし)  
〔江戸期の整地土層〕
- 20 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (しまり弱、粗砂粒含、人頭大礫混、瓦片含)〔控石柱No.3 設置坑埋土〕
- 21 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (しまり弱、細粒、控石柱に接してコブシ~人頭大礫配置)〔控石柱No.3 設置坑埋土〕
- 22 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (しまり弱、細粒)  
〔控石柱No.3 設置坑埋土〕
- 23 5YR4/4 にぶい赤褐色土 (しまり弱、土坑端に人頭大礫混)  
〔控石柱No.3 設置坑埋土〕
- 24 5YR5/6 明赤褐色土 (しまり弱、コブシ大礫含)  
〔控石柱No.3 設置坑埋土〕
- 25 5YR4/3 にぶい赤褐色土〔江戸期の整地土層〕

第67図 長塀トレンチ01-①土層断面図

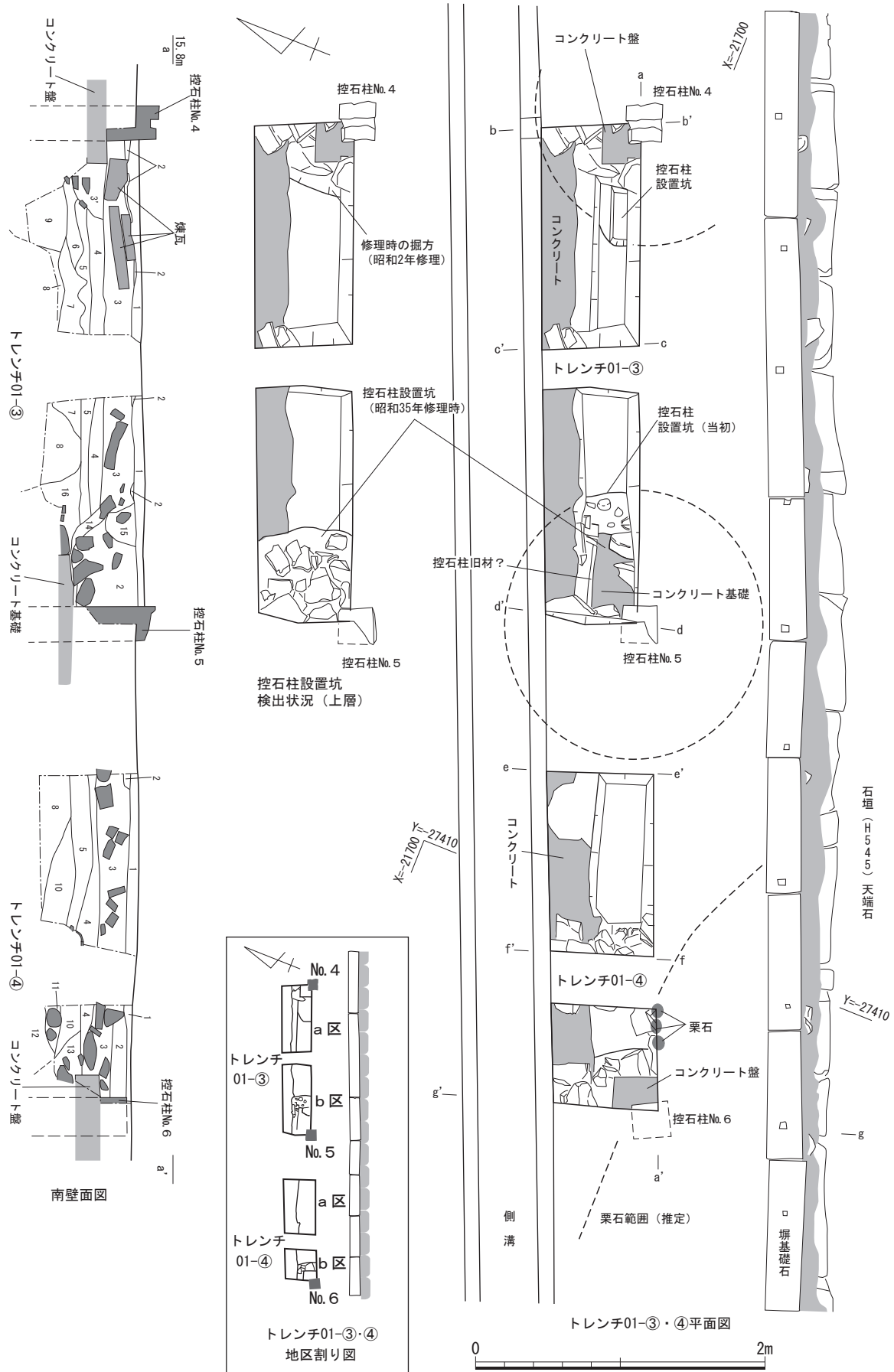
トレンチ 01-②

- 1 5YR3/1 黒褐色土〔表土層〕
- 2 5YR6/6 橙色土（しまり強、細褐色土粒微量）〔昭和35年史跡整備の表土層〕
- 3 5YR4/1 褐灰色土（しまり強、煉瓦片・瓦片含）〔昭和35年史跡整備の盛土層〕
- 4 5YR4/1 褐灰色土（煉瓦塊、コンクリート塊多量）〔昭和35年史跡整備の盛土層〕
- 5 5YR4/1 にぶい赤褐色砂質土（しまり弱、煉瓦片・瓦片含）〔明治～戦前頃の旧表土層？〕
- 6 5YR3/3 暗赤褐色土（しまりあり、瓦片含）〔江戸期の整地土層〕
- 7 5YR4/3 にぶい赤褐色土（しまりあり、φ8～17cm 円礫混、褐色土塊混。）〔礫群1・2層〕
- 8 7.5YR4/3 褐色土（しまりやや弱、細粒）〔江戸期の整地土層〕
- 9 10YR7/2 にぶい黄橙色砂（しまり弱）〔昭和35年以降の控石柱設置坑の埋土・整備時の盛土層〕
- 10 円礫・角礫層（土砂無）〔明治期の石垣修復に伴う栗石層〕
- 11 5YR4/1 褐灰色土（しまり弱、煉瓦片・瓦片含）〔昭和35年史跡整備の盛土層〕
- 12 5YR5/1 褐灰色土（しまり弱、瓦片含）〔明治22年以降の旧表土層？〕

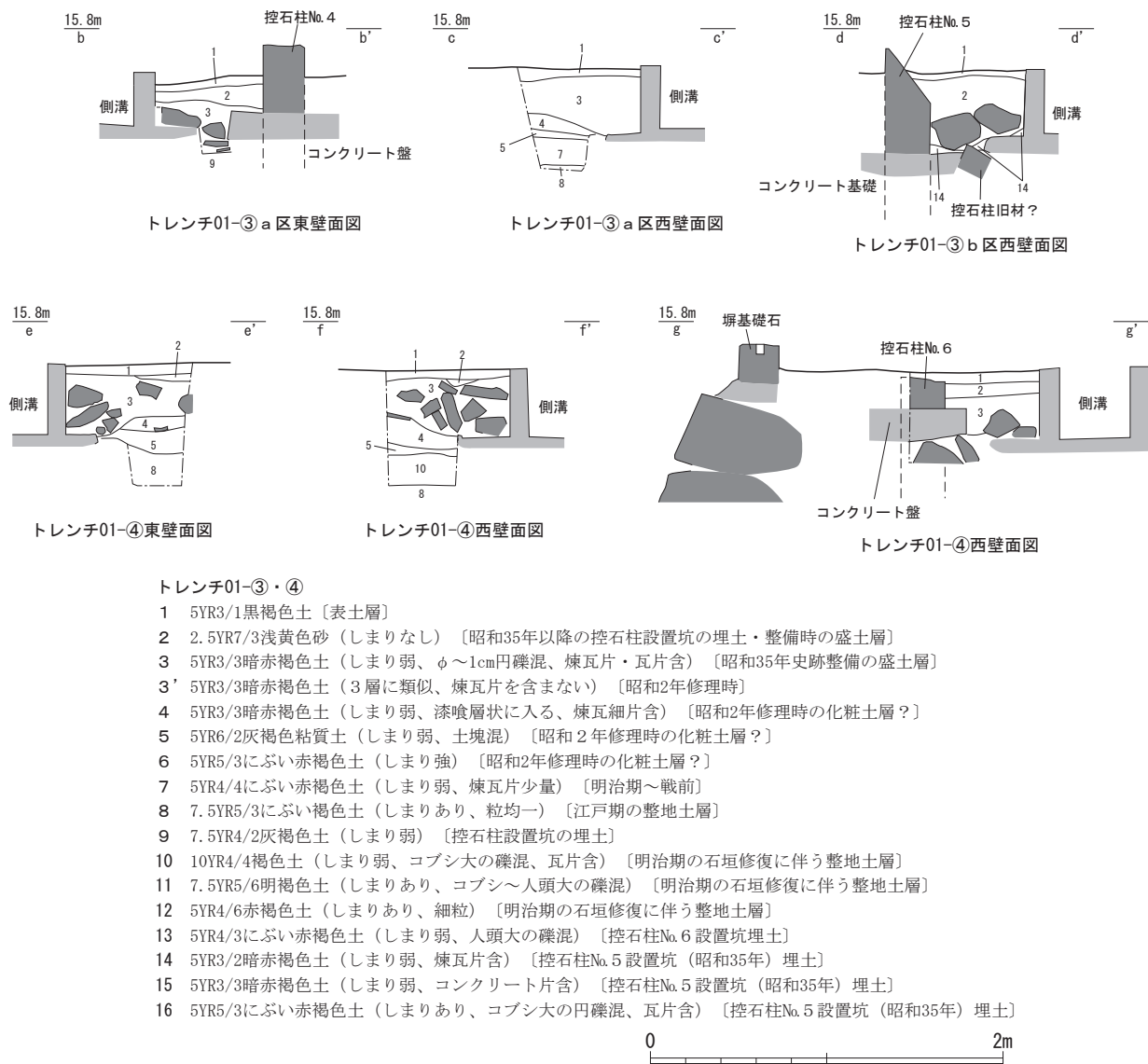


第68図 長堀トレンチ01-②平・断面図





第69図 長塀トレンチ01-③・④平・断面図



第70図 長堀トレンチ01-③・④土層断面図

(1629～1631)に描かれたとみられる「熊本屋舗割下絵図」(熊本県立図書館蔵)にはトレンチ付近に「ゑんしゃう蔵」(焰硝蔵)の表記があることから、関連する建物の基礎であった可能性も考えられる。

トレンチ01で検出された石垣(H545)の栗石層は、明治期修復石垣のものが旧表土直下に存在するのに対して、江戸期のものは天端石部分を覆う整地土層の下から検出される点や、明治期の栗石層上面が水平である一方、江戸期の栗石層上面は石垣背後へ向かって下がっており、検出高・構造とも大きく異なっていることが確認された。

控石柱は戦後の修理履歴がないもの(控石柱No. 3・4・6・7)に地表付近の地中に方形のコンクリート盤が設置されていることが確認でき、戦前のコンクリートが普及した時期(大正～昭和20年頃)に大きく修理されていたことが明らかとなった。また、江戸期の整地土層に設置された控石柱(No. 3・4)は、頭部A類であり、直径1.3mを越える素掘りの土坑の中央に石を据え、周囲を礫で固める基礎構造をもつことが明らかとなった。

#### 【遺物】

出土遺物の中で、瓦の呼称や表記については次の通りとする。

「目板瓦」は平面形が長方形を呈する平滑な板状の瓦の側端部前面に細長い直方体の目板を貼り付けた瓦とする。本丸御殿の報告書<sup>4</sup>で「板塀瓦」と報告していたものである。熊本地方で目板瓦と呼称していた

平瓦凹面側端部前半に蒲鉾状の目板を貼り付け棧瓦状の瓦にしたものは、目板棧瓦とする。軒先瓦の文様については、家紋として認識できる九曜紋・桔梗紋・蛇の目紋については「紋」を使用し、その他については「文」を使用する。

また、釘の分類については熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書1－飯田丸の調査－』熊本城調査研究センター報告書第1集 2014年のP114の分類に従った。

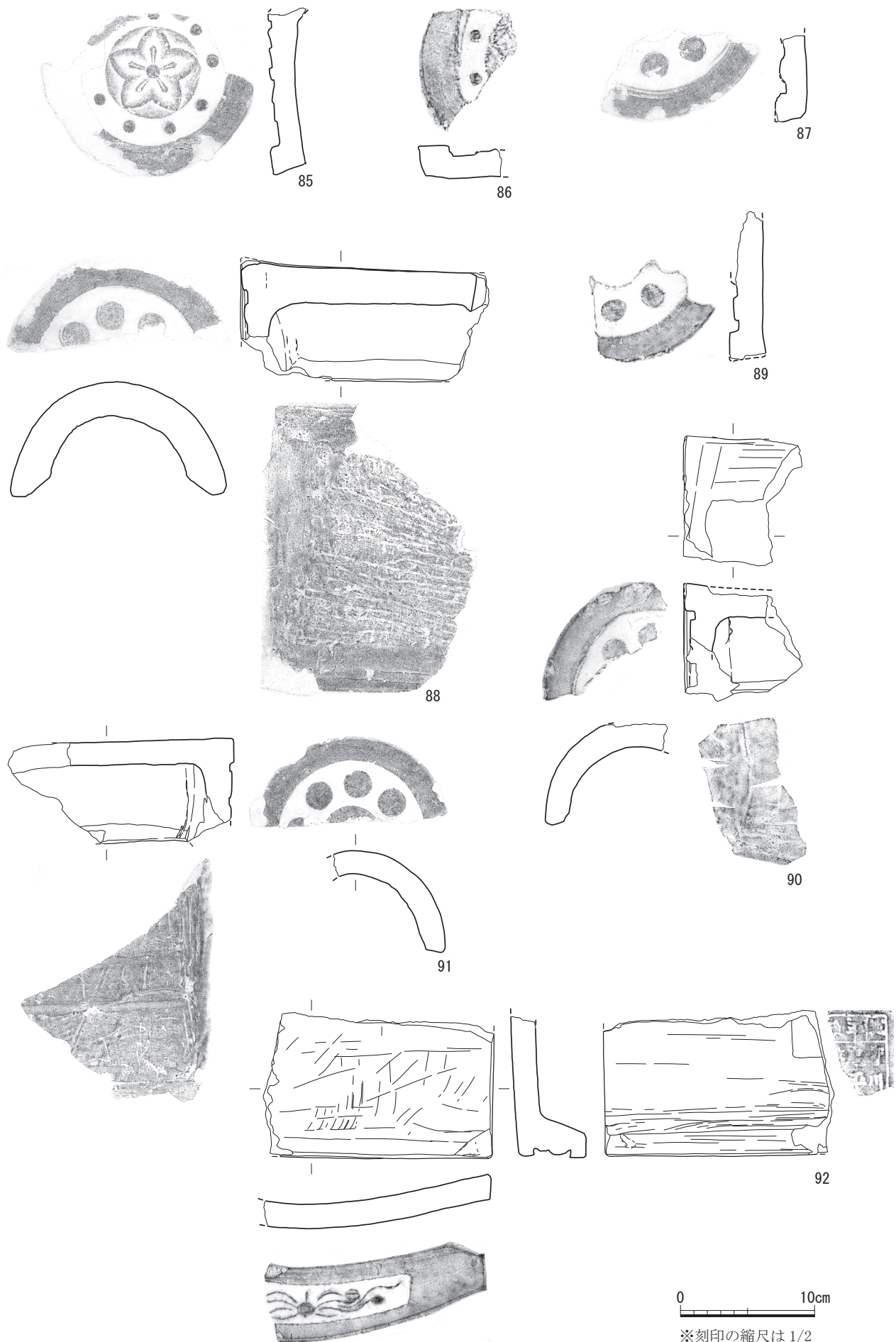
第71図85～92、第72図93～95、第73図96～99、第74図100・101、第75図102はトレンチ01から出土した瓦類である。85・94はトレンチ01-②a区栗石層(IV層)、86はトレンチ01-①a区整地土上面(V層)、87はトレンチ01-①b区表土(I層)、88・101はトレンチ01-①b区盛土層(II層)、89・90はトレンチ01-②a区表土・整地土(I・II層)、91はトレンチ01-③b区表土(I層)、92はトレンチ01-①c・d区盛土層(II層)、93はトレンチ01-①b区整地土層上面(II層)、95・97はトレンチ01-②表土(I層)、96・98はトレンチ01盛土層ほか(II層)、99はトレンチ01-②c区整地土層(V層)、100・102はトレンチ01-①a区盛土層(II層)から出土した。

85・86は桔梗紋軒丸瓦の瓦当片である。85は瓦当上半部の周縁部分が欠損するほかは4分の3程度、86は瓦当左下半部5分の1程度が残存し、丸瓦との接合部にカキヤブリが明瞭に認められる。瓦当文様は両者ともに桔梗紋の周囲に珠文を配するものである。85は珠文が3個欠損するほか、内区の雌蕊と雄蕊、花卉すべてが残存する。雌蕊と雄蕊の境は明瞭で、雄蕊の中心に沈線も表現され、先端は剣先状に尖る。花卉はやや丸みを帯び、各弁は雄蕊に向かって緩やかに窪む。雌蕊と珠文の頂部は丸みを帯びる。86は、珠文2個と花卉1弁の先端を残すのみで、雌蕊と雄蕊までは認められない。花卉はやや丸みを帯びるようである。両者ともに瓦当周縁・側端・裏面側縁近くは横方向のナデ、瓦当裏面の中心付近に不整方向のナデを施している。85の胎土には炭化した枝状の木質が認められる。

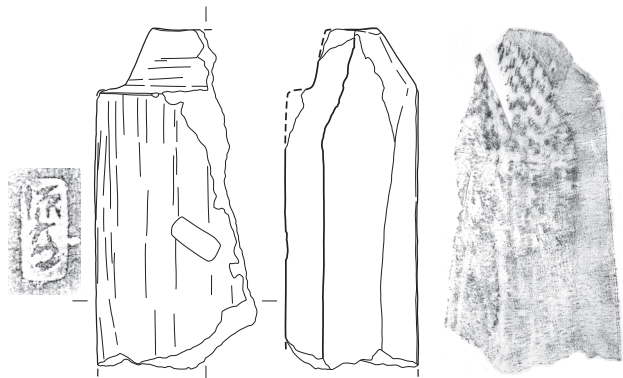
87～91は九曜紋軒丸瓦である。87は瓦当右下半部5分の1程度、88は瓦当上半部6分の1程度と丸瓦部、89は瓦当右下半部約4分の1程度、90は瓦当左上半部6分の1程度と丸瓦部、91は瓦当上半部2分の1程度と丸瓦部がそれぞれ残存する。瓦当文様については、91のみ中心曜の一部が認められるほか、周曜のみが残存し、87で周曜径1.8cm、周縁幅2.1cm、88で周曜径2.0cm、周縁幅2.0cm、89で周曜径2.0cm、周縁幅2.1cm、90で周曜径2.0cm、周縁幅1.8cm、91で周曜径2.2cm、周縁幅1.8cmを測る。うち87・88・91については、周曜は軽いナデにより丸みを帯び、筈ズレが顕著である。製作技法については、いずれも瓦当周縁・側端・裏面側縁近くに横方向の丁寧なナデが施され、瓦当裏面中央は不整方向のナデが施されている。88・90・91の丸瓦凸面は瓦当付近を横方向のナデ、ほかは縦方向の工具ナデが顕著で、凹面に布目痕が認められる。88には斜方向の工具痕が顕著である。丸瓦側端部にはいずれも面取りを施している。91の瓦当面、丸瓦凸面にキラコが認められる。

92は軒棧瓦の瓦当片で、瓦当2分の1程度と平瓦部も残る。瓦当は顎貼り付け技法で成形されており、横方向のカキヤブリも認められる。瓦当文様は蕪状の中心飾から5条の太い蔓が伸び、上から2番目と4番目の先端は珠文状となる。上から3番目の蔓の始点は中心飾まで達していない。瓦当周縁・側端・裏面に横方向のナデを施し、平瓦凹面は瓦当付近を横方向のナデ、それ以外は縦方向のナデを施す。凸面も瓦当付近を横方向のナデで仕上げている。凸面側に「筑平後 柳川 忠平 [ ]」の方形刻印が施されている。全体的にキラコが認められる。

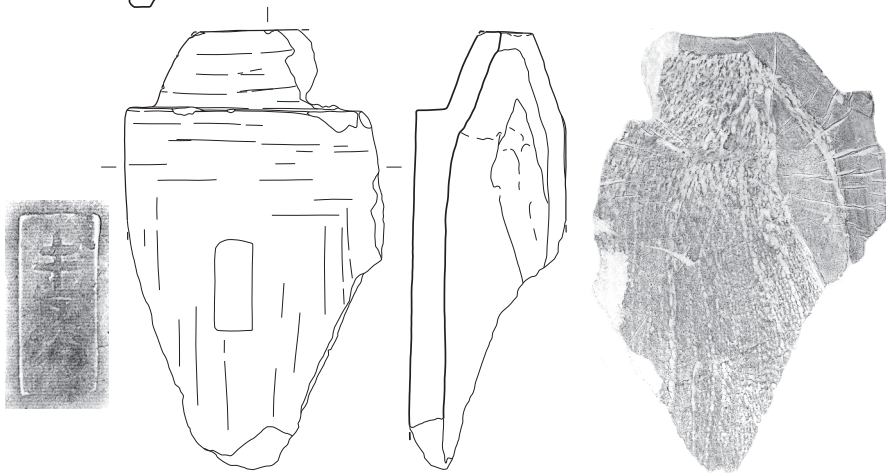
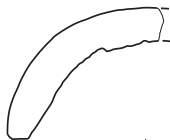
93・94は丸瓦の体部から玉縁部にかけての破片である。両者ともに凸面には体部に縦方向の工具ナデが施され、後端と玉縁部にかけて横方向のナデを施している。93に「源左衛門」の小型長方形刻印、94に「土山五右衛門」の大型長方形刻印が施されている。凹面には、93には粗いムシロ状の圧痕と布目痕が僅かに認められるほか、紐状圧痕が認められる。94に布目痕が僅かにみられるほか、くびれから体部にかけて斜方向の粗いナデと横方向の条痕が認められる。また両者ともに側端部と玉縁端部に面取りが施されて



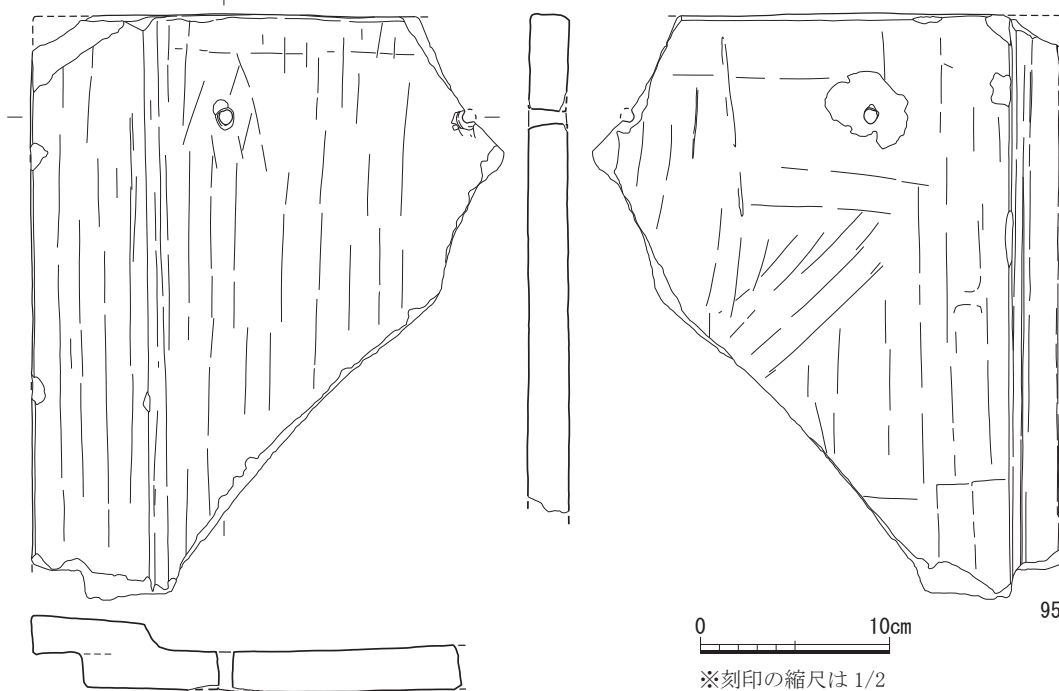
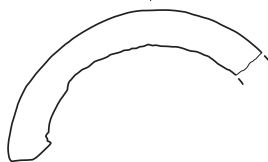
第71図 長塚トレンチ01出土遺物 1



93



94

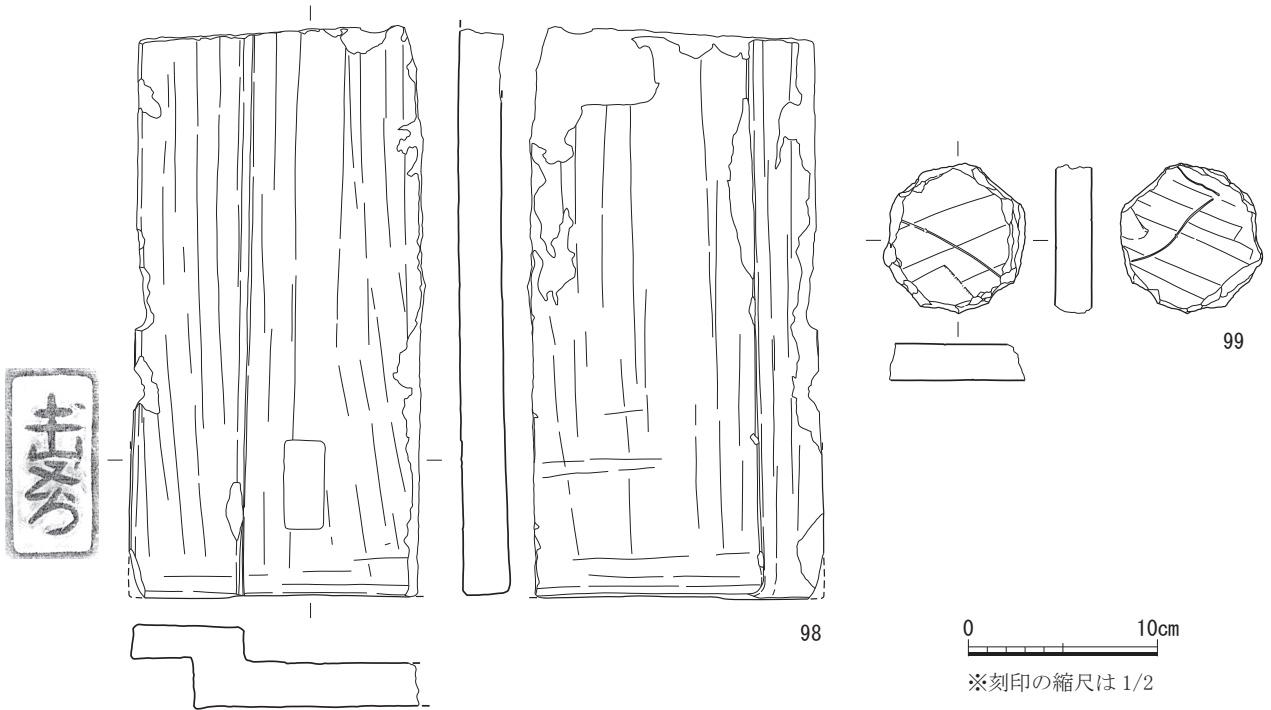
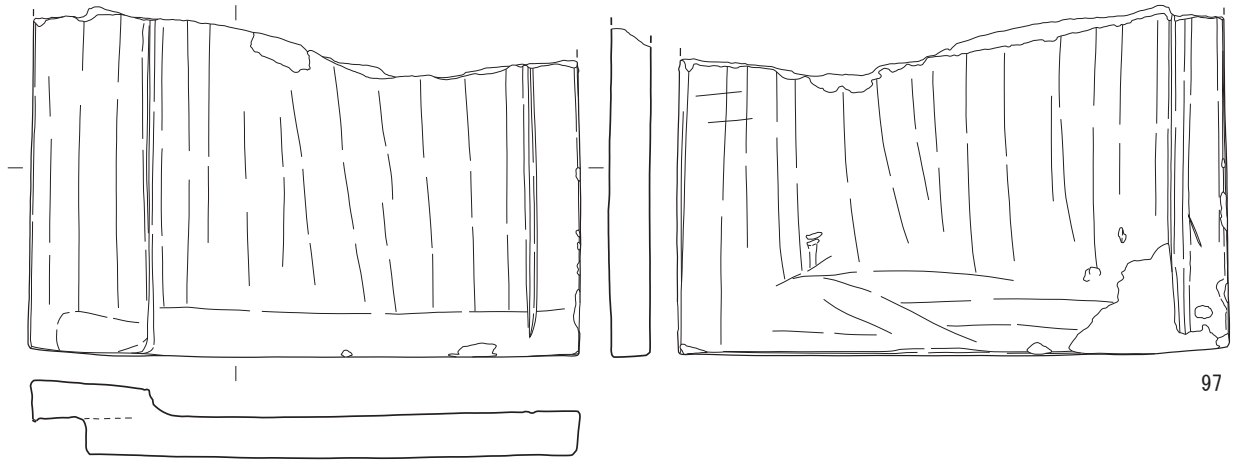
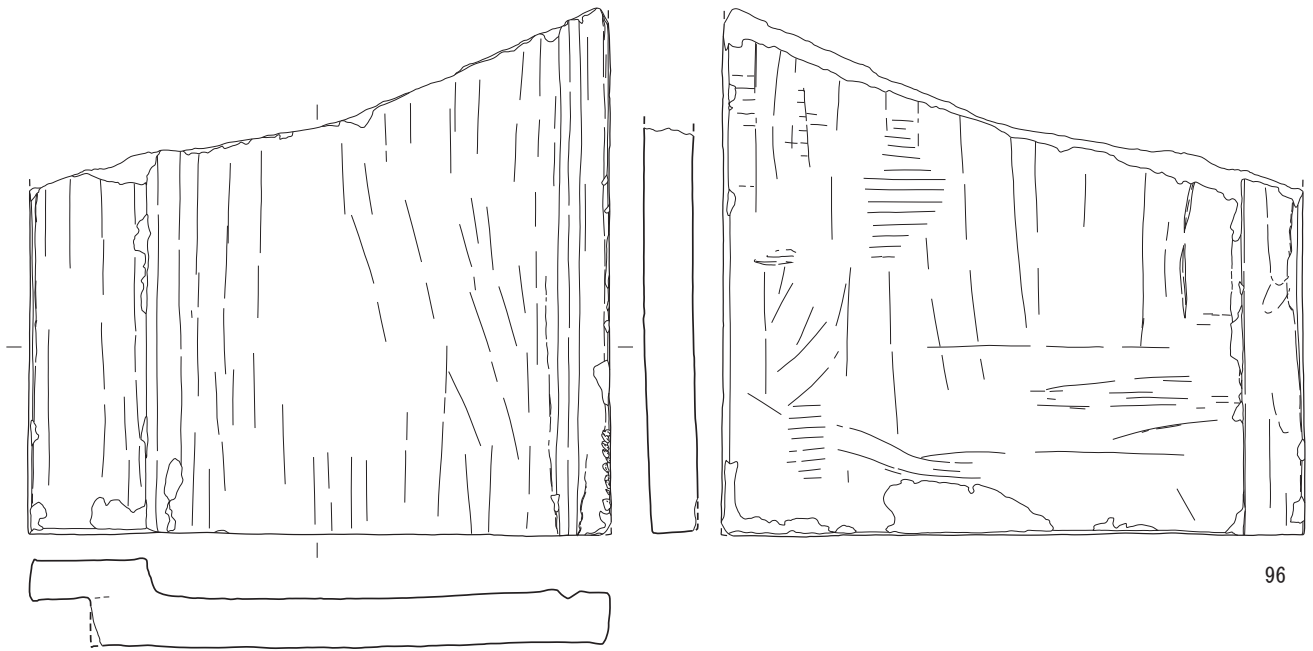


95

0 10cm

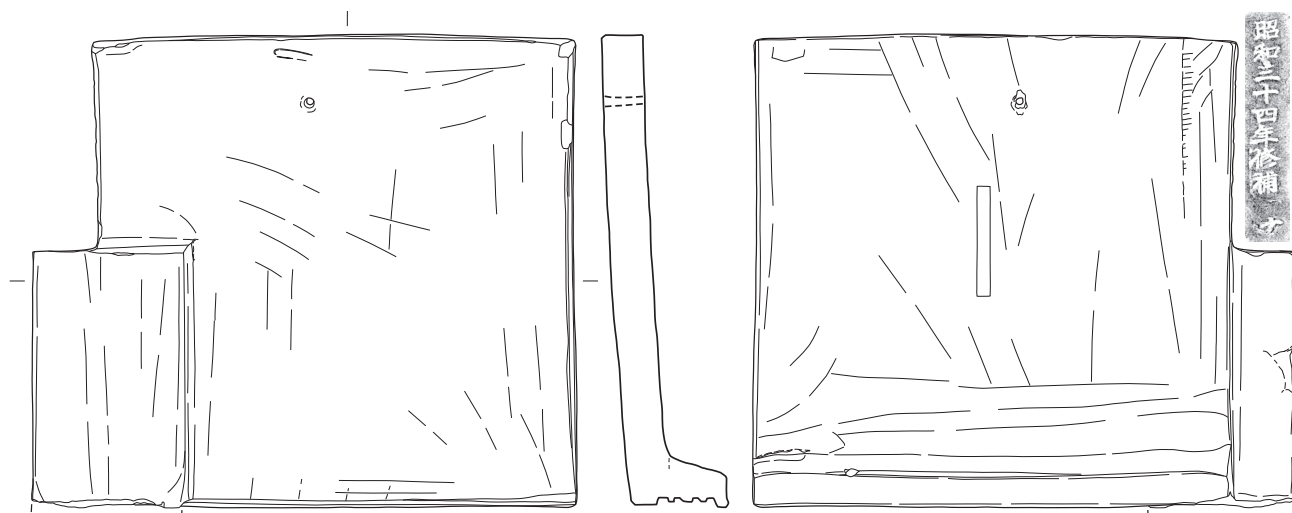
※刻印の縮尺は 1/2

第72図 長塚トレンチ01出土遺物2

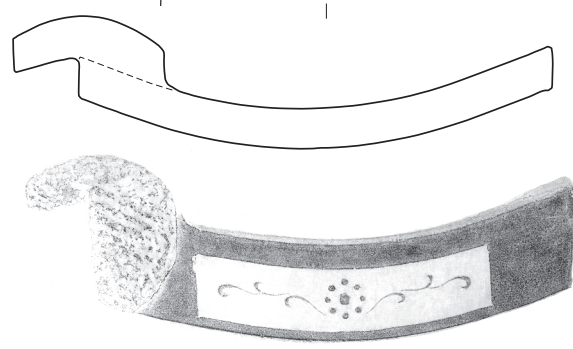


第73図 長塚トレンチ01出土遺物3

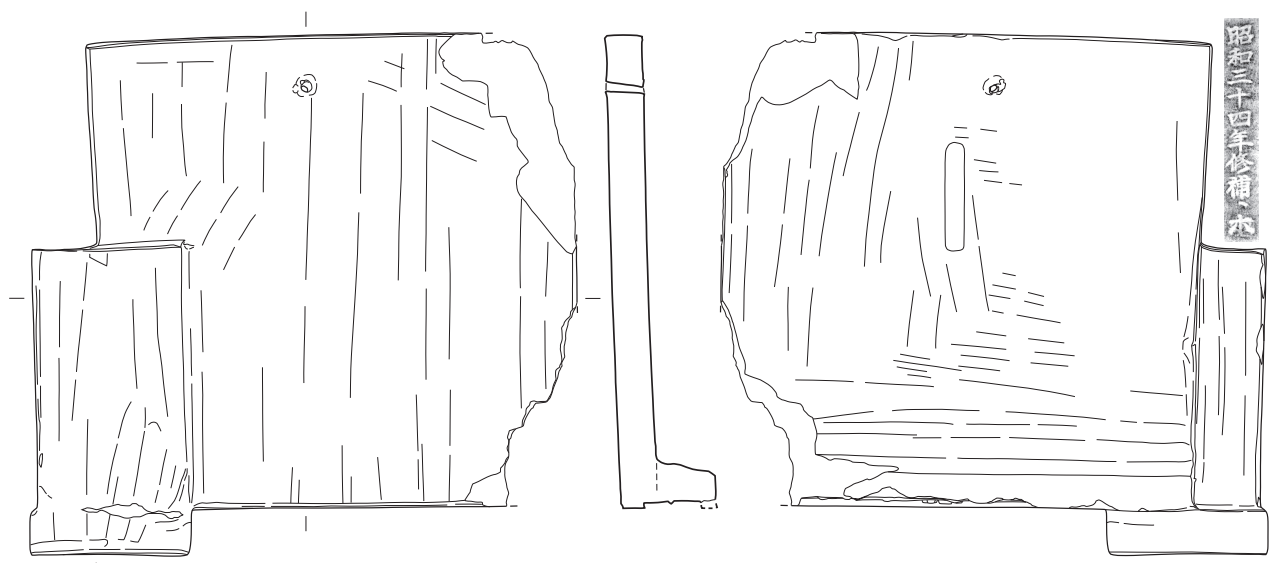
昭和三十四年修補



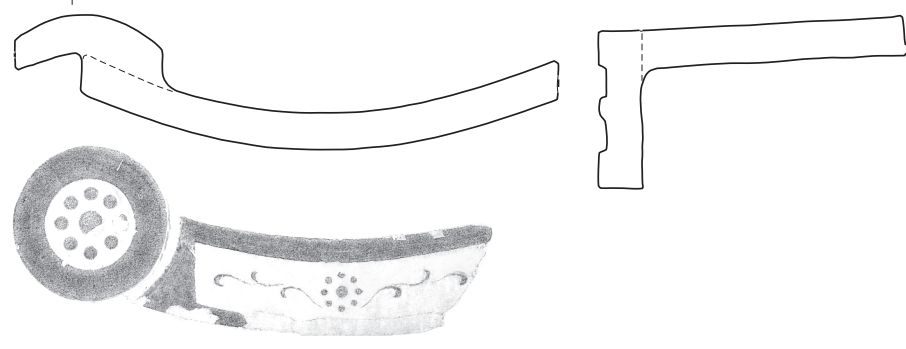
100



昭和三十四年修補

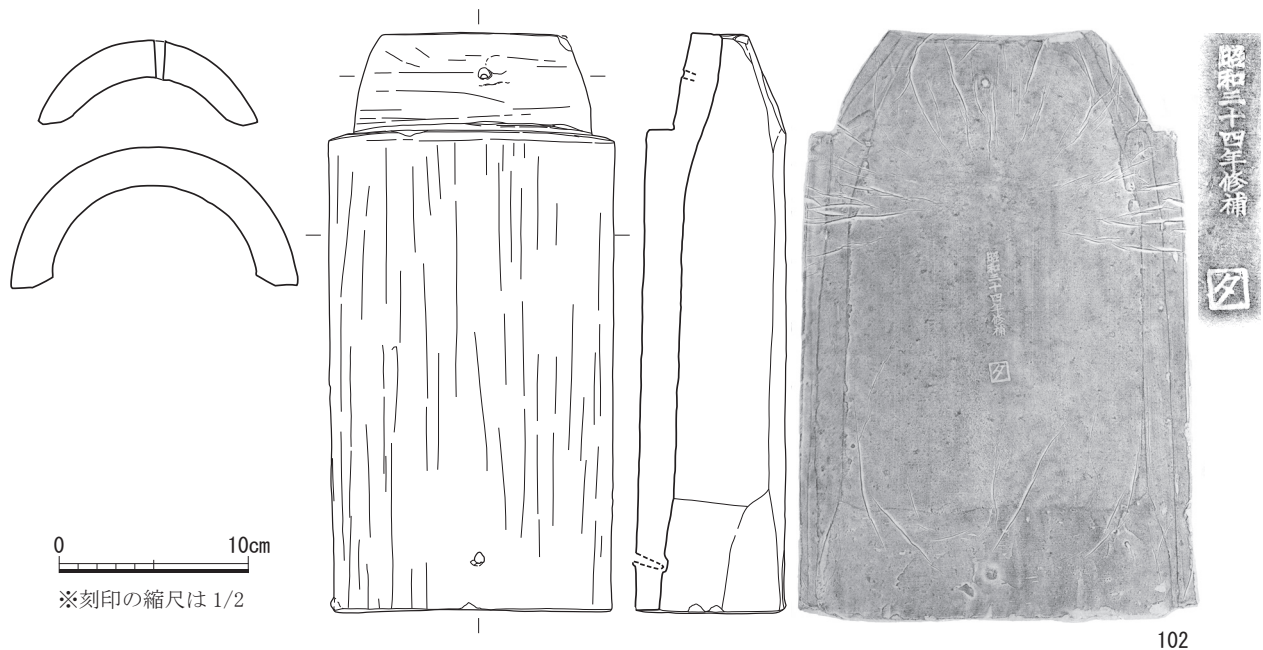


101



0 10cm  
※刻印の縮尺は1/2

第74図 長塚トレンチ01出土遺物4



第75図 長塚トレンチ01出土遺物5

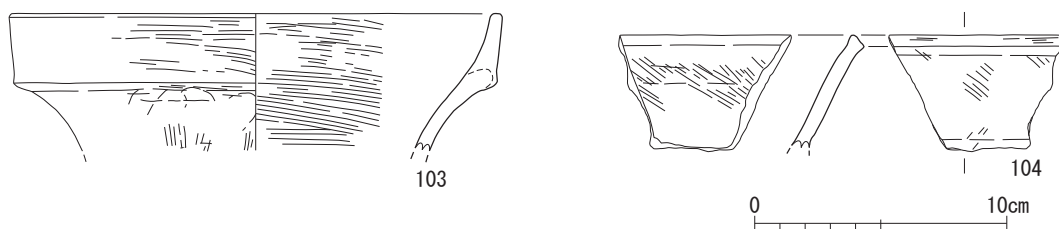
いる。

95～98は目板瓦（板塀瓦）である。95は上端部片で、上端部付近に2つの釘穴がみられる。目板部との接合部に横方向のカキヤブリが認められる。96・97は下端部片で、一方の側縁近くに水切り状の細い溝が彫られている。97には接合部にカキヤブリが認められる。98は左下端部片で、凸面に「土山五右衛門」の大型長方形刻印が施されている。

99は瓦製円板と考えられる瓦片である。四方を打ち欠き、約7.5～7.9cm大の円板に仕上げている。

100・101は九曜紋軒目板棧瓦である。100は軒丸瓦部の瓦当を欠くほか、ほぼ完形の資料で、101は軒丸瓦当部が分離した2破片の接合資料で、右側端部を欠く。軒平部瓦当は、顎貼り付け技法で成形されており、101では、カキヤブリが認められる。軒丸部は蒲鉾状の目板を接合した後に瓦当部を接合しており、100にカキヤブリが認められる。瓦当文様は、軒平部で両者ともに中心飾が九曜紋、その左右に下・上・下に向く唐草文を配し、先端は鉤状となる。軒丸部も両者ともに九曜紋を施すものと思われ、文様構成は両者で近似する。軒平部の顎部は横方向のナデで仕上げ、平瓦部凹面は縦方向のナデ、凸面も顎部近くは横方向のナデ、その他は縦方向のナデを施す。また凸面には100で「昭和三十四年修補、ナ」、101で「昭和三十四年修補、ホ」の刻印が認められる。両者ともに凸面から凹面に向けた釘穴が穿たれている。

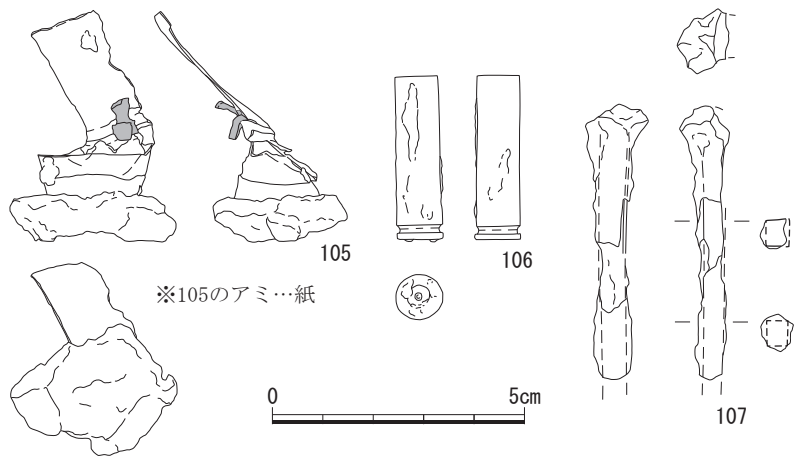
102は丸瓦の完形品である。凸面の体部には丁寧なナデ、後端と玉縁部にかけて横方向のナデが施され、体部と玉縁部との境に凹線が認められる。凹面は体部前端を幅広の面取り後、丁寧な横方向のナデ、そこから玉縁部にかけては縦方向のナデが施されている。側端部には面取りが認められる。また、体部前端近くと玉縁部に凸面側からの釘穴が穿たれているが、体部前端のものは貫通していない。凹面側に「昭和三十四年修補 □にタ」の刻印が施されている。



第76図 長塚トレンチ01出土遺物6



第76図 103・104はトレンチ01-①b・c区表土・盛土層(I・II層)から出土した弥生土器である。103は壺の口縁部から頸部にかけての破片である。頸部は外反しながら立ち上がり、口縁近くで屈曲を伴い上方向にのび、口縁端部を丸く仕上げる。口縁部外面は、横方向のハケ調整後、横方向のナデを施し、頸部には縦方向のハケ調整も認められる。口縁部内面は横方向のナデを施す。104は甕の



第77図 長堀トレンチ01出土遺物7

口縁部からくびれ部までの破片で、2破片の接合資料である。くびれ部から外傾しながら立ち上がり、口縁端部を上につまみ上げ、平たく仕上げる。内外面ともに斜方向のハケ調整後、横方向のナデが施されている。

第77図 105～107はトレンチ01から出土した金属製品である。105はトレンチ01-①a区整地土層(V層)上面、106はトレンチ01-①b区盛土層(II層)、107はトレンチ01-③b区整地土層(V層)上面から出土した。

105は、スナイドル銃の薬莖である。歪みが大きく、ディスク、カップとケースの一部が残存する。ケースには継ぎ目が認められる。カップ、ケース等は銅製であるが、ディスクには鉄錆が付着していることから鉄製と考えられる。106は30式銃あるいは38式銃の銅製薬莖である。107は、鉄釘である。劣化が著しく、中程から先端は欠損している。平頭釘b類と思われる。

## ② トレンチ02(第78～83図)

### 【トレンチの設定】

石垣(H545)の江戸期部分と明治期に修復した部分の境界付近(長堀東端より約50m)に設定したトレンチである。新旧の裏込層の様相や控石柱No.14・控石柱No.15の基礎構造などの確認を実施した。

### 【層序など】

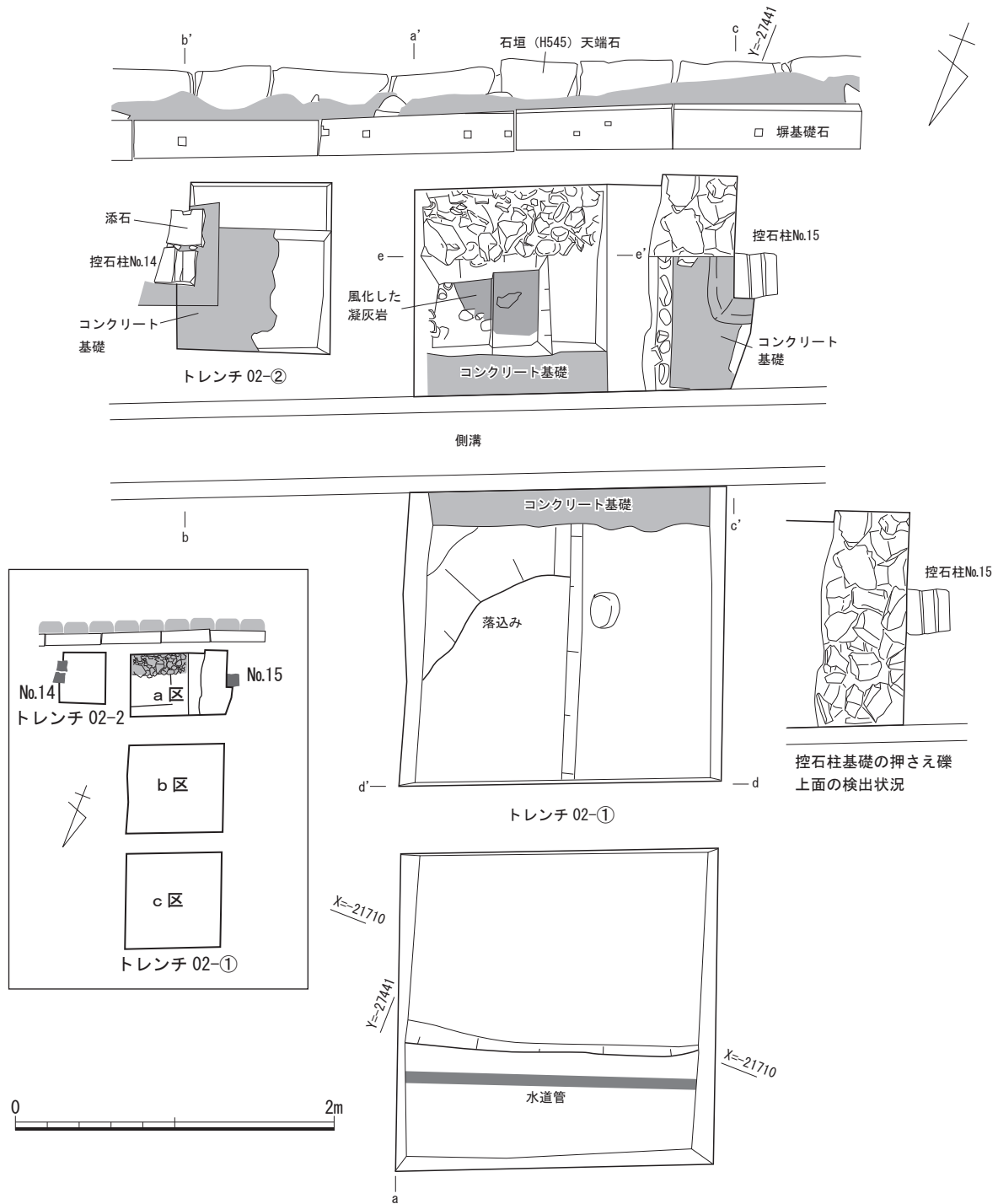
表土(約5cm)の下に昭和35年(1960)の史跡整備に伴う盛土層であるII層(2～4・12層:橙色土や煉瓦片や瓦片を多く含む灰褐色土など、厚さ10～60cm)があり、その下が江戸期の整地土層であるV層(5・6・14～19層:灰褐色土)となる。a区ではII層下面が石垣天端から側溝へ向けて低くなっており、長堀背後が竹の丸の地面より0.5mほど高い幅約1mの土塁状の高まりとなっていることが判明した。

### 【石垣(H545)裏込層】

明治期の修復石垣の栗石層は地表下約40cmで検出され、石垣表面より幅約1.25mを測る。栗石は角礫を主体とし、一部に円礫が混じる。粒径は5cm～人頭大であり、概ね10cm前後のものが目立つ。この北側に設けた小トレンチでは、江戸期石垣の裏込層上部がほとんど礫を含まない整地土であり、地表下約1.3mまで続くことを確認した。

### 【控石柱およびその設置坑】

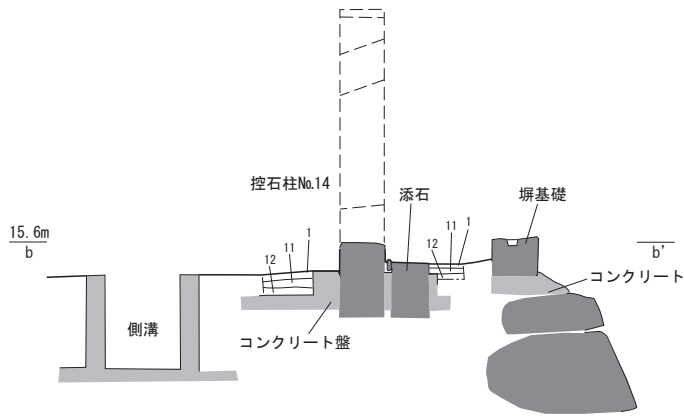
〔控石柱No.14〕頭部A類のもので、地震により柄穴の部分で3つに折れている。地上高138cm、1辺約24cm、柄穴の長さ21cm、柄の幅7cmを測る。控石柱は基礎の上部に方形のコンクリート盤が巻かれてお



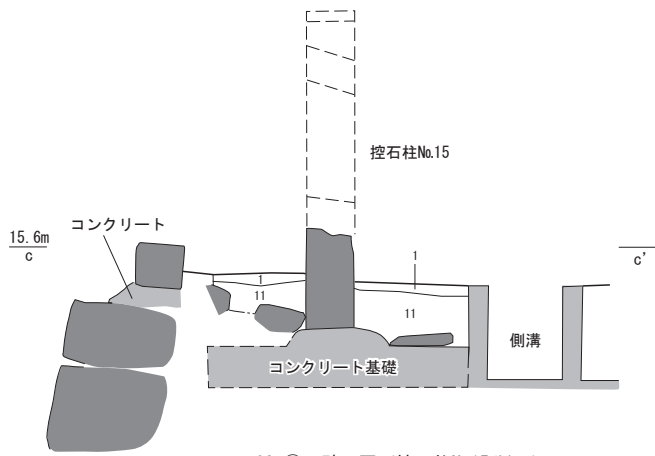
トレンチ 02

- |  |  |
|--|--|
| <p>1 5YR3/1 黒褐色土〔表土層〕</p> <p>2 5YR7/6 橙色土 (しまり強)〔昭和 35 年史跡整備の表土層〕</p> <p>3 5YR4/2 灰褐色土 (しまり弱、炭・礫混、煉瓦片・瓦片含)〔昭和 35 年史跡整備の盛土層〕</p> <p>4 5YR5/3 にぶい赤褐色土 (しまり弱、礫混、煉瓦片・瓦片含)〔昭和 35 年史跡整備の盛土層〕</p> <p>5 7.5YR4/2 灰褐色土 (しまりやや弱、粒子均一、瓦片含)〔江戸期の整地土層〕</p> <p>6 7.5YR4/2 灰褐色土 (しまりあり)〔江戸期の整地土層〕</p> <p>7 5YR5/4 にぶい赤褐色土 (しまり弱、コンクリート片・煉瓦片含)〔現代の土坑埋土〕</p> <p>8 7.5YR4/3 褐色土 (しまり弱、粒均一)〔側溝埋土〕</p> <p>9 7.5YR4/2 灰褐色土 (しまり弱、細礫混)〔落込埋土〕</p> <p>10 7.5YR4/2 灰褐色土 (しまり弱、小石〜コブシ大の礫混、瓦片・陶器片含)〔落込埋土〕</p> | <p>11 10YR7/3 にぶい黄橙色砂 (しまりなし)〔控石柱No.15 年設置坑 (昭和 52 年修理) 埋土〕</p> <p>12 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (しまり弱、煉瓦片・瓦片含)〔昭和 35 年史跡整備の盛土層〕</p> <p>13 5YR4/3 にぶい赤褐色土 (しまり弱、礫混、瓦片含)〔明治期の石垣修復に伴う栗石層〕</p> <p>14 5YR3/3 暗赤褐色土 (しまりややあり、細粒均一、コブシ大の礫混)〔江戸期の整地土層〕</p> <p>15 7.5YR3/4 暗褐色土 (しまりあり、細粒均一)〔江戸期の整地土層〕</p> <p>16 5YR4/4 にぶい赤褐色土 (しまりあり、砂粒混)〔江戸期の整地土層〕</p> <p>17 5YR3/3 暗赤褐色土 (しまりあり、粒子均一)〔江戸期の整地土層〕</p> <p>18 10YR5/2 灰黄褐色土 (しまり強、軽石礫混)〔風化した凝灰岩層〕</p> <p>19 10YR6/2 灰褐色土 (しまり強、コブシ大礫混)〔江戸期の整地土層〕</p> <p>20 5YR4/2 灰褐色土 (しまり弱、瓦片含)〔明治期〜戦前頃の盛土層〕</p> |
|--|--|

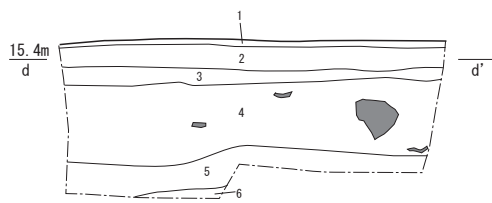
第78図 長塙トレンチ02平面図



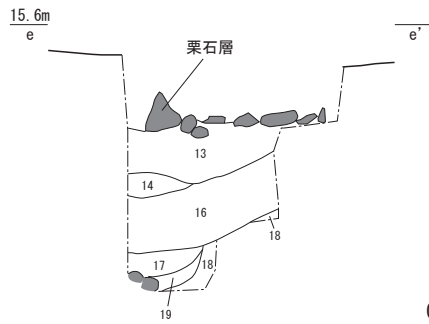
トレンチ 02-②東壁面図 (控石柱No.14 断面)



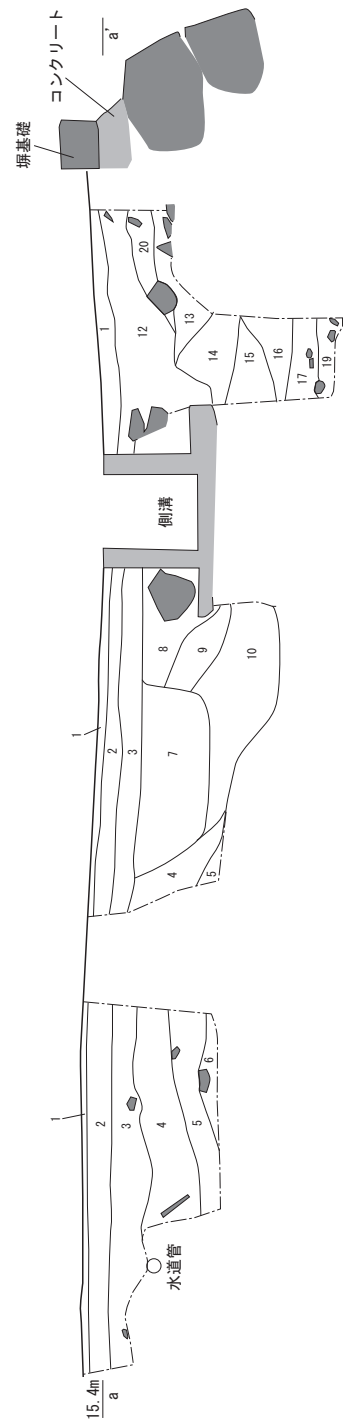
トレンチ 02-①西壁面図 (控石柱No.15 断面)



土層断面図



栗石層・整地土層断面図



トレンチ 02-①東壁面図



第79図 長塀トレンチ02土層断面図

り、その根元にもその外側 30cm ほどの範囲にコンクリートが敷設されていた。控石柱の南側には低い添石（安山岩）が設置されているが、コンクリートに阻まれ、据え付け状況などの確認を行えなかった。

〔控石柱No. 15〕 頭部A類のもので、地震により柄穴付近の 2 箇所折れている。検出高 170cm、1 辺約 25cm、柄穴の長さ 17cm、柄穴の幅 6.5cm を測る。この石は昭和 52 年（1977）の保存修理工事の際に抜き取られ、コンクリート基礎上に据え直されている。この設置坑は 1 辺約 1.35 m を測る方形のもので、地表下 30cm に掘方とほぼ同じ大きさのコンクリート基礎を設置し、控石柱を据えた後、その根元に亀腹状のコンクリートの高まりを造って固定している。その上に人頭大の礫を押さえとして並べた後、砂で埋め戻している。

トレンチ 01 と同様、石垣（H545）裏込層は、明治期の修復石垣の栗石層が旧表土直下で確認されるのに対して、江戸期石垣の裏込層の上部が礫をほとんど含まない整地土層であることが明らかとなった。

### 【遺物】

第 80 図 108 ～ 123、第 81 図 124・125 はトレンチ 02 から出土した瓦類である。108 はトレンチ 02-① a 区表土（I 層）、109・110・115・116・118・120・123 はトレンチ 02-① b 区盛土層（II 層）、111 はトレンチ 02-① a 区栗石上面・整地土層（IV 層）、112 はトレンチ 02-① b 区落込埋土（I 層）、113・114・121・125 はトレンチ 02-① c 区表土・盛土層（I・II 層）、117 はトレンチ 02-① b 区表土・盛土層（I・II 層）、119 はトレンチ 02-① a 区 I 層、122 はトレンチ 02-① b 区整地土層直上（I・II 層）、124 はトレンチ 02-① c 区盛土層（II 層）から出土した。

108・109 は三巴文軒丸瓦である。108 は瓦当中央部 3 分の 1 程度、109 は瓦当右上半部 6 分の 1 程度残存する。108 は劣化が激しく判然としないが、右巻きの巴文のみ残存する。巴頭は勾玉状で断面形は半円形を呈する。巴頭から尾に向かって自然に細くなり、2 分の 1 程度回転し、隣の尾とは接せず、圏線をつくらぬ。瓦当裏面は丁寧なナデが施されている。109 は左巻きの巴文の一部と 2 個の珠文が残存する。巴頭の形状等は不明である。瓦当周縁は粗いナデ、側端部は丁寧なナデを施す。瓦当裏面の側端近くは横方向のナデ、中央付近は不整方向のナデが施されている。

110・111 は桔梗紋軒丸瓦である。110 は瓦当左上半部 5 分の 1 程度が残存し、丸瓦との接合部にカキヤブリが認められる。桔梗紋の周囲に珠文が配されるもので、珠文が 2 個残存する。内区には花卉 2 個が僅かに残る。花卉はやや丸みを帯び、先端はさほど尖らない。珠文は丸みを帯びる。瓦当周縁・側端・裏面側縁近くは横方向のナデが施されている。111 は瓦当左下半部 7 分の 1 程度が残存し、瓦当文様は 1 個の珠文が残存する。瓦当周縁・側端にナデを施す。丸瓦部が僅かに残り、接合部にはカキヤブリの痕跡も認められる。

112～119 は九曜紋軒丸瓦である。112 は瓦当右下半部 4 分の 1 程度、113 は瓦当右下半部 5 分の 1 程度、114 は瓦当下半部 4 分の 1 程度、115 は瓦当左上半部 6 分の 1 程度と丸瓦部、116 は瓦当右上半部 7 分の 1 程度と丸瓦部一部、117 は瓦当上半部約 8 分の 1 程度と丸瓦部、118 は瓦当左下半部約 6 分の 1 程度と丸瓦部、119 は瓦当右下半部 7 分の 1 程度がそれぞれ残存する。117 は丸瓦に瓦当を貼り付けて成形されている点で特異である。瓦当文様については、いずれも周曜のみが残存し、112 で周曜径 2.1cm、周縁幅 1.9cm、113 で周曜径 1.9cm、周縁幅 2.0cm、114 で周曜径 2.2cm、周縁幅 1.8cm、115 で周曜径 2.0cm、周縁幅 2.2cm を測る。116 は周曜の一部のみの残存で、周曜径は不明、周縁幅 2.2cm、117 も周曜の一部のみの残存で、周曜径は不明、周縁幅 2.3cm、118 で周曜径 2.3cm、周縁幅 2.1cm、119 で周曜径 2.3cm、周縁幅 2.0cm を測る。うち 112・115 については、周曜は軽いナデにより角に丸みを帯び、112・113 は笠ズレが認められる。118 の周曜は強いナデによりなだらかに丸みを帯びる。いずれも瓦当周縁・側端・裏面側縁近くに横方向の丁寧なナデが施され、瓦当裏面中央は不整方向あるいは縦方向のナデが施されている。116・117 の丸瓦凸面瓦当近くに横方向のナデが施される。うち 116 では縦方向の工具ナデが顕著で、凹面に僅かな布

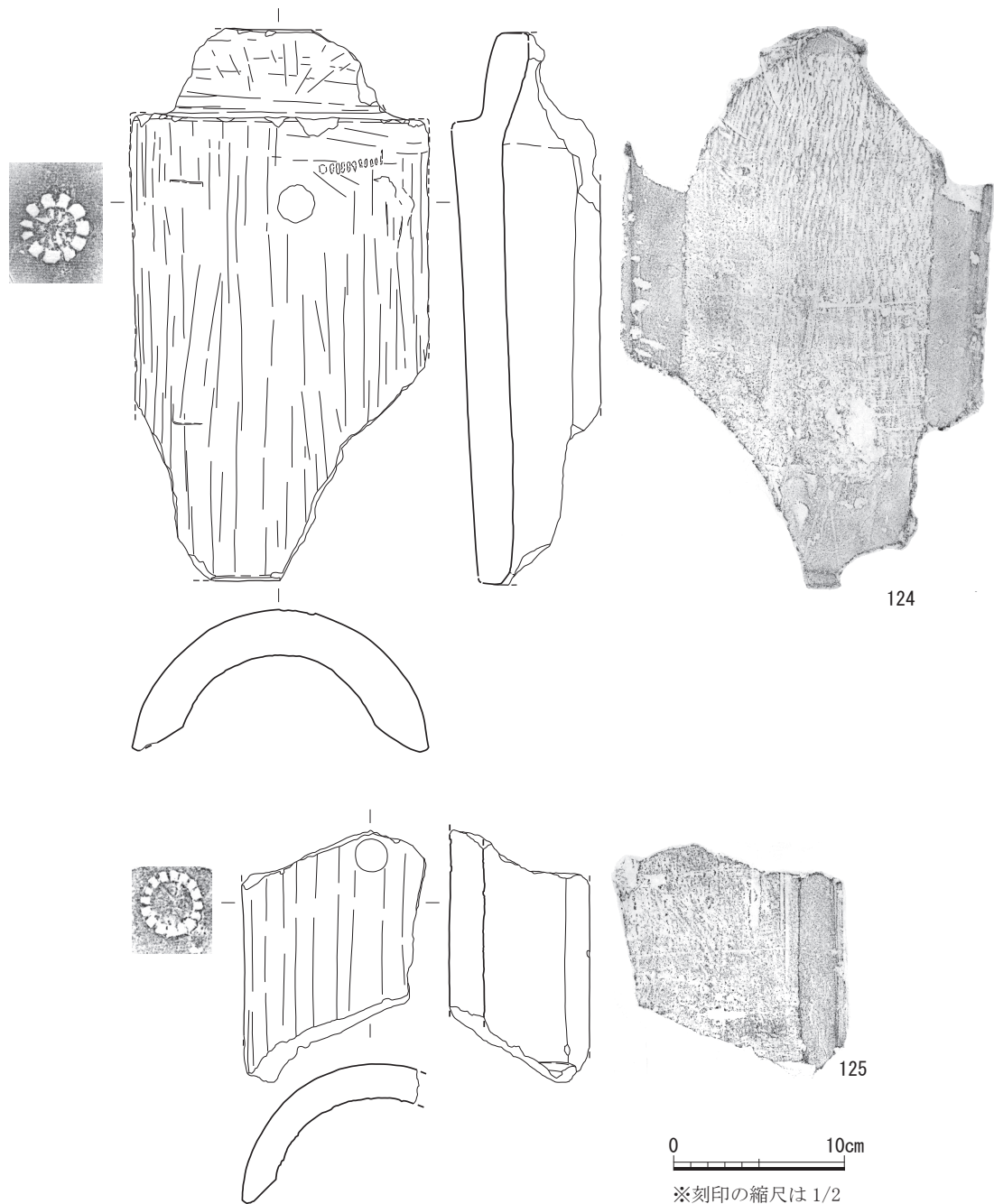


第80図 長堀トレンチ02出土遺物 1

目痕とムシロ状圧痕が認められる。

120 は上三葉文軒平瓦である。瓦当右半部 3分の2 程度と平瓦の一部が残存する。瓦当は顎貼り付け技法で成形され、接合面にカキヤブリも認められる。瓦当上端はナデにより丸みを帯び、やや面取りを意識しているようである。瓦当文様は中心飾の上三葉文と子葉が下・上と 2 度反転して左右に伸びる唐草文を配する。瓦当周縁・側端・裏面には横方向の丁寧なナデが施され、平瓦凹面には横方向のナデ、凸面にも横方向の粗いナデが施される。121 も軒平瓦である。瓦当中心部 4分の1 程度残存するが、欠損が著しい。瓦当は顎貼り付け技法で成形されており、文様区には、中心飾と左側の上を向く唐草文が残る。瓦当周縁・上端・裏面に横方向のナデが施されている。

122 は九曜紋軒平瓦である。瓦当左半部 2分の1 程度が残存する。瓦当は顎貼り付け技法で成形されて

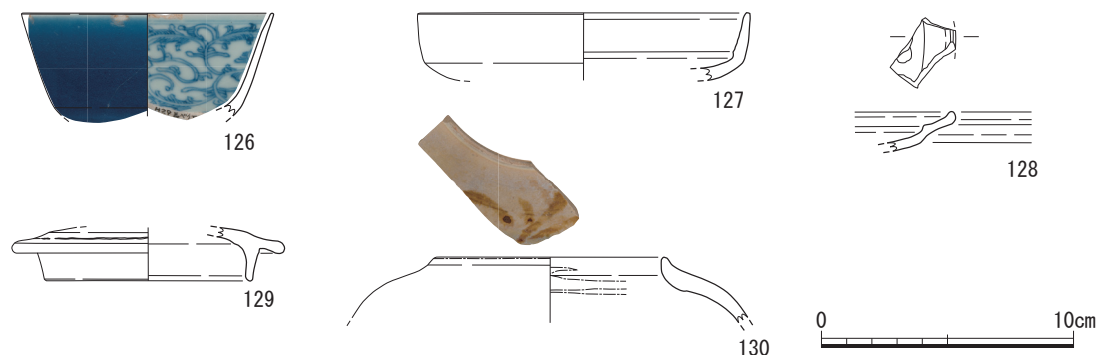


第81図 長塚トレンチ02出土遺物2

おり、接合面にカキヤブリが認められる。九曜紋の中心飾から左右に下・上・下に向く唐草文を配し、先端は中央から鈎状・鈎状・珠文状となる。途中、下向きの子葉が入る。瓦当周縁・側端・裏面は横方向のナデで仕上げられている。

123 は中心飾を欠く軒棧瓦片である。瓦当右端部 3分の1 程度と平瓦部が残存し、瓦当は顎貼り付け技法で成形されている。瓦当文様は右端の唐草文の端部のみが残り、端部を上方向に強く跳ね上げるものである。瓦当周縁・側端・裏面には丁寧な横方向のナデが施されている。瓦当上端部及び右隅に面取りが認められる。平瓦凹面、側端部は縦方向のナデ、凸面は不整方向の粗いナデが施されている。

124・125 は丸瓦である。124 は前端側を欠くほか、完形に近い。凸面には縦方向のケズリ状の丁寧なナデ、後端と玉縁部にかけて横方向のナデが施されている。後端近く中央に花文の刻印が施されており、その斜め後端側に刻み状の圧痕が認められる。凹面は布目痕と横方向の条痕が認められ、玉縁側にはムシロ状の圧痕が認められる。後端部・側端部と玉縁端部を面取りしている。125 は体部片である。凸面には縦



第82図 長塚トレンチ02出土遺物3

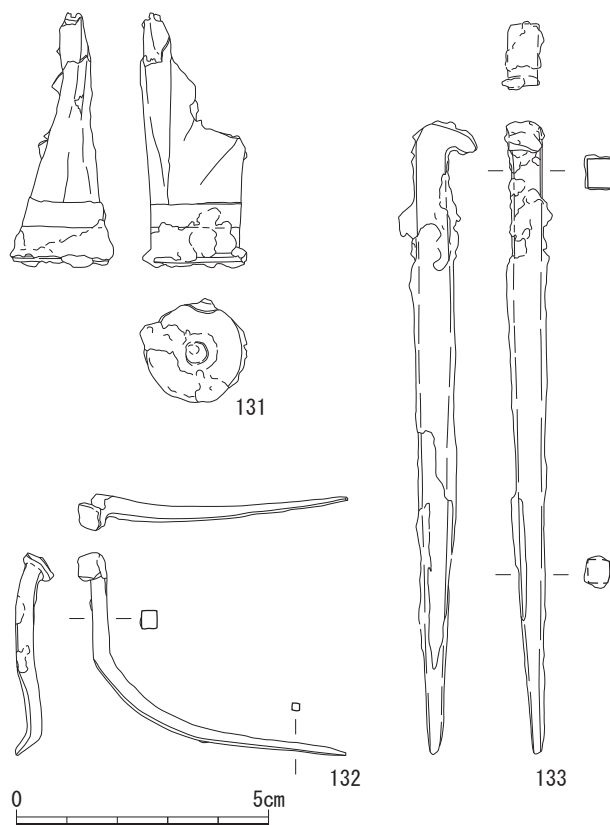
方向のナデが施され、花文の刻印が認められる。凹面には横方向の条痕が認められる。側端部を面取りしている。

第82図126～130はトレンチ02から出土した陶磁器類である。126・129はトレンチ02-①b区盛土層(Ⅱ層)、127・128はトレンチ02-①b区整地土層(V層)上面、130はトレンチ02-①c区表土・盛土層(Ⅰ・Ⅱ層)から出土した。

126は磁器染付碗で、口縁部から体部にかけての破片である。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は尖る。外面に瑠璃釉を施し、口縁部近くはやや薄い。内面は口縁端部近くに2条の圈線、その下に唐草文が描かれている。中国産と考えられる。127は陶器皿である。口縁部から底部までの破片で、体部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部を平たく仕上げる。内面の体部と底部の境に明瞭な段差が認められる。底部はやや丸みを帯びる。128は陶器皿で、体部から口縁部までの小片である。体部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部は明確な段を設けながら外に開き、端部を上につまむ。内底面に鉄絵が認められる。129は陶器土瓶蓋で、口縁部から天井部にかけての破片である。天井部はやや膨らみを帯びながら下降し、屈曲を伴いながら口縁部は外に開き、端部を丸く仕上げる。かえりは比較的長い。外面に黒柿色の釉を施しており、重ね焼きの部分に釉の剥がれた痕がある。130は陶器土瓶で、口縁部から体部にかけての破片である。体部から丸みを帯びながらしぼみ、口縁部は短く上向きにくびれ、端部を丸く仕上げる。復元口径は9.0cmとなる。内面は頸部付近まで施釉する。外面に文様が認められる。

第83図131～133はトレンチ02から出土した金属製品である。131はトレンチ02-①b区盛土層(Ⅱ層)、132はトレンチ02-①b区整地土層直上(Ⅱ層)、133はトレンチ02-①a区栗石層(Ⅳ層)から出土した。

131はスナイドル銃の薬莖である。ケース(薬筒部)の一部まで残存し、縦方向の継ぎ目が認められる。ディスク(底板)は鉄製で、カップ、ケースは銅製である。打撃痕が認められる。132は銅製の釘である。小型の釘で、平頭釘a類と思われる。133は鉄釘のほぼ完形品である。平頭釘a類と思われる。

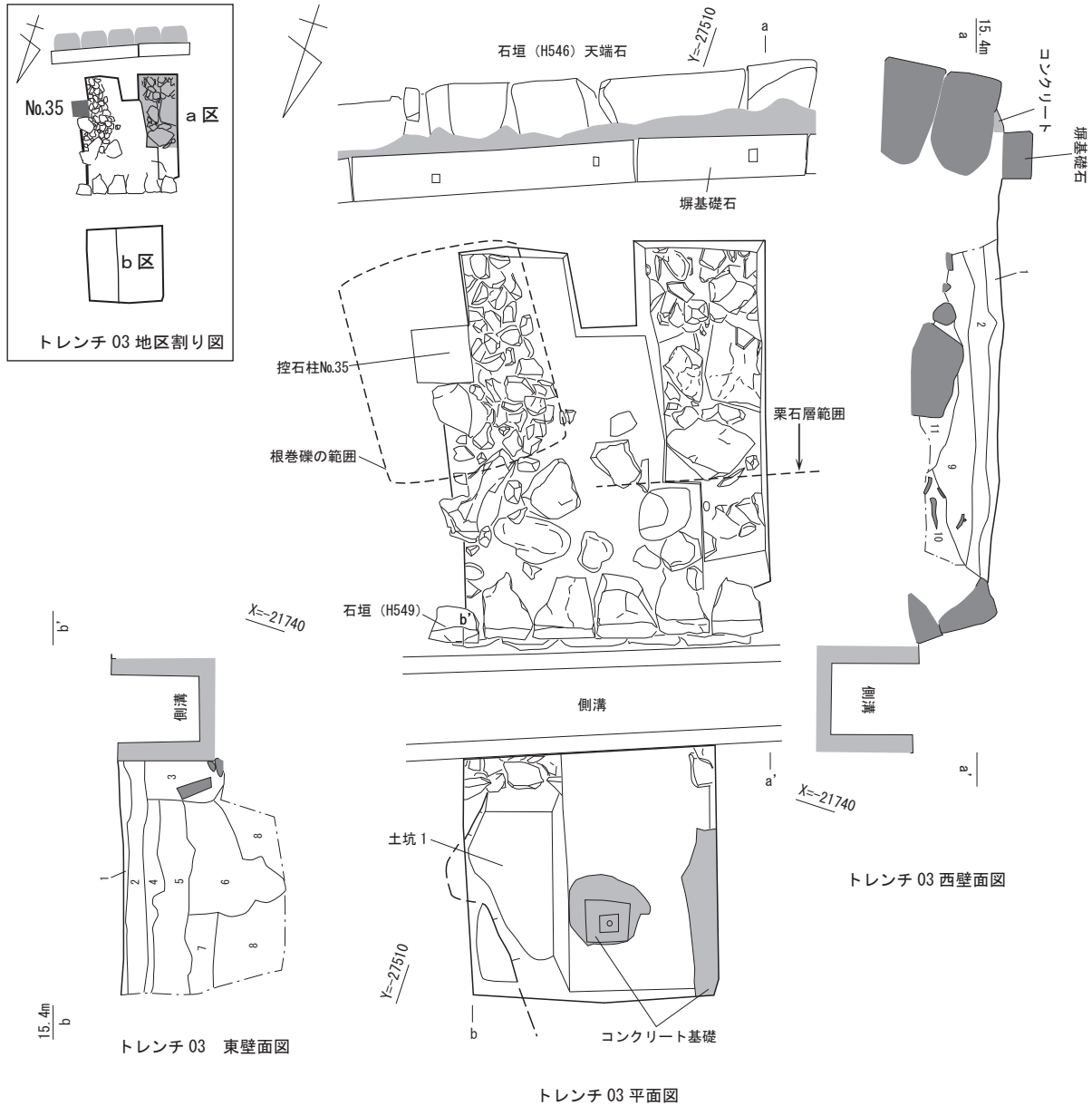


第83図 長塚トレンチ02出土遺物4

③ トレンチ 03 (84～86 図)

【トレンチの設定】

長堀背面の西側約 3 分の 2 は石垣 (H549) となっており、この形成時期を確認するため、その幅が広がる部分 (長堀東端より約 123 m 付近) に設定したトレンチである。



トレンチ 03

- 1 5YR3/1 黒褐色土〔表土層〕
- 2 7.5YR5/3 にぶい褐色土 (しまり弱、砂礫混)〔昭和 35 年史跡整備の表土層〕
- 3 7.5YR4/4 褐色土 (しまり弱、礫混)〔側溝掘方埋土層〕
- 4 5YR4/1 褐灰色土 (しまりややあり、φ～5cm 礫混)〔戦前の盛土層〕
- 5 5YR5/3 にぶい赤褐色土 (しまり弱、φ～1cm 礫混)〔戦前の盛土層〕
- 6 5YR5/4 にぶい赤褐色土 (しまり弱)〔土坑 1 埋土〕
- 7 5YR4/4 にぶい赤褐色土 (しまり弱、瓦片含)〔江戸期の旧表土層〕
- 8 7.5YR4/3 褐色土 (しまり強、細粒均一)〔江戸期の整地土層〕
- 9 5YR4/4 にぶい赤褐色土 (しまり弱、φ～50cm 礫混、ガラス片含)〔昭和 35 年史跡整備の盛土層〕
- 10 5YR3/3 暗赤褐色土 (しまり弱、ガラス片含)〔石垣 (H549) 裏込土層〕
- 11 5YR4/2 灰褐色土 (しまりなし、φ～50cm 礫混)〔明治期の石垣修復に伴う栗石層〕



第84図 長堀トレンチ03平・断面図



### 【層序など】

層序は、石塁上面（a区）とその北側（b区）で様相が異なる。a区では表土直下に現代の盛土層であるⅡ層（2層：にぶい褐色土層やガラス片を含むにぶい赤褐色土層、厚さ約30cm）があり、その下に昭和35年（1960）に修築された石垣（H549）の裏込層や石垣（H546）栗石層が検出された。

b区では、昭和35年（1960）整備の盛土層であるⅡ層（2層：にぶい褐色土層、厚さ約15cm）の下に、戦前の旧日本陸軍によって盛られたⅢ層上層（4～5層：褐灰色土層やしまりの弱いにぶい赤褐色土層、厚さ約25cm）や江戸期の旧表土とみられるⅢ層下層（7層：瓦片を含むにぶい赤褐色土層、厚さ20cm）があり、その下に江戸期の整地土である褐色土が検出された。Ⅲ層上面では旧日本陸軍の建物基礎とみられるコンクリート盤が検出された。江戸期の整地土上面と石塁面の比高差は0.95mである。

### 【石垣（H546）裏込層】

石垣（H546）の栗石層は北端が石垣（H549）（昭和35年修築）に切られており、検出幅（石垣表面からの幅）約2.4mを測る。栗石は少量の円礫を含むものの、10cm大～20cm大の角礫を主体とする。栗石層の北半には、築石であったとみられる1辺40cm大の石材が認められる。栗石の隙間には旧日本陸軍の銃弾2点（第86図135・136）が出土した。

### 【控石柱およびその設置坑】

〔控石柱No.35〕平成3・4年度（1991・1992）に交換された頭部C類の新補材であり、地上高約156cm、1辺約32cm、柄穴の長さ20cm、柄穴の幅約7cmを測る。地震による破損は確認されなかった。元の控石柱は昭和52年（1977）修理前の記録（第61図）から頭部B類であったことが確認できた。この石材は昭和52年度保存修理工事の際に一度、抜き取り補修（コンクリート基礎の設置）が行われた後、平成3・4年度の保存修理工事で新補材に替えられた。現在の設置坑は1辺1.35mほどの方形を呈し、内部をコブシ大の礫で充填している。

### 【その他の遺構】

〔石垣（H549）〕北側に面をもつ間知積石垣である。石垣は横目地を通して2段に積まれており、高さ約0.5mを測る。築石は安山岩であり、1辺30cm、控長30cmを測る。この上面幅は約0.5mを測る。現在の石垣は、裏込層にガラス片などを含むことから、当時の現状変更申請書のとおり、昭和35年に積み直されたものと判断される。先行する石垣の痕跡は確認できなかった。

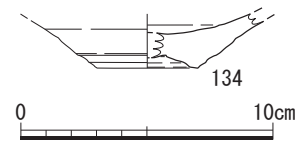
〔土坑1〕江戸期の旧表土とみられるにぶい赤褐色土層の上面より掘り込んだ近代の土坑である。完掘していないため、規模は不明であるが、深さ0.6m以上、幅1.1m以上を測る。埋土はしまりが弱いにぶい赤褐色土である。

トレンチ03では、明治期の修復石垣に伴う栗石層が検出されるとともに、石塁下の竹の丸曲輪面では近現代の盛土層（厚さ約40cm）の下に江戸期の整地土層の存在が確認された。

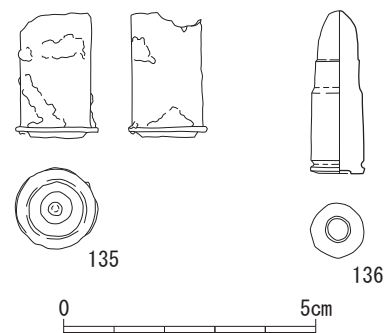
### 【遺物】

第85図134はトレンチ03 a区表土（Ⅰ層）から出土した陶器皿の底部片である。高台内を削り出すことによって高台を造り出していることを特徴とする。

第86図135・136はトレンチ03から出土した金属製品である。135はトレンチ03 b区盛土層（Ⅱ層）、136はトレンチ03 a区栗石層（Ⅳ層）から出土した。



第85図 長塀トレンチ03  
出土遺物1



第86図 長塀トレンチ03  
出土遺物2

135はスペンサー銃の薬莖である。底部に打撃痕が認められる。136は鉛製のエンフィールド銃弾の未使用品である。

#### ④ トレンチ 04 (第 87 ~ 91 図)

長堀背後の石垣 (H553) の形成時期やもとの形状、控石柱No. 48 の添石の性格の確認を目的として、馬具櫓より東側約 70 m付近に設定したトレンチである。平成 30 年度 (2018) にも一部追加調査を実施している。

##### 【層序など】

石塁上 (a 区) では、石垣 (H553) の裏込層となるⅡ層 (3・4層)、現代の掘削により乱された埋土 (多量の礫やコンクリート片・ガラス片などが混じるにぶい赤褐色土・厚さ約 50cm) の下に、石垣 (H546) 裏込層 (12 層) や建物⑬の基礎等が検出された。一段低い c 区では、整備時の盛土層 (18 層: 礫・煉瓦片が混じるにぶい赤褐色土、厚さ 8cm) の直下で、建物⑬のコンクリート基礎が検出され、ガラス片などを含む暗赤褐色土 (20 層) や江戸期の旧表土とみられる暗赤褐色土 (21 層: 瓦片を多く含む・厚さ約 20cm) を挟んで、江戸期の整地土層である V 層 (22 層: 堅くしまった明赤褐色土) が検出された。赤褐色土には軒平瓦、桔梗紋や九曜紋の軒丸瓦 (第 89 図 137 ~ 139・141) を含む。整地土上面には平らな石材や瓦片の集中範囲が存在し、現地地表下約 70cm (標高約 14.4 m) に江戸期の遺構が存在することが明らかとなった。確認範囲が狭小であり、性格は明らかにできなかったものの、この付近が寛永 11 年 (1634) の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」に記された坪井川岸への虎口の推定位置に当たっていることから、その一部の可能性も考慮すべきであろう。

平成 30 年度の調査でも、a 区小トレンチをさらに掘り下げ、トレンチ 04 の層序として、表土 (約 2cm) の下に、間知積石垣裏込土と旧日本陸軍施設撤去後の造成土からなるⅡ層、旧日本陸軍関連施設の遺構を検出したⅢ層、明治 22 年修理裏込層を主体とするⅣ層、江戸期の造成土が残るⅤ層があらためて確認された。Ⅴ層の灰褐色混砂礫土層 (13 層) と暗赤褐色混礫粘土層 (14 層) は、非常にしまりが強く、土質が均一だが遺物は確認できなかった。

##### 【石垣 (H546) 裏込層】

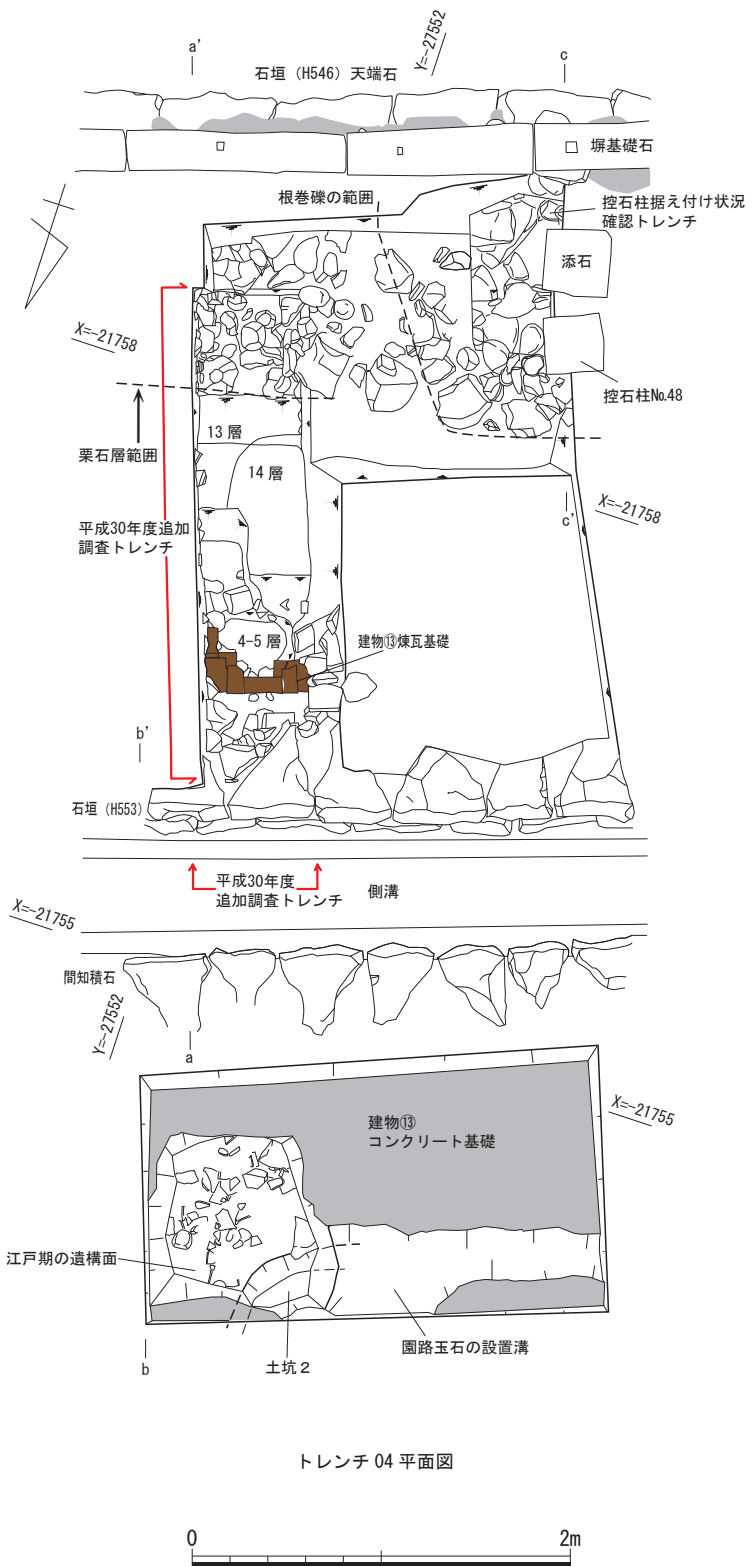
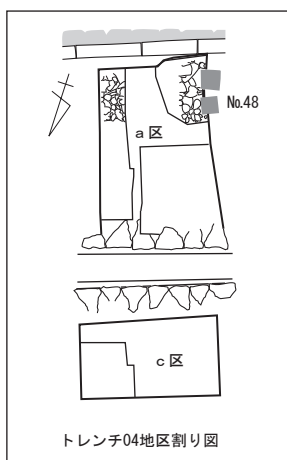
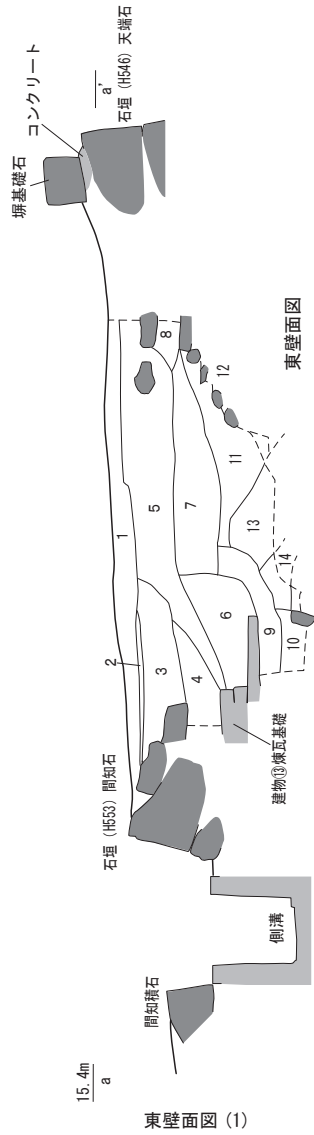
石垣 (H546) の栗石層は現代の掘削により上部を乱されているものの、石垣表面から幅約 1.7 m の範囲で確認された。栗石は円礫・角礫が同程度含まれており、粒径 10 ~ 30cm のものが認められる。またトレンチ 03 と同じく、栗石層の北端付近に大型の石材が認められる。栗石層は明治期の修復石垣に伴うものである。

##### 【控石柱およびその設置坑】

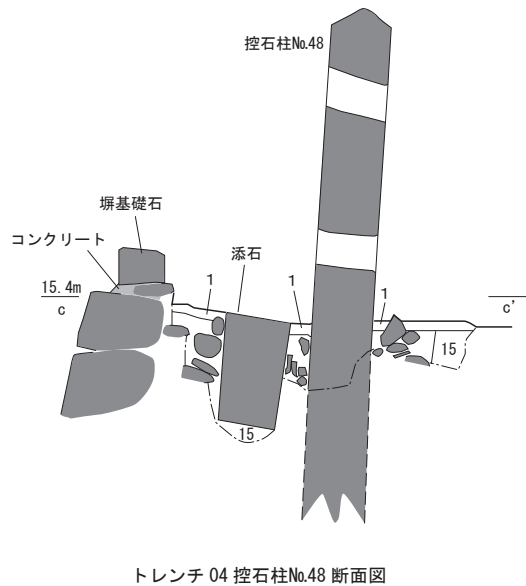
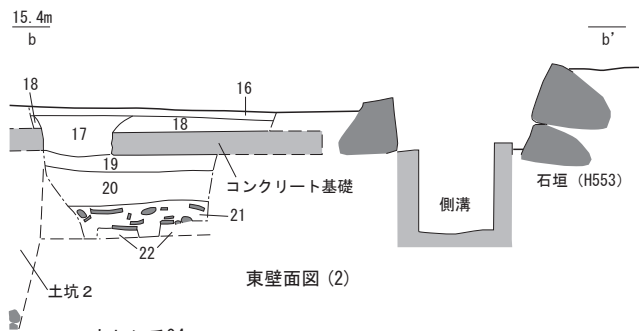
〔控石柱 No. 48〕昭和 29 年 (1954) の新補材とみられる頭部 B2 類の控石柱である。現状で平成 28 年熊本地震による破損は認められない。地上高約 166cm、1 辺約 30cm、柄穴の長さ 19cm、柄穴の幅約 7cm を測る。設置坑は 1 辺 1.4 m を測る。控石柱は平成 3・4 年度保存修理工事で抜き取り、周囲に礫を充填する据え直しが行われた。控石柱の添石も同時に据え直されており、それ以前の構造などを確認することはできなかった。

##### 【その他の遺構】

〔建物⑬〕 a 区、c 区で検出したコンクリート基礎をもつ建物跡である。南北 4 m、東西 2.4 m の範囲を検出した。コンクリート基礎の厚さ 12cm を測る。昭和 29 年 (1954) の「岳ノ丸跡追加指定申請書」の添付図 (第 60 図上) には、⑬と記された建物が記されており、これらはその基礎とみられる。建物⑬は戦前に旧日本陸軍によって建てられ、戦後には米軍の対敵諜報部隊 (CIC) に接収されていたもので、昭和 34 年 (1959) に他の軍関係の建物と共に撤去された。図面の建物規模は東西約 20 m、南北幅 9 m 前後で



第87図 長塀トレンチ04平・断面図



トレンチ04

- 1 5YR2/2黒褐色土〔表土層〕
- 2 7.5YR8/2灰白色土（山砂）〔昭和52年整地土層〕
- 3 5YR4/2灰褐色混砂礫粘土〔昭和35年設置の石垣（H553）裏込層〕
- 4 5YR4/4灰褐色混礫土〔昭和35年設置の石垣（H553）裏込層〕
- 5 5YR4/4にぶい赤褐色土（礫混、瓦片・コンクリート片含）〔近現代盛土層〕
- 6 7.5YR8/2灰白色砂礫（しまりなし、コンクリート片含）〔戦前の建物基礎埋設土層〕
- 7 5YR4/3にぶい赤褐色土混砂粘土（瓦片含）〔戦前の盛土層〕
- 8 5YR3/2暗赤褐色混砂粘土（瓦片含）〔戦前の盛土層〕
- 9 5YR4/4にぶい赤褐色混砂粘土〔戦前の建物基礎の埋設土層〕
- 10 5YR3/2暗赤褐色混砂礫粘土（コブシ〜人頭大の円礫・角礫混）
- 11 5YR4/4にぶい赤褐色混砂礫粘土（コブシ〜人頭大の円礫・角礫混）
- 12 石垣（H546）裏込層（砂礫多量）〔明治期の石垣修復に伴う裏込層〕
- 13 7.5YR6/2灰褐色混砂礫土（しまりあり、φ〜3cm礫多量）〔整地土層〕
- 14 5YR3/4暗赤褐色混砂礫粘土（13層混）
- 15 5YR4/2灰褐色混礫土（しまり弱、人頭大の礫多量）〔平成3・4年度修理に伴う控石柱No.48設置坑埋土層〕
- 16 5YR2/2黒褐色土〔表土層〕
- 17 5YR4/4にぶい赤褐色礫土（しまり弱）〔園路玉石の埋土層〕
- 18 5YR4/3にぶい赤褐色土（しまり弱、礫混、コンクリート片含）〔現代の盛土層〕
- 19 5YR5/2灰褐色礫土（しまりなし、φ〜2cm砕石混）〔戦前の建物基礎の基盤層〕
- 20 5YR3/3暗赤褐色土（φ3〜5cm礫混、瓦片・ガラス片含）〔明治期の旧表土層か〕
- 21 5YR4/6赤褐色土（しまりあり、瓦片多量）〔江戸期の旧表土層〕
- 22 5YR5/6明赤褐色土（しまり強）〔江戸期の整地土層〕



第88図 長堀トレンチ04土層断面図

ある。

〔土坑2〕 c 区の北端で確認した長さ 0.4 m 以上、深さ 0.75 m 以上の土坑である。土坑埋土の上面にH鋼材や鉄板を敷き、建物⑬が建てられたことが確認できた。

〔石垣（H553）〕 北側に面を持つ間知積の石垣である。石垣は横目地を通して2段に積まれており、高さ約 0.5 m を測る。築石は安山岩であり、1 辺 30cm、控長 30cm を測る。裏込層はコンクリート片・ガラス片などを含む灰褐色混礫土であり、建物⑬を埋めて盛られている。また上記の申請図では、建物⑬の左右で石垣内側の石垣が途切れて記載されており、この石垣が建物撤去後に造られたことを追認できる。当時の原議「昭和 35 年度 岳の丸長堀裏石積補修工事」には、長堀の中ほどで 63 m の範囲で石積み工事が行われたことが記されている。工事内容は北側 28 m 部分の石垣修復と南側 35 m の部分の石垣新設であるが、調査結果と石垣石材の違いから、石垣（H549）の一部〜石垣（H558）がこの時に新設され、石垣（H549）の残り部分が修復されたとみられる。

平成 30 年度（2018）の調査では、コンクリート基礎と石垣（H553）の間を掘削し、2 段の煉瓦基礎を検出した。煉瓦はいずれもいわゆる赤煉瓦ではなく、モルタル煉瓦である。検出した煉瓦基礎の中央部は煉

瓦を0.5個分ずらして配置しているが、用途等は詳らかではない。また、コンクリート基礎を除去し、下層を掘削したところ、コンクリート基礎を配置するための掘方を検出した。深さ約0.4m、南北検出幅約0.4m、東西は調査区を越えて広がっている。前述の煉瓦基礎に伴うもので、礫を多く含む土で埋められていた。

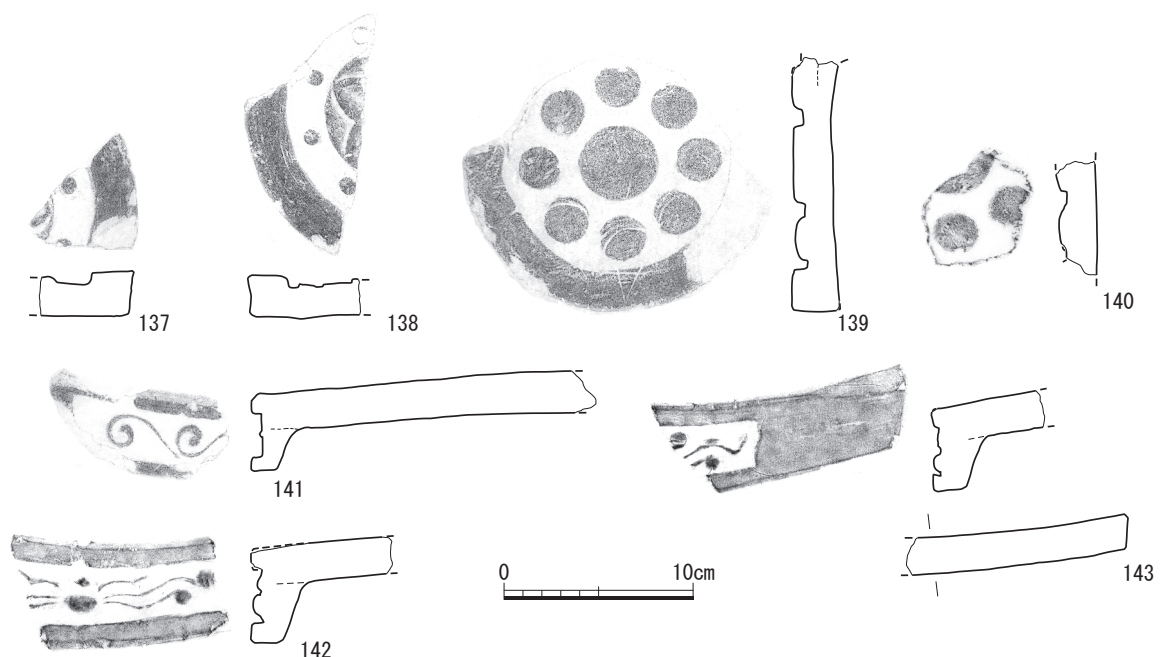
トレンチ04周辺の石塁北側(c区)では地表下約70cmに江戸期の竹の丸の遺構面が存在することが確認できた。また、石塁上面は近現代の掘削や改変により大きく乱されているものの、石垣(H546)の栗石層上面と北側の遺構面では約1mの比高差が認められ、石塁であったかどうかは不明であるが、長堀背後に竹の丸より一段高い高まりが存在したことが明らかとなった。一方、現在の控石柱に先行する遺構の可能性があった控石柱No.48の添石は、調査の結果、控石柱とともに平成3・4年度(1991・1992)修理工事の際に据え直されていることが判明した。平成30年度(2018)の調査においても、南側を明治期の石垣修理裏込層、北側を旧日本陸軍の施設による掘削や改変によって大きく乱されているものの、地表下約60cmに江戸期の整地土層を確認した。

**【遺物】**

第89図137～143はトレンチ04から出土した瓦類である。137～139・141はc区Ⅲ層、140はa区盛土層(Ⅲ層)、142・143はa区表土(I層)から出土した。

137・138は桔梗紋軒丸瓦である。137は瓦当右半部8分の1程度が残存し、138は瓦当左下半部5分の1程度が残存し、両者ともに瓦当文様は桔梗紋の内区の周囲に珠文が配されるものである。137は珠文が2個残存し、丸みを帯びる花卉が僅かに認められる。138は珠文が4個残存し、珠文の頂部は丸みを帯びる。花卉は2弁認められ、やや丸みを帯び、先端はやや尖る。両者とも瓦当周縁・側端は横方向の丁寧なナデを施し、138の瓦当裏面の中心付近は縦方向のナデが顕著である。また、137の裏面には鉄さびが付着する。

139・140は九曜紋軒丸瓦である。139は丸瓦部を欠くほか、瓦当3分の2程度は残存する。瓦当文様は中心曜、周曜8個が完全な形で残り、中心曜径3.9cm、周曜径2.2cm、周縁幅は2.1cmを測る。140は瓦当中心部付近の8分の1程度残存する。瓦当文様は中心曜の一部と周曜2個が残り、うち1個は完形で、周曜径2.5cmを測る。両者ともに瓦当周縁・側端・裏面側縁近くに横方向のナデが施され、瓦当裏面中央付



第89図 長堀トレンチ04出土遺物1

近は不整方向のナデが施される。

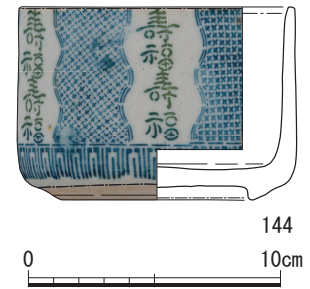
141 は中心飾を欠く軒平瓦片で、瓦当左半部 4 分の 1 程度と平瓦部の一部が残存する。瓦当は顎貼り付け技法で成形されており、やや斜方向のカキヤブリが認められる。瓦当文様には、左側の上、下に反転する唐草文が認められる。瓦当周縁・側端・裏面には横方向の丁寧なナデが施されており、上端角に面取りを意識したナデが僅かに認められる。平瓦部の凹面は瓦当付近に横方向のナデ、それ以外は縦方向のナデが施されている。凸面も同様の調整となる。

142・143 は軒棧瓦の軒平部瓦当片である。142 は軒平部瓦当中央付近約 3 分の 1 程度の破片で、平瓦部も一部残る。143 は軒平部瓦当右側約 3 分の 1 程度の破片で、平瓦部も一部残る。両者ともに瓦当は顎貼り付け技法で成形されている。瓦当文様は、142 で蕪状の中心飾から 3 条の太い蔓が伸び、上から 2、3 番目の先端が珠文状となるのに対して、143 で 3 本の蔓の上から 1、3 番目の先端が珠文状となり、違いを見せる。両者ともに瓦当周縁・側端・裏面に横方向のナデ、そのほかにも丁寧なナデが施されている。また 143 の左上端隅を面取りしている。

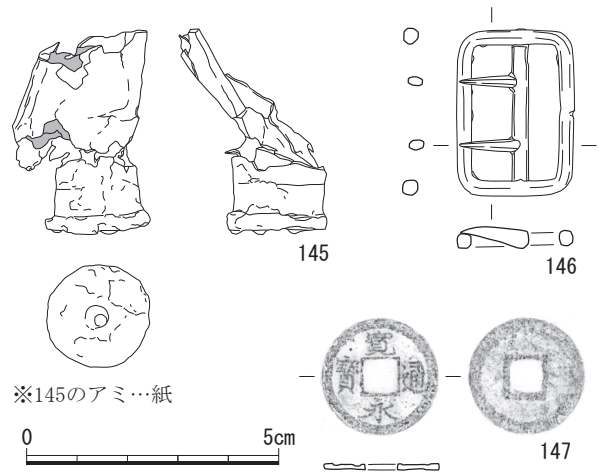
第 90 図 144 はトレンチ 04 a 区 I 層から出土した磁器染付（印判手）筒形蓋付鉢である。口縁部から高台部まで比較的残りが良い。高台は底部端のやや内側に付き、断面逆三角形を呈し、露胎となる。体部は底部端から垂直に立ち上がり、筒状を呈する。口縁端部を平たく仕上げている。外面に格子状の細文と「寿福寿福」の文字が描かれ、底部近くには花卉文が巡る。

第 91 図 145～147 はトレンチ 04 から出土した金属製品である。145 は a 区表土（I 層）、146・147 は c 区整地土層上面（III 層）から出土した。

145 はスナイドル銃の薬莖で、ケース（薬筒部）の一部まで残存する。ディスク（底板）は鉄製で、そのほかは銅製である。ディスク裏には打撃痕が認められる。146 は、銅製の留金具である。長方形の形状で、長軸中程に回転軸があり、先端が尖る 2 本のツク棒（ピン）が付く。147 は寛永通宝である。いわゆる新寛永で、背面に特に文字は認められない。



第90図 長堀トレンチ04  
出土遺物 2



第91図 長堀トレンチ04出土遺物 3

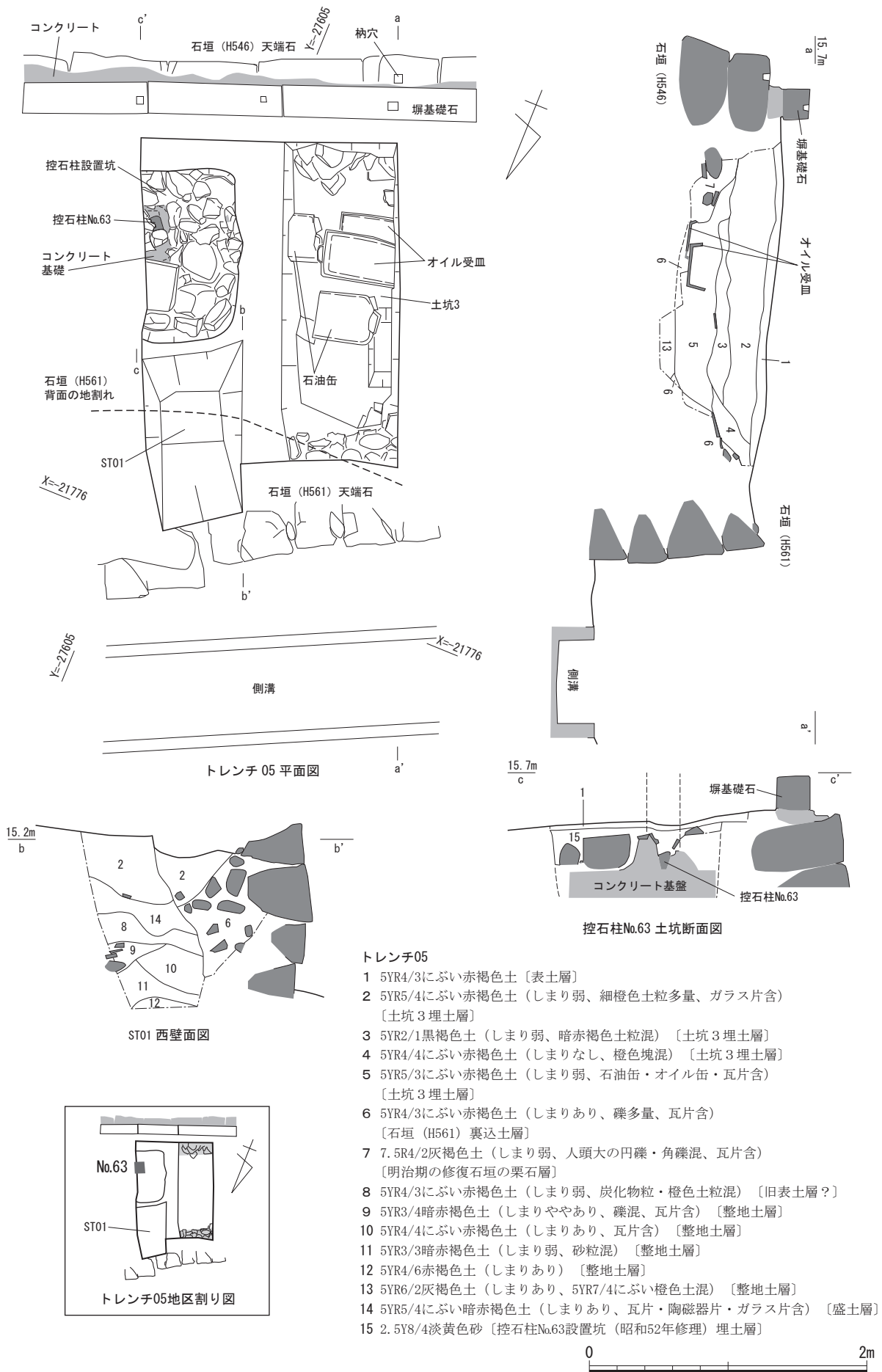
## ⑤ トレンチ 05 (92～95 図)

### 【トレンチの設定】

古い時期の長堀に関連するとみられる石垣（H546）天端石の柄穴の性格を確認するため、馬具櫓から東側 27 m 付近の石塁内面石垣（H561）の崩落部付近に設定したトレンチである。

### 【層序など】

この付近の土層は深さ 70cm 近く、近現代の土坑 3 により大きく乱されていることが判明した。また、石垣（H561）背面に設定した小トレンチ（ST01）では、旧表土層となる III 層（8 層：橙色土粒を含むにぶい赤褐色土層）や近世の整地土層となる V 層（しまりのあるにぶい赤褐色土層・砂粒を含んだ暗赤褐色土層）が北側へ傾斜していることや、石塁下には石垣（H561）に先行する石垣や裏込層が存在しないことが確認された。これらのことから、現状で石塁となっている長堀背後の高まりは北側が土斜面となっていたこと



第92図 長塀トレンチ05平・断面図

が確認できた。

### 【石垣 (H546) 裏込層・天端石の柄穴】

土坑3により裏込層が大きく削られており、確認できた栗石の幅は石垣表面より約1mであった。栗石は20cm大のものが主体を占め、円礫・角礫の割合がほぼ同じであるが、一部に瓦片も混じる。明治期の修復石垣に伴う栗石層であろう。

トレンチ西端付近の天端石には、塀基礎石の柄穴とほぼ並ぶ位置に方形の柄穴が1点掘り込まれている。柄穴は1辺6cm、深さ5cmを測る。土坑3によりこの付近の土層が大きく削られているため、長塀との関連性は確認できなかった。

### 【控石柱およびその設置坑】

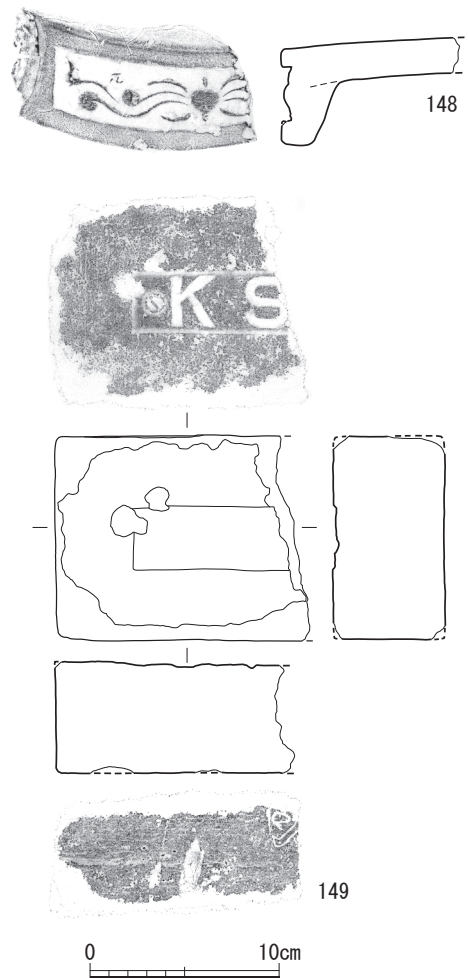
〔控石柱 No. 63〕 頭部 B1 類のもので、平成 27 年 (2015) の台風により根元のコンクリート基礎との境付近で折れている。石材の中程にコンクリートを使用した補修痕が認められる。検出長約 197cm、1 辺約 27cm、柄穴の長さ 21cm、柄穴の幅約 6cm を測る。控石柱は昭和 52 年度 (1977) と平成 3・4 年度 (1991・1992) の保存修理工事の対象であるが、何らかの理由で平成 3・4 年度の工事の際に抜き取り補修が実施されなかったとみられ、昭和 52 年度に設置されたコンクリート基礎を残す。設置坑は 1 辺約 1.22 m を測る方形のもので、土坑 3 埋土を切って掘られている。地表下 30cm にコンクリート基礎を設置し、控石柱を据えた後、根元に亀腹状のコンクリートの高まりを造って固定している。基礎上に人頭大の礫を並べて砂で埋め戻している。トレンチ 02 の控石柱 No. 15 基礎と同じ構造である。

### 【その他の遺構】

〔土坑 3〕 石塁上で確認した深さ約 0.7 m の土坑である。調査区を越えて広がっており、規模などは不明である。断面が皿状を呈し、鉄製の石油缶 2 缶とオイル受皿とみられる浅い方形の鉄皿 2 点が並べて置かれていた。埋土は細かい橙色土粒を含むにぶい赤褐色土や黒褐色土などであり、各層に陶器片・ガラス片を含む。土坑は石油缶から判断して、米軍が熊本城を接収していた時期 (昭和 20 年 (1945) 10 月 5 日～昭和 31 年 (1956) 10 月 14 日) か、遅くとも昭和 35 年 (1960) 整備までには埋められたと考えられる。

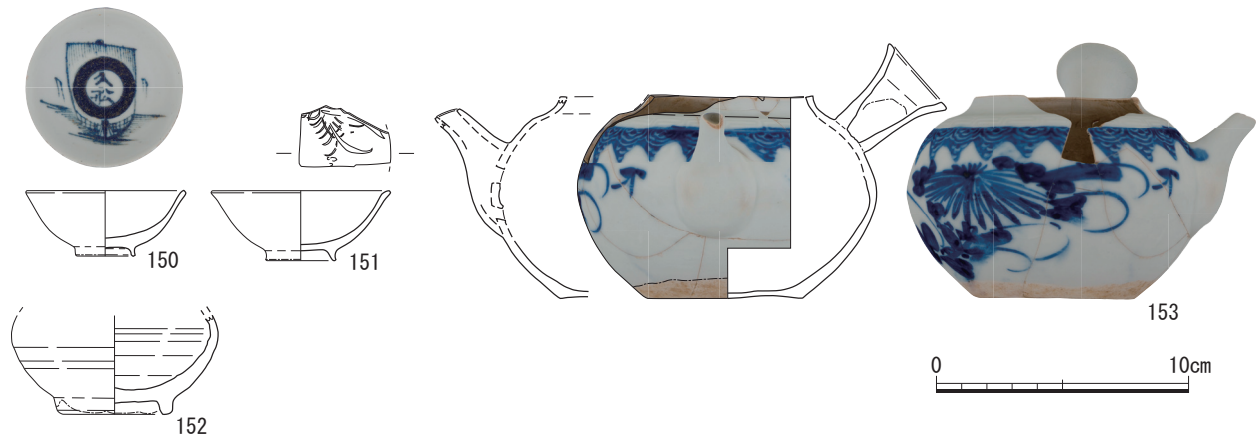
〔石垣 (H561)〕 北側に面をもつ間知積の石垣である。石垣は横目地を通して 4 段に積まれており、高さ約 1.25 m を測る。築石は方形の安山岩であり、1 辺約 35cm、控長約 45cm を測る。裏込層は多量の礫とともに瓦・陶磁器・ガラス片を含むにぶい赤褐色土 (6 層) である。石垣は今回の地震で幅約 5.6 m の範囲が膨らみ、その中心の幅約 2.7 m の範囲が崩落した。裏込層と背後の土との境で円弧滑りを起こしたことが断面観察で確認された。石垣は近代に造られたものであろう。

トレンチ 05 では、石塁上に終戦後とみられる土坑 3 が掘られたため、目的とした古い時期の長塀の痕跡などを確認できなかった。ただ、石垣崩落部に設けた小トレンチの断面観察の結果、現状で石塁となっている長塀背後の高まりが、本来は内側 (北側) に石垣を持たず土斜面であったことが確認された。



第93図 長塀トレンチ05出土遺物 1





第94図 長塚トレンチ05出土遺物2

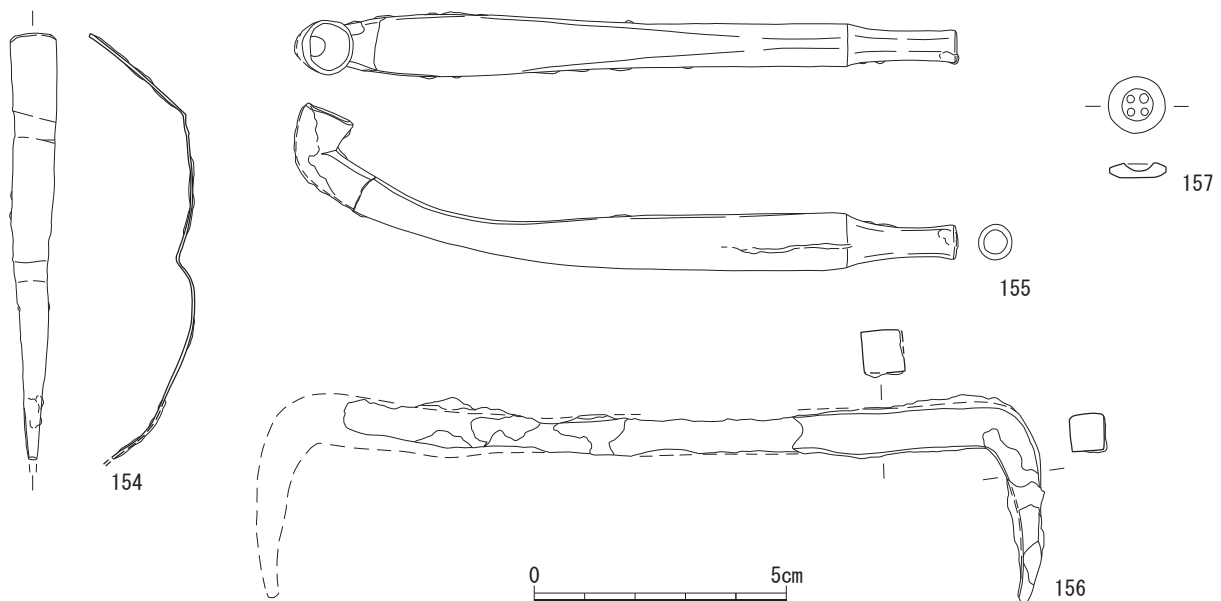
【遺物】

第93図148は石垣(H561)背面崩落部分(Ⅱ層)から出土した軒棧瓦の軒平部瓦当片である。左半部の破片で、平瓦部も残る。瓦当は顎貼り付け技法で成形されている。瓦当文様は蕪状の中心飾から5本の蔓が伸び、上から2、4番目の先端が珠文状となる。瓦当周縁・側端・裏面に横方向のナデ、その他も丁寧なナデが施されている。瓦当面に「元」の文字が認められる。

第93図149は土坑3埋土(Ⅰ層)から出土した耐火煉瓦である。3分の2程度残存し、幅9.9cm、厚さ7.0cmを測る。表面中央に「KS」の刻印が認められる。側面の割れ口にも何らかの刻印らしきものが認められるが、不明瞭である。

第94図150～153はトレンチ05から出土した陶磁器類である。150・153はST01Ⅰ層、151は土坑3埋土(Ⅰ層)、152は石垣(H561)裏込土層(Ⅰ層)から出土した。

150は磁器色絵小坏の完形品である。高台径は小さく、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。内底面に、帆船に「久松」の文字が描かれている。151は磁器色絵小坏の口縁部から高台にかけての破片で、2破片の接合資料である。高台径は小さく、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。内底面の上絵が剥落している。152は磁器小壺で、高台から胴部にかけての破片である。高台は厚く、端部を丸く仕上げる。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。内面は回転ナデによ



第95図 長塚トレンチ05出土遺物3

り成形する。153 は磁器染付急須で、ほぼ完形品である。体部はやや上位に最大径があり、そこから上向きに注口が付き、4つの穴をうがつ。また注口から向かって右側90度よりやや手前に振った位置の上方に把手が付く。注口と把手は型成形、体部は上位を型成形、下位をロクロ成形で形づくる。外面には体部上位に雷文と瓔珞文を型成形で描き、把手の反対側に主文である菊花文と蝶2頭を染付で描く。体部の底部近くから底部にかけて露胎している。

第95図154～156はトレンチ05から出土した金属製品である。154・155はST01 I層、156は石垣(H561)裏込土層(I層)から出土した。

154は用途不明の銅製金具である。厚さ1mmの扁平なもので、途中折れが入りながら、先端に向かって幅が狭くなり、先端は尖るものと思われる。155は銅製煙管の完形品である。吸口をすばませ、煙道は断面を縦長の楕円形から煙口に向かって上を平たくしながら扁平となることを特徴とする。別鑄で作られた煙口を差し込んでいる。156は鉄製の鋏である。断面長方形の金具をコの字状に折り曲げたものである。先端は片側のみ残存している。

第95図157はST01 I層から出土した貝製の釦である。表面中央が窪み、四つ孔が認められる。

## ⑥ トレンチ06(第96図)

### 【トレンチの設定・層序など】

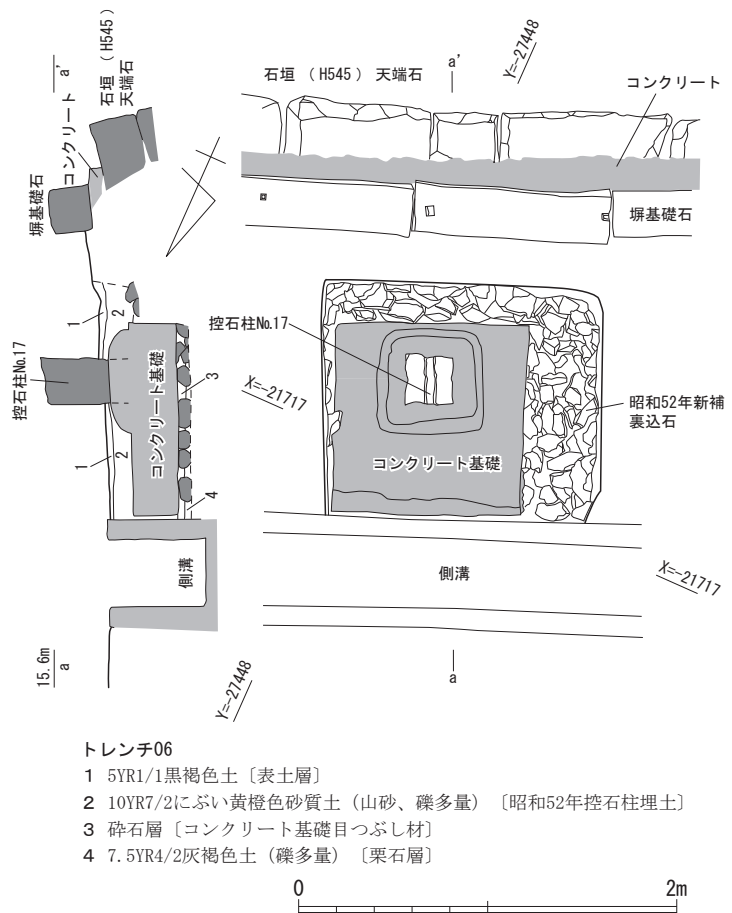
控石柱No.17の地下構造の確認を目的として設定したトレンチである。

層序は、表土(約2cm)の下に、昭和52年(1977)の史跡整備に伴う山砂層(約10cm)と、灰褐色土を含む安山岩の新補栗石層(4層)のII層からなる。

### 【控石柱およびその設置坑】

〔控石柱No.17〕頭部A類のもので、現状で下方の柄穴部分中程と、上方の柄穴部分直下の2箇所折れたため、交換対象となった。この石は昭和52年の保存修理工事の際に抜き取られ、コンクリート基礎の上に据え直されている。後述のNo.18に跨る大規模な修理を実施しており、設置坑はトレンチを越えて広がっている。コンクリート基礎は地表下10cmに設置し、中央やや南寄りに控石柱を据えた後で根元に亀腹状のモルタルの高まりを作って固定している。基礎の上に人頭大の安山岩の新補栗石を並べて砂で埋め戻している。トレンチ02の控石柱No.15基礎と同じ構造である。この安山岩の新補栗石材は青みがかった質量の重い角礫の安山岩であるという特徴を持ち、同時期の数寄屋丸地図石(昭和55年(1980)修理)や西大手門(昭和56年(1981)修理)の修理石垣でも同様の栗石が確認できる。

調査の結果、地表下約0.12mでコンク



第96図 長堀トレンチ06平・断面図

リートの基礎を検出し、コンクリート基礎はⅡ層（現代の盛土）の中で収まることを確認した。

⑦ トレンチ 07（第 97 図）

【トレンチの設定・層序など】

控石柱No. 18 の地下構造の確認を目的に設定したトレンチである。

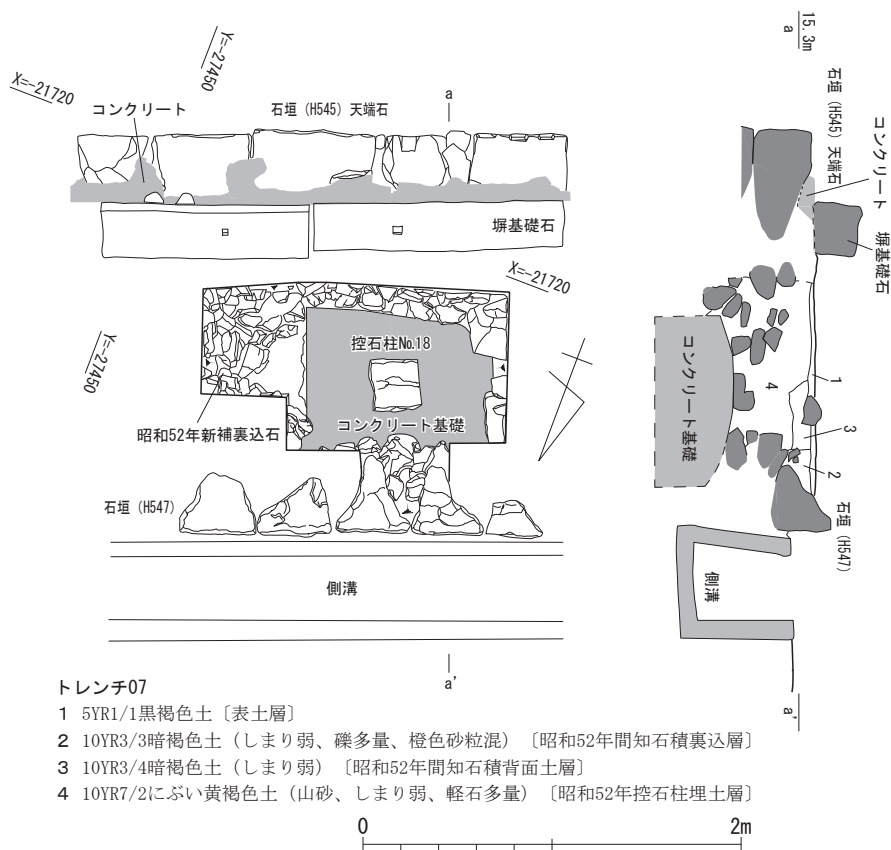
層序は、表土の下に、昭和 52 年（1977）の間知積石垣（H547）に伴う裏込層（2層）と、昭和 52 年の史跡整備に伴う山砂層（約 40 cm）、さらに安山岩の新補栗石層のⅡ層からなる。

【石垣（H547）裏込層】

石垣（H547）は、長堀控石柱周辺の土砂流出への対応として昭和 52 年の修理に際して整備された間知石積であることが報告書から判明している（熊本市、1979）<sup>5</sup>。検出幅（石垣表面からの幅）約 0.5 m を測る。裏込層は壁面で観察すると南北で 2 層に分かれる。北側（2層）は礫を多く含み、5～10cm 大の礫を主体とする。南側（3層）は礫がほとんど入らず、埋土が主体となる。下層の山砂層との境界にはビニールと、薄い漆喰が重なるように検出されており、昭和 52 年修理時の不要になった長堀の資材が流れ込んだ可能性が高い。

【控石柱およびその設置坑】

〔控石柱No. 18〕 頭部 A 類のもので、現状で地表面直下と下方柄穴部分中程の 2 箇所折れたため、交換対象となった。そのうち、下方穴の破損箇所では接合ボルトがあり、過去の破損も確認できた。この石は昭和 52 年の保存修理工事の際に抜き取られ、コンクリート基礎の上に据え直されている。前述の控石柱No. 17 に跨る大規模な修理を実施しており、設置坑は調査区を越えて広がっている。コンクリート基礎は地表下 40cm に設置し、控石柱No. 17 と異なり、全面を亀腹状に盛り上げている。基礎は人頭大の安山岩の新補栗石と砂で埋め戻している。



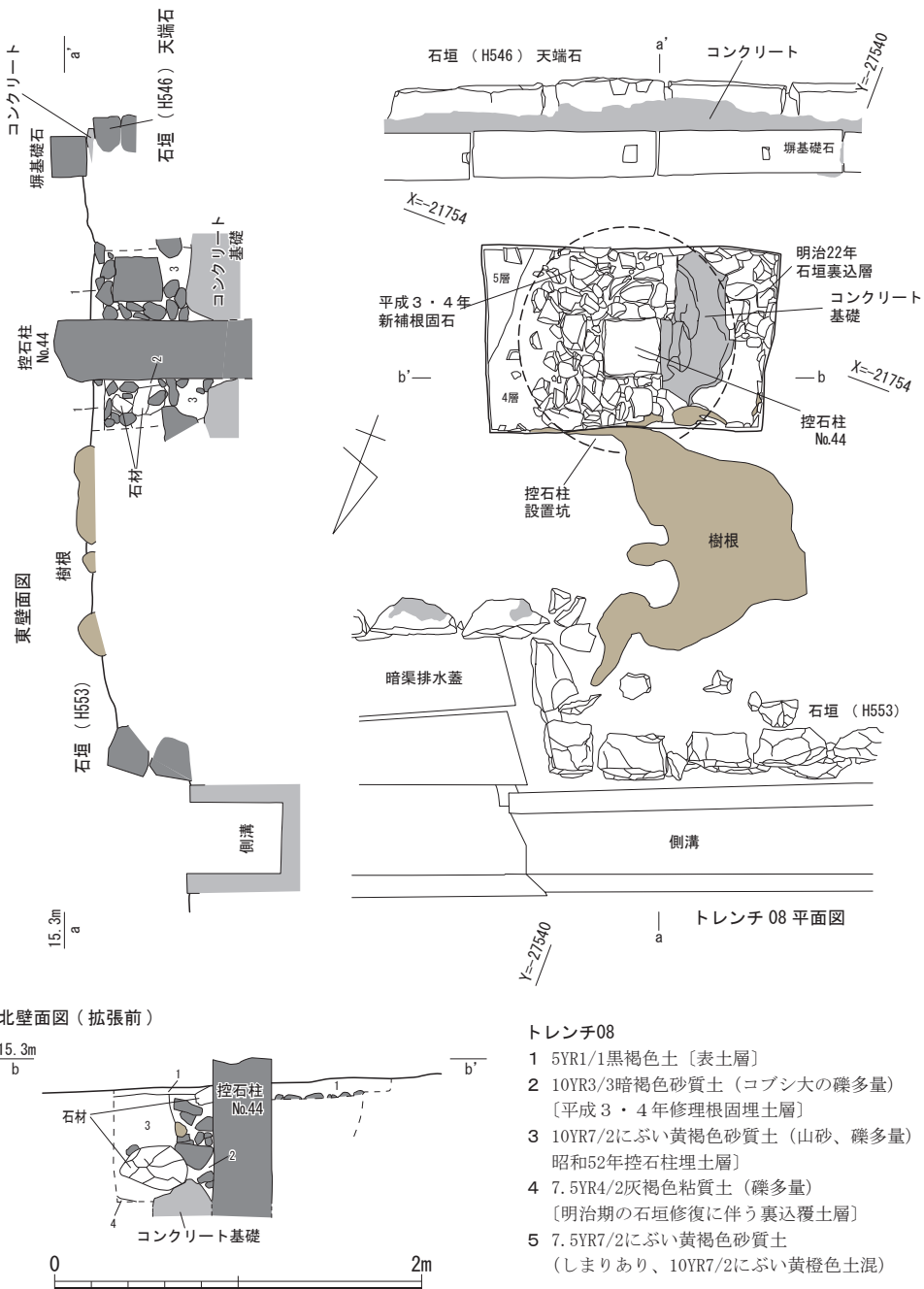
第97図 長堀トレンチ07平・断面図

調査の結果、現地表下0.4 mでコンクリートの基礎を検出し、コンクリート基礎はⅡ層（現代の盛土）の中で収まることを確認した。また、石垣（H547）裏込層の観察から、①控石柱の設置・埋設、②塀の解体修理、③間知石の設置という修理の流れが確認できた。

⑧ トレンチ 08（第 98・100 図）

【トレンチの設定・層序など】

控石柱No. 44 の地下構造の確認を目的として設定したトレンチである。層序は、表土（約 6 cm）の下に、昭和 52 年（1977）の史跡整備に伴う山砂層（3 層）とそれを切り込む平成 3・4 年（1991・1992）の史跡整備に伴う土層（2 層）のⅡ層、さらに明治 22 年（1889）の石垣修復に伴う裏込層（4 層）のⅣ層からなる。



第98図 長塀トレンチ08平・断面図

### 【控石柱およびその設置坑】

〔控石柱No. 44〕平成3・4年度（1991・1992）に交換された頭部C類の新補材である。設置坑は1辺約1.2 mを測る。平成3・4年度（1991・1992）の工事の際に抜き取り補修が実施され、周囲に礫を充填する据え直しが行われた。礫は灰白色の安山岩の新補栗石を主体とし、砕かれた控石柱の旧材も出土した。礫層は昭和52年（1977）修理時の山砂層を切り込むように充填されている。コンクリート基礎は昭和52年に設置されたと考えられ、周囲及び底に型枠がなく周囲の栗石を巻き込んでいる。

複数回の修理痕跡を検出し、現地地表下0.65 mでコンクリートの基礎を検出した。コンクリート基礎は明治22年以降の土層内で収まることを確認した。

### ⑨ トレンチ 10（第99・100図）

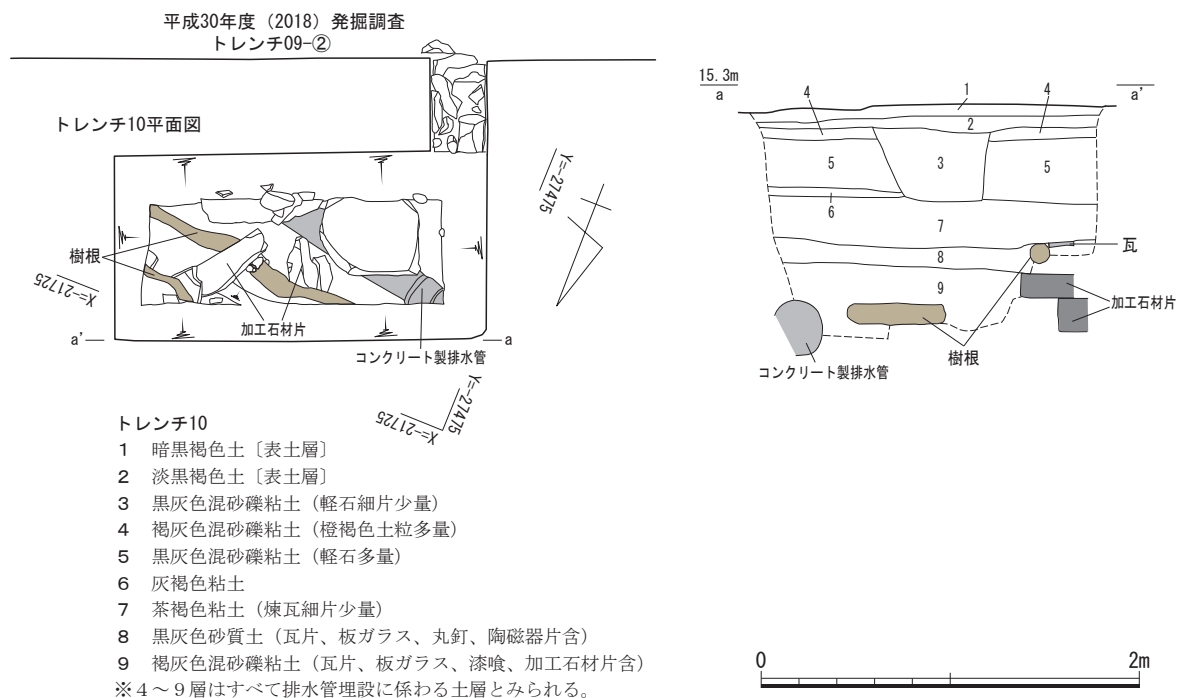
#### 【トレンチの設定・層序など】

長堀復旧工事に付随して行なわれた側溝修理に伴う発掘調査のトレンチ09-②で石組の暗渠が確認された。暗渠は側溝と堀の下を通過して築石の開口部から落下、石垣下の集水桝を経て坪井川へ流れ込んでいる。トレンチ10は、トレンチ09-②北辺から北に0.5 m離れた場から暗渠を南北中心軸として東西方向に2 m、南北方向に1 mに設定したトレンチである。

層序は、表土の下に、排水管理設に係わる土層（4～9層）のⅡ層からなる。

#### 【その他の遺構】

〔排水管理設溝〕調査区内で確認した深さ約1.2 mの埋設溝である。調査区を越えて広がっており、規模などは不明である。小円礫を多量に含むコンクリート製の排水管が北西から南東の方向に置かれ、投げ込まれるように周囲に破碎された凝灰岩製の加工石材や礫が多数出土した。加工石材には溝が彫られており、暗渠水路に使用された側石と考えられる。埋土は黒灰色砂質土や茶褐色粘土などであり、4層の褐灰色混砂礫粘土を化粧土として整備している。各層に陶器片、丸釘、ガラス片を含み、8層からは「昭和三十（以下欠損）」と記された刻印瓦が出土している。施工時期は埋設された排水管の形状より昭和40年代以降と考えられる。



第99図 長堀トレンチ10平・断面図

調査の結果、トレンチ 09-②から続くと想定された石組暗渠排水は、昭和 35 年（1960）以降の環境整備で破壊され、コンクリート製の排水管に変更されたことが判明した。ただし、排水管の行方及び旧暗渠排水の規模等は確認できなかった。

#### ⑩ トレンチ 08・10 出土遺物（第 100 図）

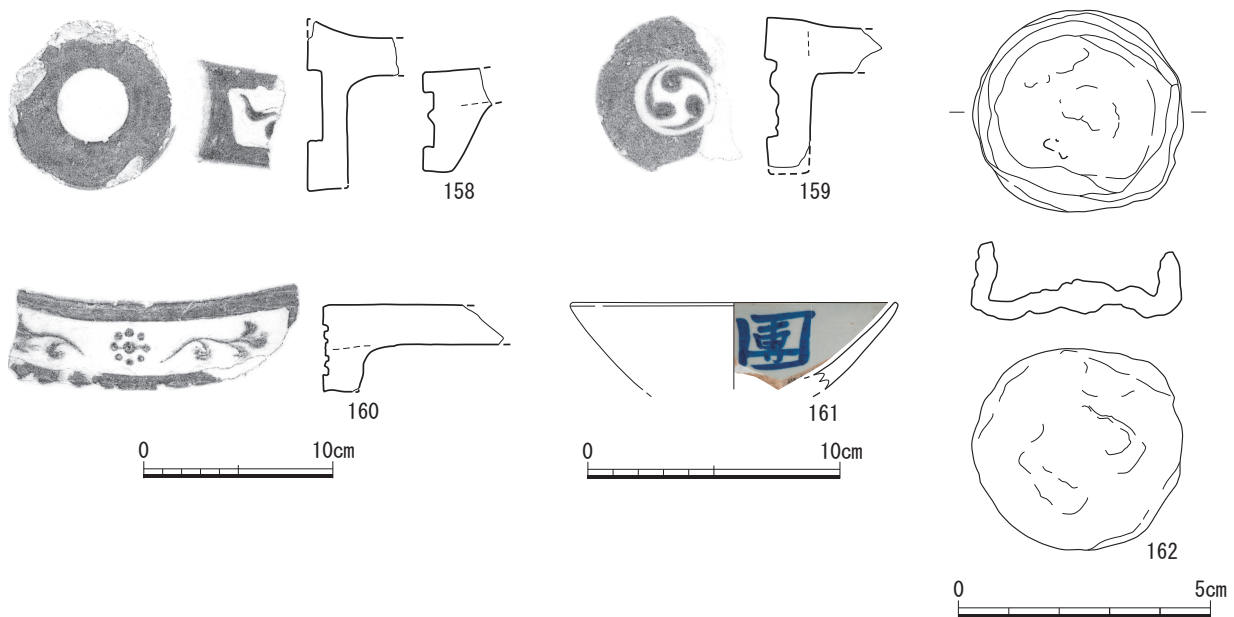
第 100 図 158～162 はトレンチ 08・10 から出土した陶磁器・瓦・金属製品である。

158 はトレンチ 08 山砂層（Ⅰ層）、159・160・162 はトレンチ 10 Ⅰ層、161 はトレンチ 10 Ⅱ層から出土した。

158～160 は瓦類である。158 は蛇の目紋の軒目板棧瓦で、飯田丸での出土瓦（熊本城調査研究センター、2009 年、遺物番号 293）と類似するが、軒平部は異なる。瓦当裏面を含めてミガキを施している。瓦当面にはキラコが認められる。159 は巴文の軒目板棧瓦で、軒丸部のみ残る。断面を観察すると、軒丸部の瓦当を棧瓦に接合している。瓦当面にはキラコが認められる。160 は九曜紋の軒平瓦で、飯田丸出土軒平瓦の分類<sup>6</sup>では、「九曜紋軒平瓦 Aa」と同文である。平瓦凹面は丁寧なナデ調整がみられるが、凸面は粗いナデ調整で瓦当裏面に凹型台と思われる痕跡が残る。

161 は磁器染付碗である。見込みに化学コバルトによる「團」の字が描かれており、第六師団の「團」である可能性が高い。

162 は鉄製の焼夷弾部品である。六角形の製品で、M86 焼夷弾の信管の部品と思われる。



第100図 長塚トレンチ08・10出土遺物

#### （4）小結

##### 【石垣（H545・546）裏込層】

長塚がのる石垣（H545・546）は、明治 22 年熊本地震により大規模に被害を受けたことが明治 22 年被災報告図<sup>7</sup>によって知られていたが、今回の調査では、江戸期の石垣裏込層が天端石や石垣上部の背面を整地土層とし、整地土層の下から栗石層が検出されるのに対し、明治期修復石垣では栗石層が旧表土や現表土直下に存在することが明らかとなった。また、栗石上面の形状も、明治期のものが水平に積まれているのに対して江戸期のものは石垣背後へ向かって下がっていることを確認し、検出高や構造に大きな違いがあることが明らかとなった。このことにより、石垣（H545・546）は崩落箇所だけでなく変状箇所を含めて明治期に大規模な修復を受けていたことが追認できた。

### 【江戸期の控石柱】

控石柱は68本中の60本が戦後の保存修理工事により基礎の据え直しや新補石材への取り換えが行われている。残りの8本について、明治22年熊本地震後の改修を受けていない控石柱の設置坑は控石柱No. 3・No. 4に伴うものだけであることが明らかとなった。これらは直径1.3mを越える素掘りの土坑の中央に石を据え、周囲を礫で固める基礎構造をとる。この2本の控石柱はともに頭部がカマボコ型を呈する凝灰岩製の頭部A類であることから、この形状の控石柱が明治22年（1889）以前の長堀の控石柱であったと考えられる。

### 【江戸期の土層】

南側を明治期の石垣修理裏込層、北側を旧日本陸軍の施設による掘削や改変によって大きく乱されているものの、地表下約60cmに江戸期の整地土層を確認した。なお、平成28年熊本地震後の控石柱の修理で新規に設置されるコンクリート基礎については、江戸期の整地層を保護し、近代以降の修理範囲内で設置を行なうこととした。

### 【控石柱】

交換予定の控石柱で根巻のコンクリート盤を1ヵ所、コンクリートの基礎を3箇所を確認した。いずれも、明治22年以降の土層内で収まることを確認した。なお、控石柱については基礎から深掘りして交換する場合にV層（江戸期の栗石層）及び石垣築石部に影響が及ぶ可能性があったため、協議の結果、根元からの交換は行わず、現代の修理の範囲内で修理を行なうこととした。

### 【暗渠水路】

現地地表下90cm付近で、破砕された暗渠の部材と考えられる安山岩製の加工石材が多数検出された（トレンチ10）。さらに、現地地表下1mで北西方向に延びる排水管が検出され、出土した瓦の刻印等から昭和30年代以降に修理されたことが判明した。

#### 註

- 1 熊本市『重要文化財熊本城監物櫓・長堀修理工事（屋根葺替・部分修理）報告書』1979年
- 2 熊本市『特別史跡熊本城跡 馬具櫓復元整備事業報告書』2016年
- 3 1と同じ
- 4 熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書2－本丸御殿の調査－』熊本城調査研究センター報告書第2集 2016年
- 5 1と同じ
- 6 熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書1－飯田丸の調査－』熊本城調査研究センター報告書第1集 2014年の遺物 掲載番号225他
- 7 宮内公文書館蔵「震災ニ関スル諸報告」（識別番号50272）



第101図 長塀出土瓦刻印



第19表 長堀刻印瓦一覧

No.	種別	刻印位置	刻印形状	出土年度	出土箇所	出土層位	備考
1	丸瓦	凸面	大型円形	H 29	トレンチ 01-② a 区	栗石層 (IV層)	源
2	丸瓦	凸面	大型円形	H 29	トレンチ 02 b 区	盛土層 (II層)	源
3	平瓦	凹面	大型円形	H 29	トレンチ 02 a 区	栗石層上面 (II層)	半
4	丸瓦	凸面	大型円形	H 29	トレンチ 05 土坑 3	埋土	五郎
5	平瓦	凹面	大型円形	H 29	トレンチ 02 b 区	盛土層 (II層)	少
6	丸瓦	凸面	大型円形	H 29	トレンチ 02 b 区	盛土層 (II層)	四
7	丸瓦	凸面	長方形	H 29	トレンチ 02 b 区	盛土層 (II層)	[ ]
8	平瓦	凹面	長方形	H 29	トレンチ 02 a 区	栗石層上面 (II層)	土山少太夫
9	平瓦	凹面	長方形	H 29	トレンチ 05 ST01	含瓦層 (II層)	土山 [ ]
10	平瓦	凹面	長方形	H 29	トレンチ 02 c 区	盛土層 (II層)	土山甚左衛門
11	目板瓦	表面	長方形	H 29	トレンチ 01-③ b 区	控石柱No.5 土坑	土山仁右衛門
12	平瓦	凹面	小型長方形	H 29	トレンチ 02	盛土層 (II層)	二郎兵へ
13	平瓦	凹面	小型長方形	H 29	トレンチ 02	盛土層 (II層)	弥右衛門
14	平瓦	凹面	小型長方形	H 29	トレンチ 02	盛土層 (II層)	四郎兵へ
15	平瓦	凹面	小型長方形	H 29	トレンチ 01-② b 区	整地土層 (V層)	五右衛門
16	丸瓦	凸面	小型長方形	H 29	トレンチ 02	盛土層 (II層)	左 [ ]
17	平瓦	凹面	小型長方形	H 29	トレンチ 01-① b 区	整地土層 (V層) 上面	茂兵衛
18	丸瓦	凸面	小型長方形	H 29	トレンチ 02 c 区	盛土層 (II層)	□兵衛
19	丸瓦	凸面		H 29	トレンチ 01-① b 区	整地土層 (V層) 上面	
20	平瓦	凹面		H 29	トレンチ 02 a 区	栗石層上面 (II層)	
21	丸瓦	凸面		H 29	トレンチ 01-① b 区	整地土層 (V層) 上面	
22	丸瓦	凸面		H 29	トレンチ 05 ST01	I 層	
23	平瓦	凹面		H 29	トレンチ 02 c 区	盛土層 (II層)	
24	丸瓦	凸面		H 29	トレンチ 05 ST01	内面石垣裏込土 (I層)	
25	丸瓦	凸面		H 30	トレンチ 10	灰色褐色粘土 (II層)	
26	平瓦	凹面		H 29	トレンチ 01-② a 区	栗石層 (IV層)	
27	平瓦	端部		H 29	トレンチ 04 c 区	整地土層 (V層) 上面	
28	平瓦	端部		H 29	トレンチ 01-② c 区	整地土層 (V層)	
29	棧瓦	凸面	方形	H 29	トレンチ 02 a 区	側溝埋土 (I層)	筑平後 柳川 忠平 散田
30	棧瓦	凸面	方形	H 29	トレンチ 02 a 区	栗石層上面 (II層)	[ ] 平後 [ ] 忠平 散田
31	棧瓦	凸面	方形	H 29	トレンチ 02-① b 区	側溝埋土 (I層)	筑天後 柳川 竹松 散田
32	棧瓦	凸面	方形	H 30	トレンチ 10	灰色褐色粘土 (II層)	[ ] 天後 柳川 竹松 散田
33	棧瓦	凸面	方形	H 29	トレンチ 04 a 区	表土 (I層)	筑天後 柳川 竹松 [ ]
34	棧瓦	凸面	方形	H 29	トレンチ 01	表土 (I層)	筑平後 柳川 金屋 散田 捺しズレ有
35	棧瓦	凸面	方形	H 30	トレンチ 10	灰色褐色粘土 (II層)	筑⑤後 山門郡 内田 柳川村
36	丸瓦	凸面	長方形	H 30	トレンチ 10	灰色褐色粘土 (II層)	柳河 [ ]
37	棧瓦	凸面	長方形	H 30	トレンチ 08 SP44	山砂層	[ ] 吉 [ ]
38	棧瓦	凸面	長方形	H 29	トレンチ 02 c 区	表土・盛土 (I・II層)	筑後国 山門郡柳川村 [ ]
39	棧瓦	凸面	長方形	H 29	トレンチ 05 土坑 3	埋土	大和 渡辺製
40	棧瓦	凸面	方形	H 29	トレンチ 02 b 区	盛土 (II層)	瓦師 松本平治
41	棟瓦	表面		H 29	トレンチ 03 b 区	表土・盛土 (I・II層)	甲斐田 [ ]
42	棧瓦	凸面		H 29	トレンチ 03 b 区	盛土 (II層)	甲斐田 [ ]
43	棧瓦	端部		H 29	トレンチ 03 b 区	盛土 (II層)	甲斐田謹製
44	棧瓦	凸面		H 29	トレンチ 01-③ b 区	表土 (I層)	三十年修補
45	棧瓦	凸面		H 29	トレンチ 03 a 区	表土 (I層)	散竹
46	棧瓦	凸面		H 29	トレンチ 01-③ b 区	表土 (I層)	七
47	棧瓦	凸面		H 29	トレンチ 02 b 区	盛土 (II層)	七
48	棧瓦	凸面		H 29	トレンチ 01-③ b 区	表土 (I層)	元
49	棧瓦	凸面		H 29	トレンチ 04 a・b 区	表土 (I層)	元
50	棧瓦	端部		H 29	トレンチ 04 a・b 区	表土 (I層)	元
51	棧瓦	端部		H 29	トレンチ 01	表土 (I層)	金
52	棧瓦	端部		H 29	トレンチ 05 ST01	内側石垣裏込土 (I層)	大
53	丸瓦	凸面		H 29	トレンチ 02 a 区	栗石層上面 (II層)	忠

第20表 長塚出土遺物観察表 1

第20～24表の出土位置の「N」は「長塚」の略。また、法量の単位はcm、( ) は復元・残存値を示す

軒丸瓦 (三巴文)

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	法量										調整			胎土		備考					
				内区			外区			周縁部		残存率	外面	内面	焼成 粗・密	外面	内面							
				直径	巴巻き方向	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径							幅		高さ	側縁厚			
80	108	N02-①a	表土 (I層)	-	右	14.0	なし	-	-	-	-	-	-	-	瓦当部約1/3残存	-	ナデ	内面	密	外面	黒褐 (2.5Y3/1)	内面	黒褐 (2.5Y3/1)	
80	109	N02-①b	盛土 (II層)	-	左	-	なし	-	1.7	0.6	2.2	0.9	2.0	約1/6残存	ヨコナデ、ナデ	ナデ	内面	密	外面	灰 (7.5Y5/1)	内面	灰 (7.5Y5/1)		

軒丸瓦 (桔梗紋)

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	法量										調整			胎土		備考			
				内区			外区			周縁部		残存率	外面	内面	焼成 粗・密	外面	内面					
				直径	雌蕊径	雄蕊径	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ							側縁厚				
71	85	N01-②a	栗石層 (IV層)	6.8	0.9	3.7	1.9	-	0.8	2.1	0.7	2.5	約3/4残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	内面	密	外面	灰 (5Y5/1)	内面	灰 (5Y5/1)	炭化物含む
71	86	N01-①a	整地土 (V層) 上面	-	-	-	(2.0)	(7)	0.9	2.3	0.8	2.0	約1/5残存	ヨコナデ、ナデ 工具痕	ヨコナデ、ナデ 工具痕	内面	密	外面	灰 (5Y4/1)	内面	灰 (5Y4/1)	範ズレ
80	110	N02-①b	盛土 (II層)	-	-	-	2.0	(9)	0.8	2.0	0.8	-	約1/5残存	ナデ ヨコナデ、ナデ 工具	ナデ	内面	密	外面	灰 (5Y6/1)	内面	灰 (5Y6/1)	範ズレ
80	111	N02-①a	栗石上面・整地土 (IV層)	-	-	-	1.6	-	0.9	1.8	0.9	2.2	約1/7残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	内面	密	外面	灰 (5Y5/1)	内面	灰 (N5/)	
89	137	N04-c	III層	-	-	-	1.8	-	0.8	2.2	0.7	2.3	約1/8残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	内面	密	外面	黄灰 (2.5Y6/1)	内面	灰黄 (2.5Y6/2)	鉄分付着
89	138	N04-c	III層	(7.8)	-	-	1.9	(9)	0.8	2.1	0.6	2.3	約1/5残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	内面	密	外面	灰 (5Y6/1)	内面	灰 (5Y6/1)	

軒丸瓦 (九曜紋)

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	法量										調整			胎土		備考	
				九曜紋			周縁部			残存率	外面	内面	焼成 粗・密	外面	内面					
				中心径	周径	中心径と周径の間隔	幅	高さ	側縁厚											
71	87	N01-①b	表土 (I層)	-	1.8	0.8	0.8	2.1	0.8	(1.3)	約1/5残存	ヨコナデ、ナデ 指頭圧痕	ヨコナデ、ナデ 指頭圧痕	内面	粗	外面	灰 (5Y5/1)	内面	灰 (5Y5/1)	範ズレ
71	88	N01-①b	盛土 (II層)	-	2.0	-	0.9	2.0	0.4	-	約1/6、丸瓦部約1/2残存	工具ナデ、ナデ 布目痕、工具痕	工具ナデ、ナデ 布目痕、工具痕	内面	粗	外面	灰 (5Y6/1) 灰 (5Y5/1)	内面	灰 (5Y5/1)	釘穴、範ズレ 漆喰付着?
71	89	N01-②a	表土・整地土 (I・II層)	(2.2)	2.0	0.6	0.7	2.1	0.7	2.7	約1/4残存	ヨコナデ、ナデ 工具ナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ 工具ナデ、ナデ	内面	密	外面	灰 (N4/) 灰黄 (2.5Y7/2)	内面	灰 (N6/)	
71	90	N01-②a	表土・整地土 (I・II層)	-	2.0	-	0.7	1.8	0.7	-	約1/6、丸瓦部一部残存	工具ナデ、ナデ 布目痕、工具ナデ	工具ナデ、ナデ 布目痕、工具ナデ	内面	密	外面	灰 (N4/) 灰 (7.5Y5/1)	内面	灰 (N4/)	
71	91	N01-③b	表土 (I層)	-	2.2	0.5	0.5	1.8	0.3	-	約1/2残存	工具ナデ、ナデ 布目痕、工具ナデ	工具ナデ、ナデ 布目痕、工具ナデ	内面	粗	外面	暗灰 (N3/)	内面	灰 (N4/)	凸面・瓦当面 キラコ付着

第 21 表 長塚出土遺物観察表 2

軒丸瓦 (九曜紋)

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	法量										調整			胎土		色調		備考
				瓦当直径	文様区径	中央厚さ	中心直径	周曜径	九曜紋		曜と外縁の間隔	幅	周縁部		外面	内面	焼成	外面	内面		
									中心曜と曜の間隔	曜と外縁の間隔			高さ	倒縁厚						外縁部	
80	112	N02-①b	落込埋土 (I層)	(16.0)	(12.8)	-	-	2.1	-	0.6	1.9	0.7	1.2	瓦当部約1/4残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	良	灰 (5Y4/1)	灰黄 (2.5Y6/2)	範ズレ	
80	113	N02-①c	表土・盛土 (I・II層)	(16.0)	(12.0)	-	-	1.9	-	0.7	2.0	0.5	2.3	瓦当部約1/5残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	良	灰 (N4/)	灰黄 (2.5Y6/2)	瓦当面キラコ付着 範ズレ	
80	114	N02-①c	表土・盛土 (I・II層)	(16.0)	(12.4)	-	-	2.2	-	0.8	1.8	0.8	2.5	瓦当部約1/4残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	良	灰 (N4/)	灰 (N4/)		
80	115	N02-①b	盛土 (II層)	(15.8)	-	-	-	2.0	-	0.6	2.2	0.6	2.3	瓦当部約1/6残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	良	灰 (7.5Y4/1) 灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1) 灰 (7.5Y6/1)		
80	116	N02-①b	盛土 (II層)	(16.0)	(13.6)	-	-	-	-	0.5	2.2	0.7	-	瓦当部約1/7、丸瓦部一部残存	工具ナデ、ナデ、ヨコナデ	布目痕、ナデ	良	黄灰 (2.5Y6/1)	黄灰 (2.5Y6/1)		
80	117	N02-①b	表土・盛土 (I・II層)	(17.0)	(12.4)	-	-	-	-	0.8	2.3	0.6	-	瓦当部約1/8、丸瓦部一部残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	良	灰 (5Y6/1)	浅黄 (2.5Y7/3)	摩耗	
80	118	N02-①b	盛土 (II層)	(16.8)	(13.6)	-	-	2.3	-	0.7	2.1	0.6	(2.2)	瓦当部の約1/6残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	良	灰 (5Y5/1)	灰 (N4/)		
80	119	N02-①a	I層	(14.8)	(10.8)	-	-	2.3	-	0.6	2.0	0.6	2.3	瓦当部約1/7残存	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	良	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y5/1)		
89	139	N04-c	整地土上面 (III層)	(16.0)	(11.8)	3.9	0.7	2.2	0.4	0.4	2.1	0.7	2.6	瓦当部約2/3残存	ナデ	ナデ	良	灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	瓦当面離れ砂使用	
89	140	N04-a	盛土 (III層)	-	-	(4.0)	0.6	2.5	-	-	-	-	-	瓦当部約1/8残存	ナデ	ナデ	良	灰 (N4/) 灰 (5Y6/1)	灰 (N4/)		

軒平瓦

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	法量														調整			胎土		色調		備考
				中心飾	左右飾	上弦幅	下弦幅	弧深	上外縁幅	下外縁幅	文様区高	文様区幅	左縁区幅	右縁区幅	面取り幅	顎部上厚	顎部下厚	顎部高	残存率	外面	内面	焼成	外面	内面	
80	120	N02-①b	盛土 (II層)	三葉文	-	-	-	1.1	0.7	2.1	-	-	4.8	-	1.8	2.2	2.3	瓦当部約2/3、平瓦部約1/4残存	ヨコナデ	工具ナデ、ヨコナデ、ナデ	良	灰 (N4/) 灰 (N5/)	灰 (7.5Y5/1) 灰 (N4/)	文様区離れ砂使用	
80	121	N02-①c	表土・盛土 (I・II層)	-	-	-	0.8	-	-	-	-	-	0.5	2.1	-	-	-	瓦当部約1/4残存	ナデ	ヨコナデ	良	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	文様区離れ砂使用 摩耗	
80	122	N02-①b	整地土直土 (I・II層)	九曜紋	-	-	0.9	0.9	2.9	-	-	-	0.2	2.5	1.5	3.0	瓦当部約1/2残存	ヨコナデ	ヨコナデ	良	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)			
89	141	N04-c	III層	-	-	-	0.5	0.7	2.3	-	-	-	0.5	1.8	1.3	2.1	瓦当部約1/4、平瓦部約1/5残存	ヨコナデ	ヨコナデ	良					
100	160	N10	I層	九曜紋	-	-	0.9	0.9	3.2	-	-	-	0.3	2.4	(0.9)	2.2	瓦当部約2/3、平瓦部一部残存	ヨコナデ	工具ナデ、ヨコナデ	良	灰 (N4/)	灰 (N4/)			

第22表 長塚出土遺物観察表3

丸瓦

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	法量		残存率	調整		胎土 粗・ 密	色調		備考
				全長	体部幅		厚さ	凸面		凹面	凸面	
72	93	N01-①b	整地土上面(II層)	(17.4)	-	2.1	工具ナデ、ナデ、 ヨコナデ	凸面 工具ナデ、ナデ、 ヨコナデ	胎土 粗	調整 凸面	色調 凸面	凸面に『源左衛門』の刻印
72	94	N01-②a	栗石層(IV層)	(23.2)	-	1.8	工具ナデ、ナデ	凹面 工具ナデ、 ムシロ状圧痕	胎土 密	調整 凹面	色調 凹面	凸面に『土山五右衛門』の刻印
75	102	N01-①a	盛土(II層)	30.6	14.6	2.0	完形	工具ナデ、ナデ、 ヨコナデ	胎土 密	調整	色調	玉縁部釘穴、体部未貫通の釘穴 凹面に『昭和三十四年修補 口にタ』の刻印
81	124	N02-①c	盛土(II層)	32.5	(17.5)	2.5	全体の約2/3残存	工具ナデ、ナデ、 ヨコナデ	胎土 密	調整	色調	凸面に花文の刻印
81	125	N02-①c	表土・盛土 (I・II層)	(14.8)	-	2.0	体部約1/4残存	工具ナデ、ナデ	胎土 密	調整	色調	凸面に花文の刻印

軒椽瓦・軒目板椽瓦

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種類	法量		調整	胎土 粗・ 密	色調		備考		
					全長	幅			厚さ	外面		内面	外面
71	92	N01-① c・d	盛土(II層)	軒椽瓦	(10.9)	-	-	工具ナデ、ナデ、 ヨコナデ	調整 外面	胎土 密	調整	色調	瓦当面・裏面キラコ付着、いぶし 凸面に『筑平後 柳川 忠平 [ ]』の刻印
74	100	N01-①a	盛土(II層)	軒目板椽瓦	(25.1)	28.6	7.0	工具ナデ、ナデ	調整	胎土 密	調整	色調	釘穴。全面光沢 平瓦部凸面に『昭和三十四年修補、ナ』の刻印
74	101	N01-①b	盛土(II層)	軒目板椽瓦	27.7	(29.0)	7.1	工具ナデ、ナデ	調整	胎土 密	調整	色調	釘穴。全面光沢 平瓦部凸面に『昭和三十四年修補、ホ』の刻印
80	123	N02-①b	盛土(II層)	軒椽瓦	15.2	14.6	3.6	工具ナデ、ナデ、 ヨコナデ	調整	胎土 密	調整	色調	全面キラコ付着
89	142	N04a	表土(I層)	軒椽瓦	(7.3)	(11.5)	-	ナデ	調整	胎土 密	調整	色調	全面キラコ付着 瓦当面・凹面光沢、いぶし
89	143	N04a	表土(I層)	軒椽瓦	(11.5)	(14.3)	-	工具ナデ、ナデ	調整	胎土 密	調整	色調	全面キラコ付着 いぶし
93	148	N05	II層	軒椽瓦	(9.9)	(13.6)	-	ナデ、ヨコナデ	調整	胎土 密	調整	色調	全面キラコ付着 いぶし。瓦当面に「元」の文字
100	158	N08	山砂層(I層)	軒目板椽瓦	(3.6)	(13.5)	-	ナデ	調整	胎土 密	調整	色調	全面キラコ付着 いぶし
100	159	N10	I層	軒目板椽瓦	(5.2)	(6.6)	-	ナデ	調整	胎土 密	調整	色調	瓦当面キラコ付着

目板瓦(板塀瓦)

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種類	法量		調整	胎土 粗・ 密	色調		備考		
					全長	幅			厚さ	外面		内面	外面
72	95	N01-②	表土(I層)	目板(板塀)瓦	(31.0)	(26.0)	2.3	工具ナデ、ナデ、 ヨコナデ	調整 外面	胎土 粗	調整	色調	釘穴
73	96	N01一拵	盛土ほか (II層)	目板(板塀)瓦	(27.9)	30.9	2.6	ヨコナデ、ナデ	調整	胎土 粗	調整	色調	凸面水切り溝
73	97	N01-②	表土(I層)	目板(板塀)瓦	(18.5)	29.3	2.2	工具ナデ、ナデ	調整	胎土 粗	調整	色調	凸面水切り溝
73	98	N01一拵	盛土ほか (II層)	目板(板塀)瓦	(30.3)	(15.7)	2.3	ヨコナデ、ナデ	調整	胎土 密	調整	色調	凸面に「土山五右衛門」刻印

第23表 長塚出土遺物観察表4

瓦製品

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種類	器種	法量			残存率		調整		胎土	焼成	備考
						全長	幅	高さ	外面	内面	外面	内面			
73	99	N01-②c	整地土 (V層)	瓦製品	瓦製円板	7.9	7.5	1.9	完形	工具ナデ	工具ナデ	微細～4mmの白色粒、黒色粒を含む	良		

陶磁器・土器

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種類	器種	法量			残存率	成形・調整		胎土	年代	産地	備考
						口径	底部径	器高		外面	内面				
76	103	N01-①b・c	表土・盛土 (I・II層)	弥生土器	壺	(19.6)	-	(5.4)	口縁部 約1/6残存	ハケメ、ヨコナデ、 ナデ、指頭圧痕	ハケメ、ヨコナデ	微細～1.5mmの角閃石、石 英、長石、赤褐色粒を含む	良		
76	104	N01-①b・c	表土・盛土 (I・II層)	弥生土器	甕	-	-	(4.5)	口縁部破片	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ヨコナデ	微細な石英、微細～1.5mm の黒色粒、赤褐色粒を含む	良		
82	126	N02-①b	盛土 (II層)	磁器染付	碗	(9.9)	-	(4.1)	口縁～体部 約1/5残存	施釉	施文、施釉	精	良	中国	琉璃釉
82	127	N02-①b	整地土 (V層)上面	陶器	皿	(13.0)	(12.6)	(2.7)	口縁～底部破片	施文、施釉	施釉	精	良	肥前	
82	128	N02-①b	整地土 (V層)上面	陶器	皿	-	-	(1.6)	口縁～体部破片	施釉	施文、施釉	精	良	肥前	鉄絵
82	129	N02-①b	盛土 (II層)	陶器	土瓶 (蓋)	(8.1)	-	(2.1)	口縁部 約1/5残存	回転ナデ、施釉	回転ナデ	微細～1.5mmの白色粒を 含む	良		
82	130	N02-①c	表土・盛土 (I・II層)	陶器	土瓶	(9.0)	-	(2.7)	口縁～体部 約1/8残存	化粧土、施文、 施釉	回転ナデ、化粧土、 施釉	精	良		
85	134	N03a	表土 (I層)	陶器	皿	-	(4.0)	(2.2)	底部約1/4残存	回転ヘラケズリ、 回転ナデ	施釉	微細な白色粒、黒色粒を わずかに含む	良	肥前	
90	144	N04a	I層	磁器染付 (印判手)	筒形蓋付鉢	(10.7)	-	7.7	約1/2残存	施文、施釉	施釉	微細な砂粒を含む	良		「寿福寿福」の文字
94	150	N05 ST01	I層	磁器色絵	小杯	6.2	-	2.6	完形	施釉	施文、施釉	精	良		内底面に帆船に「久松」の 文字 内底面蛇の目軸剥ぎ
94	151	N05 土坑3	埋土 (I層)	磁器色絵	小杯	(7.0)	-	2.8	約1/8残存	施釉	施文、施釉	精	良		上絵剥落
94	152	N05	石垣 (H561) 裏込土 (I層)	磁器	小壺	-	-	(4.0)	高台～胴部 約2/3残存	施釉	回転ナデ	微細な砂粒をわずかに含む	良		
94	153	N05 ST01	I層	磁器染付	急須	(6.6)	6.2	8.1 把手 込の場合 10.1	ほぼ完形	施文、施釉 回転ナデ、ナデ	回転ナデ	精	良		型成形 (部分的)
100	161	N10	II層	磁器染付	碗	(13.0)	-	(3.5)	口縁～体部 約1/6残存	施釉	施文、施釉	精	良		内面「團」の文字

煉瓦

挿図 No.	遺物 No.	出土位置	出土層位	種類	法量			残存率	色調	胎土	焼成	刻印	備考
					長辺	短辺	厚さ						
93	149	N05 土坑3	埋土 (I層)	耐火煉瓦	(13.5)	9.9	7.0	約2/3残存	浅黄橙 (10YR8/3)	微細～3mmの砂粒、 黒色粒を含む	良	表面・側面	表面に「KS」の刻印 側面に刻印?

第24表 長塚出土遺物観察表5

金属製品		出土位置	出土層位	種別	名称	重量 (g)	法量	備考
挿図遺物 No.								
77	105	N01-① a	整地土 (V層) 上面	金属製品	葉莢	(9.9)	全長 (4.6) 銜含む 底径- カップ高 (0.5) コイル高 (1.0)	スナイドル銃の葉莢。錆化著しい
77	106	N01-① b	盛土 (II層)	金属製品	葉莢	3.9	全長 3.3 底径 0.9 カップ高- コイル高-	
77	107	N01-③ b	整地土層 (V層) 上面	金属製品	釘	6.5	全長 5.5 幅 0.5 奥行 0.5 頭幅 (0.7) 頭奥行 (1.0)	錆化著しい
83	131	N02-① b	盛土 (II層)	金属製品	葉莢	(7.7)	全長 (5.1) 底径 1.9 カップ高 0.6 コイル高 0.5	スナイドル銃の葉莢。打撃痕
83	132	N02-① b	整地土直上 (II層)	金属製品	釘	4.8	全長 4.0 幅 0.3 奥行 0.4 頭幅 0.5 頭奥行 0.6	銅製
83	133	N02-① a	栗石層 (IV層)	金属製品	釘	21.9	全長 12.6 幅 0.6 奥行 0.6 頭幅 0.6 頭奥行 1.2	錆化著しい
86	135	N03- b	盛土 (II層)	金属製品	葉莢	(8.1)	全長 (2.5) 底径 1.6 カップ高- コイル高-	スパンサー銃の葉莢。打撃痕?
86	136	N03-a	栗石層 (IV層)	金属製品	銃弾	11.3	全長 3.2 底径 1.1	エンフィールド銃の銃弾
91	145	N04-a	表土 (I層)	金属製品	葉莢	(8.6)	全長 (4.1) 底径 2.1 カップ高 0.6 コイル高-	スナイドル銃の葉莢。打撃痕
91	146	N04-c	整地土層上面 (III層)	金属製品	銅製留金具	7.4	全長 3.3 幅 2.4	胴 (バックル)
95	154	N05 ST01	I層	金属製品	銅製品 (不明)	2.6	全長 (8.5) 幅 0.9 厚さ 0.1	変形。付着物
95	155	N05 ST01	I層	金属製品	銅製煙管	27.3	全長 13.1 高さ 3.3 奥行 1.3	付着物
95	156	N05	I層	金属製品	錠	(44.3)	全長 (10.9) 幅 4.1 胴幅 0.9 胴奥行 0.8 釘長さ 3.1	錆化著しい
100	162	N10	I層	金属製品	焼夷弾部品	16.6	全長 4.0 幅 4.2 厚さ 1.6	錆化著しい

貝製品

挿図遺物 No.	出土位置	出土層位	種別	名称	重量 (g)	法量	備考
95	157	N05 ST01	貝製品	貝製鈕	0.4	直径 1.1 厚さ 0.3	完形

銭貨

挿図遺物 No.	出土位置	出土層位	銭種	銭造地、通称	始銭年主な年代	法量				備考		
						外径	内径	方孔縦幅 / 横幅	外厚上 / 左下 / 右下			
91	147	N04-c	整地土層上面 (III層)	銭 (寛永通宝)		2.3	1.9	0.6	0.11	0.12	0.12	寛永通宝

※第20～24表の遺物部位名称および計測箇所については、熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書1-飯田丸の調査-』熊本城調査研究センター報告書第1集 2014年並びに熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書2-一本丸御殿の調査-』第2分冊 熊本城調査研究センター報告書第2集 2016年に準じる。

## 第5章 総括

### 1. 特別見学通路確認調査

特別見学通路は、段階的公開の一環で復旧過程を安全に観覧できるように計画されたもので、設置期間は復旧完了までとし、復旧完了後は解体撤去することが前提の仮設構造物である。基礎は掘削を行わず現在の地表面に保護層を設けて設置する工法である。今回の確認調査は遺構面までの深度と遺構の残存状況の把握など遺構・遺構面の保護措置を行うための情報を得ることを目的としており、石垣等の特別史跡の本質的価値の復旧ではない。設置ルートとなる飯田丸・東竹の丸の土地変遷は、第11図に示された絵図や近現代の建物配置図でわかる。これらの建物配置を目安にトレンチを設定し、近世遺構面・整地層、近世建物礎石、近代建物関連遺構、大博覧会を含む公園整備関連の遺構および各土層からの出土遺物などの成果が得られた。昭和37年（1962）の大博覧会の影響は少なからず見られ、近代に礎石抜き取りも行われているが、江戸期の遺構・整地層も良好に残存しており、今後の既存設備更新・樹木などの維持管理には細心の注意が必要である。

過去の調査成果と合わせて評価することで今回の総括とする。

飯田丸の過去の調査事例としては、飯田丸一帯の復元整備事業に伴う平成11年度の発掘調査がある。飯田丸の外周を囲む石垣の裾を中心に曲輪内にトレンチを設けて土層の確認を行っている<sup>1</sup>。今回の調査成果と合わせたものが第102図である。今回の調査で確認した飯田丸トレンチ01の礎石は、それぞれ御道具蔵の礎石である可能性は高く、「御城内御絵図」（明和6年頃 熊本市蔵）に描かれた建物が明治初年まで存在したものと考える。現状で露出している元塩蔵跡の礎石と、御道具蔵で確認した礎石は、天端レベルが標高33.3～33.5mでほぼ同じである。建物は飯田丸の北半にあり、元塩蔵跡が飯田丸東端、御道具蔵が西端に近い。これらが建っていた当時の標高がおおよそ33.3～33.5mであったと想定できる。対して第102図⑤⑥⑦で得られている江戸期の土層の標高は33m以下である。⑤⑥⑦では明瞭な江戸期地表面は確認されていないため今回の調査成果との対比は慎重を要するが、曲輪全体の地表面が北から南へ下がっていた可能性がある。飯田丸トレンチ10の飯田屋敷御台所付近の調査成果にあるように、確認した包含層は建物廃絶時のもので、さらにその下位に複数の遺構面があった可能性があるため、曲輪内の高低差の検証は今後のデータ蓄積を待つ必要がある。

また、現状では元塩蔵とほぼ同じ標高の二様の石垣南側は、本丸御殿整備事業で設けたトレンチの成果から、二様の石垣新石垣構築段階の地表面はおおよそ標高32.7mと想定されている<sup>2</sup>。二様の石垣から地蔵門へ向かう通路は、質部屋東の階段下から二様の石垣南面に向けて緩やかに傾斜していたと想定され、塀と思われる構造物で仕切られた飯田丸の曲輪内と通路は南に向かうにつれて高低差ができていたようである。

飯田丸トレンチ01の礎石2が据えられた整地層から出土した軒目板棧瓦は、現状では具体的な製作時期は不明である。肥後の軒目板棧瓦は遅くとも17世紀末には使用される。御道具蔵は「御城内御絵図」に名称を示して描かれている。江戸前期の「御城図」（公益財団法人永青文庫蔵）にもその位置に建物があり、少なくとも18世紀半ばには存在している。軒目板棧瓦の出土状況と絵図の状況に矛盾はない。

東竹の丸では過去の調査事例が少なく、細かな土層の状況は不明であった。「御城内御絵図」（第11図③）には西側の「東嶽丸冠木御門」から入った東竹の丸には南東櫓群まで建物が表現されておらず、井戸が3基確認できる程度である。対して「御城図」（第11図②）では塀に囲まれた建物が表現されている。絵図の時期から「御城図」にある建物が18世紀後半作成の「御城内御絵図」までには撤去されたと考えられ、「御城内御絵図」の付札にも、三間梁に九間の御蔵を宝暦五年（1755）に畳んだと記されている。東竹



第102図 飯田丸土層対照図

土層の時期と特徴		主なできごと	
① 元埋蔵場所	33.3	平成 13 年 (2001) ～平成 17 年 (2005) 飯田丸一帯復元整備	
② 飯田丸レンガ01	33.7	I 層：昭和 37 年 (1962) 熊本大博覧会から現在までの土層 【特徴】砂利・真砂・現代遺物	昭和 37 年 (1962) 熊本大博覧会
③ 飯田丸レンガ10	33.5	II 層：明治 10 年 (1877) 西南戦争終戦から昭和 37 年 (1962) 熊本大博覧会までの土層 【特徴】暗褐色系粘質土：ガラス・煉瓦・焼土粒・炭化物粒 大量の礫（金峰山地震に起因する崩落栗石）、近代遺物	明治 22 年 (1889) 金峰山地震
④ 二様の石垣	33.0	III 層：明治 10 年 (1877) 西南戦争に関わる土層 【特徴】焼土・炭化物層、銃弾・葉巻など ※過去の飯田丸の調査では未確認 今後、確認できる可能性有	明治 10 年 (1877) 西南戦争
⑤ 百間御前様台	33.5	IV 層：飯田丸形成から明治 10 年 (1877) 西南戦争直前までの土層 【特徴】暗褐色系粘質土、近世の生活面・遺物包含層 生活面更新、複数回有（詳細不明）	明治 8～10 年 (1875-1877) 飯田丸石垣内壁除去か 明治元年 (1867) 明治維新
⑥ 膳御台(真)	32.9	V 層：二様の石垣（新）構築に関わる土層	寛永 9 年 (1632) 細川氏領有
⑦ 膳御台(南)	33.4	V 層：飯田丸の造成に関わる土層 【特徴】灰白色シルト・褐灰色土・暗褐色土を用いた造成土 無遺物層	飯田丸五階構台等拡張
⑧ 礎石露出(近世)	33.4	V <sub>1</sub> 層：二様の石垣 (旧) 構築に関わる土層	飯田丸石垣構築 築城開始

発掘調査による飯田丸の基本土層堆積状況



の丸トレンチ 07 で確認した礎石（礎石 1～3）は今回の調査だけで一連の建物を構成しているとは言い切れないが、礎石 2・3 の礎石の大きさ次第では L 字形に直交する。礎石間は礎石 1～3 間が約 2 m、礎石 1～2 間が約 2.7 m で、熊本城でみられる柱間の 6 尺 5 寸と比較した場合、礎石 1・3 の礎石は関連している可能性がある。

「東嶽丸冠木御門」周辺の二様の石垣前と東竹の丸を隔てる石垣は、「御城内御絵図」では二様の石垣側の高さ二間四尺、東竹の丸側の高さ一間と朱書きされている（第 11 図③）。東竹の丸側は「御城内御絵図」以前の絵図では石垣の表現は無く土羽であった可能性がある。明治 22 年熊本地震では幅 4 間、高さ 1 間に渡って石垣が崩落したとされており<sup>3</sup>、現状で見える石垣も明治 22 年以降の修復の痕跡が明瞭である。ただ高さ 1 間の崩落は「御城内御絵図」の表記と同じで、略測としても明治 22 年熊本地震前までは旧状を保っていた可能性が高い。現状で東竹の丸側の石垣は高さ 0.4～1.2 m で、下部が盛土等で埋められており、「東嶽丸冠木御門」の虎口から東側が明治 22 年熊本地震以降に埋められて現在の形状になっているようである。東竹の丸トレンチ 07 での礎石や東竹の丸トレンチ 06・07 での近世整地土、源之進櫓西の露出礎石の状況からは少なくとも「御城図」に表現された建物と虎口に高低差があったことが想定できる。絵図には曲輪内の起伏は表現されておらず、石垣や階段の表現もないため、本来どのような景観であったかは復元できない。この高低差が緩やかなものか明瞭な段差を持つものかは現状では不明である。

飯田丸元塩蔵で検出した板碑を転用した礎石 3（第 30・31 図）は、本文にあるように大永年間の所産と考えられる。城内では板碑をはじめ五輪塔などの石造物が石材として使用されている。礎石として使用されたものとしては、地蔵門の釈迦立像線刻板碑（大永 2 年（1522））がある。築石に使用したものは、東櫓御門付近の石垣天端に使用された釈迦三尊坐像線刻板碑（天文 5 年（1536））と阿弥陀三尊立像線刻板碑（年代不詳）があり、平成 28 年熊本地震で崩落した櫓方会所（現加藤神社境内）石垣で確認した観音像線刻板碑（年代不詳）も築石に使用したものと思われる。その他にも大御台所付近の如意輪観音画像線刻板碑（大永 4 年（1524））、御天守廊下付近の阿弥陀三尊種子板碑（天文 5 年（1536））などがある。年代が分かるものは 16 世紀前半で、今回の検出例も大過ない。五輪塔地輪も階段等に多く使用されており、熊本城築城前の茶臼山に存在したと想定された中世墓地が供給源と考えられている<sup>4</sup>。

## 2. 長堀確認調査

重要文化財建造物長堀復旧にあたり、長堀の建築年代、特に堀本体及び控石柱の基礎構造を把握する必要があったため実施した確認調査で、この結果を踏まえて復旧にあたっての補強方法が検討された。堀本体の被災・修復履歴は本文にまとめているが、石垣の記録は寛永 11 年（1634）と寛延 2 年（1749）に今のところあるのみである。長堀石垣は明治 22 年熊本地震の際に崩落や膨らみの被害を受け、旧日本陸軍によって修復されている。軍の修復範囲は石垣の表面観察で想定しており（第 61 図）、寛永 11 年と寛延 2 年の修復範囲は確認できていない。明治 22 年熊本地震後の軍の修理後、石組み排水口、土管等による排水口を修理・設置するために石垣を谷状に解体した痕跡が見られるが、記録は確認できておらず時期は不明である。

第 2 次世界大戦中から戦後にかけて、竹の丸には旧日本陸軍の弾薬庫などが建ち並んでいた。軍の建物は昭和 34・35 年に撤去され、史跡整備が行われた。長堀トレンチ 01～03 については現地表面下に煉瓦を含む客土層が確認されており、史跡整備の際に建物に使用されていた煉瓦や建物周辺の土塁の土は竹の丸に敷きならされたようである。敷きならされた範囲や土量は不明だが、平成 26 年に馬具櫓復元整備事業で馬具櫓台石垣北東裾に電気設備を設置した際に確認した土層<sup>5</sup>でも煉瓦片を含む土層が 45～50 cm の厚さで堆積しており、竹の丸の広範囲に及んでいる可能性がある。トレンチ 01 では石垣天端と江戸期の表土（6 層）上面の比高差は 40 cm 程度だが、西に向かって曲輪側の地表面は下がっており、先述の馬具櫓裾で

は長堀石垣天端と江戸期の想定地表面との比高差は約 1.8 m となる。いずれのトレンチでも南面石垣に対する曲輪側の北面石垣の痕跡は見当たらず、石垣を細かく表現している「御城内御絵図」でも曲輪側に石垣は見られない。西南戦争直後に曲輪側から撮影した古写真<sup>6</sup>にも写っておらず、もともと存在していなかった可能性が高い。曲輪側は石塁ではなく土羽であったのだろう。

長堀は、明治初頭に解体され、明治 22 年熊本地震で石垣が大きく崩れる被害を受け、旧日本陸軍が修理した石垣上に復旧されたものが、史跡整備で控石柱を含めて何度も修理を繰り返して維持されてきたことを今回の調査で追認した。現在見られる曲輪側の石塁の景観は史跡整備等の結果であり、江戸時代は石塁ではなく南側の石垣と北側の土羽で構成された土台の上に長堀が建っていたようである。

註

- 1 熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書 1－飯田丸の調査－』熊本城調査研究センター報告書第 1 集 2014 年
- 2 熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書 2－本丸御殿の調査－』熊本城調査研究センター報告書第 2 集 2016 年
- 3 宮内公文書館蔵「震災ニ関スル諸報告」（識別番号 50272）
- 4 美濃口雅朗「熊本城飯田丸出土の石造物」『熊本城調査研究センター年報 3－平成 28 年度－』2017 年
- 5 熊本市熊本城調査研究センター『熊本城調査研究センター年報 1－平成 25・26 年度－』2015 年
- 6 熊本市『特別史跡熊本城跡総括報告書 歴史資料編 絵図・地図・写真』2019 年の P195「50 [竹の丸越しに見た花畑敷跡の仮兵営]」



第103図 控石柱集成図